PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 3 October 2009

Articles

文言テクストの２つの解釈 1
—「漢文訓読」とプリンストン大学「古典中国語」—
佐藤 勝之

ESL/EFL リーディング教科書の批判的談話分析 15
阿部　聡、田中　真由美

ジャンルと英語教育：美術書にみる文法資源選択の偏り 25
早川 知江

日本語の形容詞と動詞が具現する過程型： 39
The Kyoto Grammar の選択体系網を用いた分析
藤田　透

日本語における無助詞の機能　—　主題性を中心に　— 49
福田一雄

日本語における経験機能文法の構築 59
南里敬三

日本における SFL の英語教育への応用：５文型と be 動詞を中心として 73
佐々木真

Japan Association of Systemic Functional Linguistics

Proceedings of JASFL 2009 第３号　　発行によせて

Proceedings of JASFL 第１号が発行されて、早、今年で第３号を迎えることができました。毎年着実に日本機能言語学会の大会を開催することができ、２００８年度大会（第１６回大会）にも多くの参加者が集い、ＳＦＬ研究者による実りある発表と、それに対する議論がかわされたこと、大変嬉しく存じます。

２００８年度秋季大会は１０月１１日、１２日の両日、東京のお茶の水女子大学で開催され、そこでの発表者達がその内容を論文に改訂した成果を遺憾なく発揮された結果として、本 *Proceedings of JASFL 2009* が発行されました。

例年のように、若き大学院生の元気な論文から、現在ＳＦＬの第一線で活躍しておられる言語学者までが英語、日本語の語彙文法、テクスト分析、ジャンル分析、また英語教育関連などのトピックについて、日本語と英語で書かれた論文が７編掲載されています。学会参加者から今後の研究に大いなる刺激と示唆を得たであろう若き研究者の研究成果論文、また長年の研究に一区切りをつける目的で書かれた意欲的な論文など、いずれを見てもＳＦＬの研究には興味ある論文が掲載されており、必ずや、ＳＦＬの今後の研究のよき指針となると信じております。

本年度の特別講演は、青山学院大学の外池滋教授に「日英語における左右の（非）対称性について」と題して講演を頂きました。日英語における構造の（非）対称性を例にとり、日本語と英語という異なる言語が持つ形態的特徴を意味の観点から鋭く切り込んだ大変興味深い講演でした。例えば英語の topicalization の分析についても、英語では左方移動された要素を topicalization と分析できる例文も、日本語では単に前置と呼ばれる変形ではなく、scrambling の一種と分析されるというご指摘に始まり、日英語の relative clause 分析なども紹介され、その他多くの例をとりあげ日英語の(非)対称という観点から分析されました。外池先生ご自身は有名なミニマリストで、それに関する多くの論文を発表されていますが、今回の topicalization という概念はＳＦＬでも thematization という textual metafunction の観点からの分析に通じるものがあります。その意味で今回の講演は、ＳＦＬの日本語分析にも参考すべき点が多々あり、参加者の多くが大いに啓発され、大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。

本号もＳＦＬ研究に真摯に取り組んだ意欲的な論文が多数掲載されています。ＳＦＬ研究者のみならず、言語という inscrutable な対象に興味をもつすべての学者、院生、また学部生諸君にも本 *Proceedings* がＳＦＬ研究は言うに及ばず、今後の「ことば研究」にお役に立つことを願ってやみません。

日本機能言語学会会長
龍城　正明

PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 3 October 2009

Articles

文言テクストの２つの解釈 1
—「漢文訓読」とプリンストン大学「古典中国語」—
佐藤 勝之

ESL/EFL リーディング教科書の批判的談話分析 15
阿部　聡、田中　真由美

ジャンルと英語教育：美術書にみる文法資源選択の偏り 25
早川 知江

日本語の形容詞と動詞が具現する過程型： 39
The Kyoto Grammar の選択体系網を用いた分析
藤田　透

日本語における無助詞の機能　—　主題性を中心に　— 49
福田一雄

日本語における経験機能文法の構築 59
南里敬三

日本における SFL の英語教育への応用：５文型と be 動詞を中心として 73
佐々木真

Japan Association of Systemic Functional Linguistics

文言テクストの２つの解釈

―「漢文訓読」とプリンストン大学「古典中国語」―

Two Ways of Interpreting Classical Chinese

― Traditional Japanese Reading and that of Princeton University ―

佐藤 勝之
Katsuyuki Sato
武庫川女子大学
Mukogawa Women's University

1　はじめに

「文言」すなわち文語中国語の構造分析とテクスト解釈には日本が長い歴史を持っており、これが「漢文訓読」をはじめ、日本語テクストの形成に与えた影響は計り知れないものがある。他方、西欧語文法の影響の下、中国語文法の再解釈が近代の中国や欧米の中国語学者によって行われ、その成果は、例えばアメリカの大学入門用教材に結実している。これらの構文分析やテクスト解釈をSFLの視点から「メタ分析」「メタ解釈」することが可能だろうか。可能だとすれば、具体的にどのような知見が得られるか。本論ではその一端を探ることにしたい。

2　文言の基本構造の分析

本節では、文言の基本構造の分析例として、SFLの基盤となるHallidayの取り組み、中国語学に新しい局面を切り開いた藤堂明保の分析、そして、伝統的な漢文訓読を継承する教科「国語」の「漢文」の見方を順に紹介していこう。

2.1　Halliday(1959)の分析

Halliday(1959)は、『元朝秘史』（14世紀後半・明代の漢訳本）のテクストを綿密に検討して、当時の文語中国語の節の構造を以下のように整理している[(1)]。

"a clause, active in voice, may be found with one of three simple structures (i) NVN, (ii) NV or (iii) VN" (Halliday 1959 [Webster 2005: 42]; 番号は佐藤)
"Where there is an exponent of A in the clause the normal order will be (N)AV(N); in ergative clauses NANV, in passive clauses NNAV."(ibid., p.45)

彼はさらに、『元朝秘史』分析のための文法範疇を整理し(Halliday 1959 [Webster 2005: 40-41])、これを用いて以下のような分析例(1)を提示している。日本語の分析に示唆的なのは、いわゆる「助字(助辞)」(clausal particles)を aspectival (liau 了(perfective); jo 着(imperfective))と modal (ma 麼, madau 麼道, feu 否(interrogative); je 者, jo 着, yieje 也者, za 咱(imperative))に大別している点、また、テクスト例で「白馬」の「白」をVの範疇で整理している点が注目される。

(1) Specimen analysis and translation (Halliday 1959 [Webster 2005: 135])

Sentence: Compound

Clause: Free verbal imperfective (bound verbal genitival)

			N			N=A		
Nu Au	V (V) N p(cl)			F	F Po	V p(cl)	N	
yi go	ki bai ma		di	rin /	šeu li	jijo	taumagan /	
一 箇	騎 白 馬		的	人	手 裏	執 着	套馬竿	

One man riding a white horse, and with a lassoing pole grasped in his hand,

Clause: Free verbal

		A	
A	V	Pr	N
zianx	gan	dau	genxian
将 次	趕	到	跟前

almost caught up with them.

2.2 藤堂明保の分析

藤堂(1956)は、長年の中国語研究から、以下の6つの構造を文言の基本構造として抽出した。文言ではこれらの構造が必要かつ十分であるとしている。ここでは、いわゆる類義関係・対義関係をなす語の並立を「並ぶ構造」として、また、モダリティーを示す語を含む連語関係を「認定する構造」として、基本構造に含めていることが興味を引く。

1. 向かう構造　飲 - 酒（酒を飲む），上 - 山（山にのぼる）
2. 起こる構造　有 - 人（人がいる），下 - 雨（雨がふる）
3. 修飾する構造　白 - 馬（白い馬），速 - 行（速やかに行く）
4. 並ぶ構造　斉 - 魯（斉と魯と），聡明 - 勇敢（かしこくていさましい）
5. 認定する構造　可 - 殺（殺してかまわぬ），当 - 知（知らねばならぬ）
6. 主述の構造　荀卿 - 趙人（荀卿は趙人だ），燕人 - 畔（燕人がそむいた），伯夷 - 隘（伯夷はせまくるしい）

(藤堂 1956 [藤堂 1987: 298])

2.3 高校国語教科書の記述

今日の我が国の中等教育（文部科学省の『学習指導要領』に基づく）では、「漢文」は「古文」とともに「国語」の教育課程に組み入れられ、古典日本語の一部と位置付けられている。したがって、「漢文」を中国語として読んだり、「漢文法」自体を教えたりすることはなく、ただ日本語としての読み方である「訓読法」の教育と「訓読文」による解釈が行われるだけである。以下に、代表的な語句・文と漢語の「基本構造」の説明例を提示する。（ちなみに、高校教科書の提示する基本例がHallidayと藤堂のどの分類に対応するかを［　］内に表示した。）

(2.1a) 青 雲 志。　［藤堂3］
(2.1b) 花 開、鳥 啼。　［Halliday (ii)；藤堂6］
(2.1c) 読 書。　［Halliday(iii)；藤堂1］
(2.1d) 疑 心 生 暗 鬼。　［Halliday (i)；藤堂6+1］

（東京書籍 平18: 256-7）

(2.2a) 主語ー述語の関係　雷鳴　年少　天長地久　［Halliday (ii)；藤堂6］
(2.2b) 修飾語ー被修飾語の関係　清風　再会　深山幽谷　［藤堂3］
(2.2c) 並列の関係　変遷　禍福　栄枯盛衰　［藤堂4］
(2.2d) 述語ー補語の関係　読書　帰郷　勧善懲悪　［Halliday(iii)；藤堂1］

（「漢語の基本構造」大修館 平18: 264-5）

3 IFGによる分析

本節では、文言の基本的な例文をIFG (2版) (Halliday 1994)に倣って分析してみよう。

3.1 基本例文の分析

まず、高校国語教科書の例文を再掲する。

(3.1) 花 開、鳥 啼。(=(2.1b))
(3.2) 疑 心 生 暗 鬼。(=(2.1d))

例文(3.1)と(3.2)は、《観念構成的》《対人的》《テクスト形成的》の3つの機能に関して次のように記述できる。なお、対人的機能に関して《定性(Finite)》は生じない[(2)]。

	花	開	鳥	啼
TEXTUAL	Theme	Rheme	Theme	Rheme
INTERPERSONAL	Subject	Predicator	Subject	Predicator
IDEATIONAL	Participant: Behaver	Process: behavioural	Participant: Behaver	Process: behavioural

図 3-1 節(3.1)のテクスト形成的・対人的・観念構成的機能

	疑　心	生	暗　鬼
TEXTUAL	Theme	Rheme	
INTERPERSONAL	Subject	Predicator	Complement
IDEATIONAL	Participant: Actor	Process: material	Participant: Goal

図 3-2 節(3.2)のテクスト形成的・対人的・観念構成的機能

もう少し複雑な構造を持つと見られる文言の例文はどのように記述できるか考えよう。

(3.3) 玉不レ琢カ、不レ成サレ器ヲ。人不レ学バ、不レ知ラレ道ヲ。

(3.4) 青ハ取リテ二之ヲ於藍ヨリ一、而青シ二於藍ヨリ。

(3.5) 君子ハ恥ヅ三其ノ言之過グルヲ二其ノ行ヒニ一。

玉	不琢	不成	器	人	不学	不知	道
Theme	Rheme			Theme	Rheme		
Goal/ Carrier	Process: material	Process: relational: attributive	Attribute	Actor/ Senser	Process: material	Process: mental: cognitive	Phenom.
Medium	Process	Process	Range	Medium	Process	Process	Range

図 3-3 テクスト(3.3)のテーマ構造と経験構成の他動的および起動的解釈

青	取	之	於藍	而	青	於藍
Theme	Rheme					
Goal/ Carrier	Process: material	(Goal)	Location: place		Process: attributive	Manner: comparison

図 3-4 テクスト(3.4)のテーマ構造と経験構成（他動的解釈）

君子	恥	其言之	過	其行
Theme	Rheme			
		Theme	Rheme	
α		'β [projected proposition]		
Senser	Process: mental: affective	Phenomenon		
		Actor	Process: material	Goal

図3-5 テクスト(3.5)のテーマ構造と経験的・論理-意味的構成

図3-3から3-5で示したように、訓点のみでは判然としない節の構造がテクスト形成・観念構成の記述で明確になる。すなわち、(3.3)は主題-題述が二重で「対句」形式となっており、(3.4)は主題-題述が一重で「重文」であることが《テーマ-レーマ》構造の記述ではっきりとする。また、(3.5)は「節的句」を含むことが、《投射》構造の記述で明確になる。

なお、本論では文言の「形容詞」を《過程》と捉え((3.4)「青於藍」の「青」)、1つの過程型として《属性過程(Attributive process)》を提案する[(3)]。

3.2 テーマ・レーマ構造の分析

ここでは、特に《テーマ-レーマ》構造と、《経験的》構成および《論理-意味的》構成との関係に注目して論を進める。中国語のシンタグマは類型論的に、「主語-述語構造」よりは「主題-題述構造」であるとしばしば指摘されるが、確かに、(3.6)の「推敲」の例で明らかなように、連辞最初の「主語」(「賈島」)に付随して様々な「述語動詞+(広義の)補語」(V+O)が繰り返し現れる構造を、従来型の(英語を典型とする)「節」の概念を当てはめて説明しようとするには無理があろう。特定の《テーマ》に、種々の過程が多様な論理-意味的関係で連なり(《レーマ》を形成し)、全体として1つの談話を形作るという方策を取っているように見える。

なお、訓読では、原文の持つ多義的なV+Oの反復を、曖昧な「連用形(+テ)」によって一律に処理しているが、SFLでは少なくとも《拡充》の3種、すなわち《敷衍(=)》《拡張(+)》《増強(×)》とその下位範疇によって、$[V+O]_1$と$[V+O]_2$との論理-意味的関係を明確に捉えることができる。

(3.6) 賈島(かとう)赴(おもむキテ)レ挙(ニ)至(リ)レ京(けいニ)騎(のリテ)レ驢(ろニ)賦(ふシ)レ詩(ヲ)得(えタリ)二僧推月下門之句(ハ スノ ヲ)一。

(「推敲」『唐詩紀事』)

賈島	赴	挙	至	京	騎	驢	賦	詩
Theme	Rheme							
1			×2 [cause: reason]		=3 [clarification]		+4 [addition]	
Senser/ Actor	Process: mental	Phenom.	Process: material	Location: place	Process: material	Goal	Process: material	Goal

得	僧推月下門之句
Rheme (continued)	
×5 [manner: means]	
Process: material	Goal

図3-6 テクスト(3.6)のテーマ構造と経験的・論理的構成

テーマ-レーマ構造分析は、いわゆる「存現文」を説明するにも有効である。過程型からすると「有」は、「有人」を「人あり」と訓ずるように、共時的には《存在過程》と解釈され、「楚人」は「鬻盾与矛者」が存在する《所》である（図3-7では、一応この解釈を採用した）。他方、「有」は「たもつ」とも訓むように、歴史的・字源的には「枠の中にものを抱え込む」意の他動詞《物質過程》である。(3.7)の冒頭は、「楚人」たち《行為者》が（その一人として）「鬻盾与矛者」を抱え込んでいるとする解釈が可能であり、「主語＋述語＋補語」(S+V+O)という統語構造も、本来の解釈を反映しているといえる。

こうした観念構成上の多義性はそれ自体興味深いが、他方、談話の流れからすれば、「楚人」がまず何より談話全体の《テーマ》であり、これによって話の出発点が定められるという点に異論はなく、テクスト形成の視点から存現文を捉えることも有意義であろう[4]。

なお、「吾盾之堅」の形容詞「堅」は《属性過程》とする（注3を参照）。

(3.7) (i) 楚人(ひとニ) 有(リ)下 鬻(ひさグ)二 盾(ト) 与(とヲ)一レ 矛 者上。

(ii) 誉(ほメテ)レ 之(ヲ) 曰(ハク) 「吾(わガ) 盾之 堅(キコト)、莫(なキ)二 能(クとほスモノ) 陥(ト)一 也。」

（「矛盾」『韓非子』）

楚人	有	鬻	盾与矛	者
Theme	Rheme			
Location: place	Process: existential	Existent		
		β:Modifier		α:Head
		Process: material	Goal	Actor

(鬻盾与矛者)	誉	之	曰	吾盾之	堅	莫	能陥	(吾盾)	也
(Theme)	Rheme								
				Theme		Rheme			
1			=2 [expos.]	"3					
(Sayer)	Proc.: verb.	Target	Proc.: verb.	Verbiage					
				× β[cause: reason]		α			
				Carrier	Proc.: attrib.	Actor	Proc.: mater.	(Goal)	

図3-7 テクスト(3.7)のテーマ構造と経験的・論理的構成（cf.IFG:243）

4　テクストの構造分析の比較とSFLの「メタ分析」

本節では、代表的な故事のテクストを例に取り、日本の国語教科書と米国プリンストン大学の文言入門用教材が、それぞれどのような構造分析とテクスト解釈を行っているかを比較・提示し、さらに、SFLのメタ機能のパラダイムがそれぞれの分析法の特徴をどのように浮かび上がらせることができるか、具体的に検討したいと思う。

4.1 「くひぜを守る」と「守株待兔」

テクスト(4.1)はいわゆる「くひぜ(かぶ)を守る」であるが、Aは国語教科書の訓読文、Bはプリンストン大Basic Reader版である。

(4.1A)「守ルレ株くひぜ(かぶ)ヲ」

(i) 宋人有二耕レ田者一。(ii) 田中有レ株。(iii) 兔走リテ触レ株ニ、折リテレ頸クビヲ而死ス。

(iv) 因リテ釈テ二其ノ耒スキヲ一而守リレ株ヲ、冀コヒネガフ二復タ得コトヲ一レ兔ヲ。(v) 兔不ズシテレ可カラ二復タ得一、而身ハ為ナル二宋国ノ笑ヒト一。

[書き下し文] (i) 宋人に田を耕す者有り。(ii) 田中に株 有り。(iii) 兔 走りて株に触れ、頸を折りて死す。(iv) 因りて其の耒を釈てて株を守り、復た兔を得んことを冀ふ。(v) 兔復た得べからずして、身は宋国の笑ひと為る*。

(東京書籍『新編国語総合』)

*口語訳：「宋国の人々に笑われた」(大修館『新編国語総合』)，「宋国じゅうの人々の笑い者となった」(東京書籍『新編国語総合』)

(4.1B)「守株待兔 Shou Zhū Dài Tù」

(i) 宋人有耕者。(ii) 田中有株, (iii) 兔走触株, 折頸而死, (iv) 因釈其耒而守株, 冀復得兔。(v) 兔不可復得, 而身為宋國笑。

(i) Sòng rén yǒu gēng zhěe. (ii) Tián zhōng yǒu zhū, (iii) tù zǒu chù zhū, zhé jǐng ér sǐ. (iv) Yīn shì qí lěi ér shǒu zhū, jì fù dé tù. (v) Tù bù kě fù dé, ér shēn wéi Sòng guó xiào.

[English Translation] **Waiting for a Hare at the Tree Stump**

(i) There was a person in the state of Sòng who was tilling his field. (ii) In the field there was a tree stump. (iii) A hare ran by, dashed into the tree stump, broke its neck, and then died. (iv) The person tilling the field then put down his plough to watch the tree stump, hoping to get a hare again. (v) A hare he could not get again; instead, he was derided by the people of the state of Sòng.

(Yuan, et al., *Classical Chinese: A Basic Reader*)

テクストAでは、「返り点」(レ点、一二点)と「送り仮名」(格助詞等)によってある種の構造分析、「振り仮名」と「送り仮名」(活用語尾等)によってテクスト解釈を行っていると見ることができる。Bには訓点に相当する解釈符号がない代わりに、以下の(i)-(v)のような構造分析と補足説明が付されている。

(i) [於] 宋人 有 耕者 。
prep o v o
s p

(ii) [於] 田中 有 株 ,
prep o v o
s p

(iii) 兎 走 触 株, 折 頸 而 死,
先/因 後/果
v v o v o conj v
s p1 p2 p3 p4

※ This is a **Sequential Compound Sentence.** This type of sentence has a predicate that contains two or more verbs to show a series of sequential actions by the same subject.

(iv) [耕者] 因 釈 其耒 而 守 株, 冀 復得兎。
行動 目的
adv v o conj v o v o
s p1 p2 p3
[s] adv v o
[耕者] 冀 [己] 復 得 兎。
[s] v o

※This is a **Purposive Complex Sentence.** The second (main) clause expresses a purpose or goal, and the first (subordinate) clause indicates or describes the means whereby this purpose or goal is to be attained. The connective "而" or "以" is generally used to introduce the second clause.

(v) 兎 [_] 不 可 復 得, 而 身 為 宋國 笑。
o [s] adv aux adv v conj prep o v
p1 s p2

[耕者] 不 可 復 得 兎, 而 身 為 宋國 笑。
adv aux adv v o conj prep o v
[s] p1 s p2

※身為宋國笑: This is one of the **passive sentences.** This sentence pattern is: "N1 為 N2 V", where N1 is the receiver or patient of the verb and N2 is the doer or agent of the verb. The preposition "為" here introduces N2, the doer. In this sentence, "N1" is "身", the tiller

himself; the verb is "笑", to laugh at or to deride. The preposition "為", which can be rendered as "被" in spoken Chinese, both serves as a passive sentence marker and introduces N2, or the agent of the verb, "宋國", meaning "the people of the state of Sòng."

(Yuan, et al., 2004: Vol.3:13-7)

4.2 SFLによるメタ分析

前節の提示の仕方では、(4.1A)「漢文訓読」と(4.1B)「中国語文法」のそれぞれの分析法にどういった違いがあるのか、必ずしもはっきりしない。しかし、これにSFLのパラダイムを当てはめてみると、それぞれの方法の具体的な特徴を捉えることができる。さらに、これら以外の解釈の可能性も示すことができよう。以下の各図を参照されたい。

まず、(i) 存現文を作る「有」であるが、3.2でも述べたように、観念構成上複数の解釈が可能である。「抱え込む」「保つ」という本来の字義からすれば、「有」は《物質過程》であり、その前の名詞群は《行為者》、後の名詞群は《対象》である(図4.1aの《一致した(congruent)》解釈)。また、「宋人」(=宋国)に「耕田者」がいたという一般的な意味からすれば、「有」は《存在過程》、その前の名詞群は《状況要素:所》、後の名詞群は《存在者》となろう(図4.1bの《比喩的な》解釈(1))。(「漢文訓読」(A)と「中国語文法」(B)は同じ解釈をしている。)

(i) 宋人有耕田者

<table>
<tr><td>宋人</td><td>有</td><td>耕</td><td>田</td><td>者</td></tr>
<tr><td>Theme</td><td colspan="4">Rheme</td></tr>
<tr><td rowspan="3">Actor</td><td rowspan="3">Process:
material:
dispositive</td><td colspan="3">Goal</td></tr>
<tr><td colspan="2">β:Modifier</td><td>α:Head</td></tr>
<tr><td>Process:
material</td><td>Goal</td><td>Actor</td></tr>
</table>

図4-1a テクスト(i)の「一致した」解釈

<table>
<tr><td>宋人</td><td>有</td><td>耕</td><td>田</td><td>者</td></tr>
<tr><td>Theme</td><td colspan="4">Rheme</td></tr>
<tr><td rowspan="3">Location:
place</td><td rowspan="3">Process:
existential</td><td colspan="3">Existent</td></tr>
<tr><td colspan="2">β:Modifier</td><td>α:Head</td></tr>
<tr><td>Process:
material</td><td>Goal</td><td>Actor</td></tr>
</table>

図4-1b テクスト(i)の比喩的な解釈(1) (A, Bによる解釈)

さらに、Halliday (1994 [山口・筧訳 2001]: ch.5)に倣って、「有」を《関係過程》と見なせば、《状況的 (circumstantial)》すなわち「*x*は*a*にある (*x* is at *a*)」のタイプであり

（「耕田者」は「宋人」の中にいる）、かつ《属性的 (attributive)》すなわち「*a* は *x* の属性である (*a* is an attribute of *x*)」の様式（モード）をとる（「宋人」は「耕田者」の属性である）といえる（図 4.1c の比喩的な解釈(2)）。

<table>
<tr><td>宋人</td><td>有</td><td>耕</td><td>田</td><td>者</td></tr>
<tr><td>Theme</td><td colspan="4">Rheme</td></tr>
<tr><td rowspan="3">Attribute:
place (‘at a’)</td><td rowspan="3">Process:
relational:
circumstantial/
attributive (‘is’)</td><td colspan="3">Carrier (‘x’)</td></tr>
<tr><td colspan="2">β:Modifier</td><td>α:Head</td></tr>
<tr><td>Process:
material</td><td>Goal</td><td>Actor</td></tr>
</table>

図 4-1c テクスト(i)の比喩的な解釈(2) (cf. Halliday 1994: 5.4.1)

(iii)については、テクスト A は一連の動詞を「連用形（＋テ）」で訓読することにより、B は「連続的重文 (Sequential Compound Sentence)」と注釈することによって、同じように、この同じ主語による連続的動作（《行動過程》および《物質過程》の連鎖による《時間的増強》）を説明している。

(iii) 兎走触株，折頸而死

<table>
<tr><td>兎</td><td>走</td><td>触</td><td>株</td><td>折</td><td>頸</td><td>而</td><td>死</td></tr>
<tr><td>Theme</td><td colspan="7">Rheme</td></tr>
<tr><td colspan="2">1</td><td colspan="2">×2 [temporal: later]</td><td colspan="2">×3 [temporal: later]</td><td colspan="2">×4 [temp.: later]</td></tr>
<tr><td>Behaver/
Actor</td><td>Process:
behavioural</td><td>Process:
material</td><td>Goal</td><td>Process:
material</td><td>Goal</td><td></td><td>Process:
behavioural</td></tr>
</table>

図 4-2a テクスト(iii)のテーマ構造と経験的・論理的構成 (A, B による解釈)

(iv)は、A と B で節複合の構造解釈が異なる。A では、接続を表す助字「而」があることで「釈其耒」は「連用形＋テ」（「（そのすきを）すてて」）となり、「守株」と《並立結合》されるが（図 4-2b）、B では、注釈のように「目的的複文 (Purposive Complex Sentence)」であって、行動を示す「釈其耒」が従節となって、目的を示す主節「守株」と《従属結合》する（図 4-2c）。

(iv) [耕(田)者]因釈其耒而守株

[耕(田)者]	因	釈	其耒	而	守	株
Theme		Rheme				
1				×2 [paratactic; cause: reason]		
Actor		Process: material	Goal		Process: material	Goal

図 4-2b テクスト(iv)のテーマ構造と経験的・論理的構成 (Aによる解釈)

[耕(田)者]	因	釈	其耒	而	守	株
Theme		Rheme				
× β [hypotactic; cause: reason]				α		
Actor		Process: material	Goal		Process: material	Goal

図 4-2c テクスト(iv)のテーマ構造と経験的・論理的構成 (Bによる解釈)

(v) 身為宋国笑

身	為	宋国	笑
Theme	Rheme		
Actor	Process: material: creative	Goal	
		Actor	Process: behavioural

図 4-3a テクスト(v)の「一致した」解釈

身	為	宋国	笑
Theme	Rheme		
Identified	Process: relational: intensive/ identifying	Identifier	
		Classifier	Thing

図 4-3b テクスト(v)の比喩的な解釈(1) (Aによる)

身	為宋国	笑
Theme	Rheme	
Goal	Actor	Process: material: dispositive
Target	Sayer	Process: verbal

図 4-3c テクスト(v)の比喩的な解釈(2) (B による)

さらに(v)について、「為」は、字源的には「ものに手を加えてうまくしあげる」意であり「なす」と訓ずる他動詞である。「宋国笑」はその補語と見なせるので、《一致した》解釈は、「耕田者」自らが(《行為者》)宋の人々が笑う状況を(《対象》)作り出したという図 4-3a のようになる。

図 4-3b は、テクスト A「身は宋国の笑ひと為る」という訓読文のメタ解釈である。ここでの「為」は、「あるものが別のものに変化する」、つまり「なる」という補語をとる自動詞である。換言すれば「為」は《関係過程:同定的》で、「耕田者」自身が(《被同定者》)宋国の笑い者に(《同定者》)なったの意である[5]。

テクスト B は、「為」を受身文の「施事者 (agent)」(「宋国」)を導く「介詞 (preposition)」とし、「笑」を動詞としている。したがって、「宋国」が《物質過程》/《発言過程》「笑」の《行為者》/《発言者》であり、《テーマ》の「身」は、その《対象》/《言対象》ということになる(図 4-3c)。

5 おわりに

本論では、文言の基本構造に関する先行研究(Halliday、藤堂、国語教科書)を概観し、IFG によって教科書の基本例文がどのように分析できるかを見た。さらに、「漢文訓読」と「中国語文法」の観点からの故事のテクストの解釈を、IFG を用いて「メタ解釈」することを試みた。SFL が、対象分析の方法としてのみならず、メタ分析の方法としても優れたものであることが見て取れたとすれば、大変幸いである。

注

1 文法範疇には自由(free)形と拘束(bound)形を認め、次のものを挙げている。
V: free verb substantive, verb group or pro-verb; v: bound verb;
N: free noun substantive, noun group or pronoun; n: bound noun;
A: free adverb or complex group; a: bound adverb; p: particle
Pr: prepositive (verb), preverbal (adverb)
Au: auxiliary (verb, noun)
Po: postpositive (verb, noun)

Nu: numeral (noun)
Fi: final (adverb)
Co: conjunctive (adverb)

(Halliday 1959 [Webster 2005: 45])

2　中国語は一般に定性なしで節を形成するが、これを英語になぞらえると、IFG の言う「小テクスト(little texts)」（例えば、*CABINET SEARCHING FOR A WAY OUT*（内閣は出口を模索）, *LAWYERS TO STAND FIRM ON FEE RISE*（弁護士は手数料値上げに断固たる姿勢）(Halliday 1994: 393 [山口・筧訳 2001: 621]) に相当すると見なすことができる。（動詞群の定性の欠如は、テクストが発話時のコンテクストに依存していることを示すと一般には考えられるが、故事や諺、あるいは『論語』のように定式化・規範化したテクストは、英語で一般的真理を表す表現が現在時制を用いるような、時間的超越性・普遍性を示すとも言えるように思われる。なお、現代語ではアスペクトが発達しており、動詞に付加して、実現相（「了」）・持続相（「着」）・経験相（「過」）などを示す。（相原 1990: 152-3））

3　Attributive process とは京都グラマー(The Kyoto Grammar) で日本語の「形容詞」の分析に使われる 1 つの過程型（龍城 MS）だが、中国語でも「形容詞」が「述部」をなすときに「繫辞」と「賓辞」（すなわち「関係過程 (relational process)」と「参与要素：属性 (participant:Attribute)」）とに分かれず一語で「述語」になる（相原 1990: 148; 藤堂 1956 用例を参照）という点で、日本語の形容詞と同じである。したがって、この用語を文言分析にも当てはめることは理にかなうと思われる。なお、先述したように、Halliday は「白馬」の「白」を V の範疇に入れて分析している (Halliday 1959 [Webster 2005: 135] を参照)。

4　テクスト形成の観点から、存現文(3.7)(i)はさらに、主題の「楚人」があたかも旧情報 (Given)のように振る舞って（「背景化」して）、新情報(New)で情報焦点(information focus) である「鬻盾与矛者」を導入する役割を果たしていると言える。（その結果、(3.7)(ii)「誉之」「曰」の（省略された）主語／主題は「楚人」ではなく「鬻盾与矛者」となる。）

5　「為宋国笑」がとる「為甲乙」の形式は「為甲所乙」の句法のバリエーションであり、原文がもし「為宋国所笑」であったならば、「身は宋国の笑ふ所と為る」と訓むことができて、受身文であると明確に解釈されただろう（しかし、そうであっても、観念構成の一次的な解釈は《関係過程：同定的》となろう）。

資 料

北原保雄（他）『新編国語総合』（高等学校国語科用）大修館書店　平成 18 年(2006).
小町谷照彦（他）『新編国語総合』（高等学校国語科用）東京書籍　平成 18 年(2006).
藤堂明保・加納喜光（編）『学研新漢和大字典』学習研究社 2005.
袁乃瑛/Naiying Yuan,他/et al.『文言基礎読本―句析』/*Classical Chinese: A Basic Reader:* Vol.1 (Texts) /Vol.2 (Glossaries) /Vol.3 (Analyses). Princeton, New Jersey: Princeton University Press. 2004.

参考文献

相原茂 1990.『はじめての中国語』講談社.

Halliday, M.A.K. 1959. The Language of the Chinese "Secret History of the Mongols 元朝秘史" reproduced in Webster (ed.) 2005. 5-171.

Halliday, M.A.K. 1994. *An Introduction to Functional Grammar*. 2nd ed. London: Arnold. [山口登・筧壽雄訳 2001.『機能文法概説ーハリデー理論への誘いー』くろしお出版.]

龍城正明 MS 「The Kyoto Grammar による日本語分析—その概要と研究成果報告」

藤堂明保 1956.「漢語の熟語はどうしてできたか?」『漢文教室』27, 1-7. (藤堂明保 1987 所収)

藤堂明保 1987.『藤堂明保中国語学論集』汲古書院.

Webster, Jonathan (ed.). 2005. *Studies in Chinese Language* (Volume 8 in the Collected Works of M.A.K. Halliday). London: Continuum.

ESL/EFL リーディング教科書の批判的談話分析

Critical Discourse Analysis of ESL/EFL Textbook

阿部　聡

Satoshi ABE

新潟大学大学院

Niigata University, Graduate School

田中　真由美

Mayumi TANAKA

長岡工業高等専門学校

Nagaoka National College of Technology

Abstract

This paper aims to reveal ideology behind a text in an ESL/EFL reading textbook by doing Critical Discourse Analysis from Systemic Functional Linguistic perspective. We will report the results of analysis of a text about the Maori in New Zealand.

Firstly, clausal analysis from metafunctional perspective was done. The specific focuses were on the Theme-Rheme structure and Transitivity. We considered how the choices of lexico-grammatical resources in the text positioned the readers.

Secondly, generic structure analysis and appraisal analysis were made. The schematic structure of the text was as follows: "General Description ^ Specific Description^n ^ Summary (Coda)." The "Summary" stage was an optional stage in the structure. We then analyzed the text using "particulate, prosodic, and periodic" perspective of genre structure advocated by Martin (1997) to examine the effect of the choice of this optional stage.

1. はじめに

本稿では、選択体系機能言語学(Systemic Functional Linguistics,以下 SFL)の枠組みを援用した ESL/EFL リーディング教科書の批判的談話分析(Critical Discourse Analysis,以下 CDA)を行う。Authentic とはいいがたい教材テクストに潜む西欧的価値観を明らかに

することを目的とする。

2. CDA とは

本稿では主に Fairclough (1992,2001) の CDA アプローチを採用する。Fairclough & Wodak (1997: 271) は、「CDA とは、社会的過程や社会問題の言語的・記号論的側面の分析」であると定義しており、また、「批判的」という語は「言語、パワーおよびイデオロギー間の関連のような、人々から隠されている関連を明るみに出すことを目的とするという特別な意味において用いられている」(Fairclough 2001: 4 / 貫井他訳 2008: 5)。

Fairclough は、CDA を 3 つのステージに分けている。

(1) ➢**記述ステージ**：テクストの形式的特性に関わるステージ
➢**解釈ステージ**：テクストと相互作用の間の関係ーテクストを生産プロセスの産物として、また解釈プロセスの共有資源と見なすことに関わっている。
➢**説明ステージ**：相互作用と社会的コンテクストの関係、すなわち生産および解釈のプロセスの社会的決定、そしてその社会的効果にかかわる。
(Fairclough 2001: 21-22)

本稿では、読み手の解釈を操作する上で言語資源がいかに用いられうるかということについて考察を進めるため、記述ステージと解釈ステージを中心に分析を行う (O'Halloran 2003: 10 参照) が、分析には SFL の枠組みを利用する。

3. 分析: 記述ステージーテクスト分析

記述ステージでは、主に語彙-文法的資源に関する分析を行う。本稿では、主題-題述構造の分析、過程構成の分析を行う。また、ジャンル構造 (schematic structure) の分析も行う。分析対象は、高等専門学校 2 年生 (高校 2 年生レベルに相当) が使用する EFL/ESL 用リーディング教材である *Facts & Figures* (Ackert & Lee, 2005) の "The Maori of New Zealand"の本文テクストである。以下では「対象テクスト」と呼ぶこととする。

3. 1. テクスト形成的メタ機能

3. 1. 1. 主題-題述構造

Martin & Rose (2007) にしたがい、節頭の要素だけを主題とするのではなく、「主語／主題 Subject/Theme」も分析の対象とした。

まず、経験構成的主題のうち、「主語／主題 Subject/Theme」(無標主題 unmarked Theme)を見ていく。これは、テクストの「話題」を構成するのに用いられやすいためであり、また、「付加的主題 Adjunct Theme」(有標主題 marked Theme)は「話題」の構成には寄与しにくいためである。以下に、主題の連鎖を示す。

(2) 第1パラグラフ　[Polynesians – The Maori – they]
第2パラグラフ　[The Maori – They]
第3パラグラフ　[Europeans – (there) – wars and disease – (there) – the Maori – Many Maori – they]
第4パラグラフ　[(There) – Most (Maori) – they – (there) – Many schools – Nearly half of Maori language speakers]
第5パラグラフ　[Maori Culture – (At the center of Maori culture) – This (=Marae) – The number of Marae – Many of the new Marae – people in the cities]
第6パラグラフ　[Most New Zealand cities – (Among the festival activities) – Children – all the Maori]
第7パラグラフ　[the Maori – they – they]

タイトルとなっている"The Maori" (上では下線を付した)がもっとも頻度の高い「主語・主題」となっている。また、マオリ族の文化やその例も主題として選択されている。しかし、第3パラグラフでは他のパラグラフとは異なり、5つの主語／主題のうち、2つがマオリ族以外のものが選択されている。また、この第3パラグラフでは付加的主題が多用されている。

3. 1. 2. 展開の技法

主題の選択はランダムに行われるのではなく、意味層における選択を具現するものである。意味層のテクスト形成的意味の一つとしてテクストの展開の技法が挙げられる。パラグラフごとの展開の技法を見ると、第1、第2、第7パラグラフで"the Maori"が、第4，第5，第6パラグラフでマオリの文化的側面が展開の中心となっているが、第3パラグラフは付加的主題（有標主題）が多用され、時間の推移という展開の技法が選択されている。さらに、主題-題述構造の分析からも明らかになった通り、第3パラグラフでは主語／主題として選択される要素が多様であり、この点でも他のパラグラフと大きく異なる。

テクスト形成的意味は、Martin (2000:285)によると、「読み手・聞き手を特定の方法で位置づけるために、意味（註：観念構成的意味と対人的意味）を編み上げて継ぎ目のないまとまりにすることによって、テクストが権力 power を自然な姿にする naturalize」ことに関わる。主題-題述構造や、テクストの展開の技法は、テクストの中に権力を「隠す」ためにも用いられる可能性がある。その一例として、第3パラグラフでの付加的主題の使用が挙げられる。付加的主題は主語・主題よりも節頭に近い位置に配置される。このため、主語・主題よりも主題的際立ちが高い。したがって、主語／主題である(3-1)の"Europeans"や(3-3) の"wars and disease"は主題的際立ちが相対的に低くなる。また、時間の推移という展開の技法により、客観的な視点からの記述がなされているという印象を与える可能性がある。

3.2. 観念構成的メタ機能：過程構成

本節では、前節までの分析で他のパラグラフとの相違が明らかとなった第3パラグラフの節を主に取り上げる。

(3-1)では、初出の参与要素である"Europeans"が行為者となっている。また、過程中核部は"came"という、動詞が選択されている。解釈ステージでも触れるが、"the Maori"の視点からこの出来事を捉えるならば「侵略された」ということになるだろう。"came"の選択は解釈にどのような影響を及ぼすだろうか。

Over the next ten years,	wars and disease	killed	many Maori
Circumstance:loc:time	Actor	Pr:Material	Goal

(3)

(3-3) ((3)として上に示した) は、行為者が、"wars and disease"という、意志をもたない抽象的なモノとなっている。この点について起動的解釈による分析を行う。起動的解釈では、"wars and disease" は起動者であり、「多くのマオリが死ぬ」という事態の原因として位置づけられる (5a参照) 。先に触れたように、主題としてMaoriを選択するのがこのテクストでは自然な選択であると思われる。しかし、主語／主題は"wars and disease"となっている。仮に、主語／主題にMaori を配置するとしたら、過程構成はどのようになるだろうか。

(4)

a.	wars and disease	killed	many Maori.
他動的	Actor	Pr:Mat.	Goal
起動的	Agent	Pr:	Medium

b.	Many Maori	were killed
exp.	Goal	Pr:Mat.
textual	Theme	Rheme

(4b)のように受動態を選択することも可能ではあるが、この場合には行為者が暗示される可能性がある。この暗示された行為者は読み手がコンテクストから補うことになるが、「ヨーロッパ人がニュージーランドに来て、その後マオリの数が減った」というところから考えれば、行為者は「ヨーロッパ人」だと解釈することになるだろう。これでは、非明示的であるとはいえ、「ヨーロッパ人の侵入と戦争」を前景化することになりかねない。「侵入と戦争」を後景化するには、受動態による行為者の非明示を避け、こうした解釈を防ぐことのできる起動者が選択された過程構成が目的に適っているのである。

こうして、行為の責任の所在が曖昧にされるわけである。

3. 3. ジャンル構造 schematic structure

このテクストの目的は、「マオリ族とはどのような民族か」ということを伝えることである。すなわち、記述することが目的であり、「記述」Description に分類される。
記述ジャンルの典型的な展開構造 schematic structure は、概略、以下の通りである。

(5)　一般的記述 ^ 詳細記述 n　　(Derewianka 1990, 1996 を参考にした)

対象テクストは次のような展開構造を持つと考えられる。

(6) 一般的記述^詳細記述 1 ^詳細記述 2^詳細記述 3^詳細記述 4^終結部

(¶1)	歴史的回顧 (¶2,3)	(¶4)	(¶5)	(¶6)	(¶7)

第2, 3 パラグラフは、ジャンルの埋め込み genre-embedding（詳細記述の一段階として歴史的回顧 historical recount が埋め込まれている）であり、また、第 7 パラグラフは詳細記述とは言えず、集結部 coda ないし要約 summary という別の段階であるとした。したがって、対象テクストは任意要素（段階）optional element/stage を含んでいると言える。この段階を含むことによる効果については、次節で考察を加える。

4. 分析：解釈ステージ

Fairclough の枠組みを用い、それを発展させている O'Halloran (2003:33) によると、記述ステージは「テクストバイアスの分析」で、語彙-文法パターンの分析が中心であり、これに対して、解釈ステージには以下の二種類の分析が含まれるとしている。

(7)　Interpretation stage of CDA

mystification analysis -- a form of critical discourse (1) analysis
Critical analysis = analysing a text for absences which lead to the events and participants referred to in the text being mystified in the reader's discourse (1); analysing a text for how its presences reinforce these absences from reading.

socio-cognitive analysis -- a form of critical discourse (2) analysis
Critical analysis = analysis of how the discourses (2) which readers habitually inhabit may channel reading of a text into a particular interpretation which in turn can lead to

ideological production.

本節では、記述ステージの分析で明らかになった特徴が、いかに読み手の解釈の方向付けに寄与しているかについて考察を進める。

4.1. 主題、展開の技法

3.1. でみたように、第3パラグラフでは主題-題述構造と展開の技法により、ヨーロッパ人が「侵略」したこと、マオリ族を殺害したことが間接的・非明示的に述べられている。このパラグラフでも、他のパラグラフ同様に、"the Maori"を主題として選択することが可能であっただろう。むしろ、「マオリ族とはどのような民族か」を記述するテクストであれば"the Maori"を主題として選択し、展開の技法（展開の中心）として用いるほうが自然であると思われる。しかし、実際には時間の推移という展開の技法を用いている。これは歴史的回顧 historical recount の語彙-文法的特徴に一致する。このため、読み手は客観的な記述であると解釈する可能性が高い。したがって、主題-題述構造や展開の技法は曖昧化そのものには寄与していないが、視点の中立化により、次に述べる過程構成の選択による曖昧化を支えていると考えられる。

4.2. 過程構成

第3パラグラフ(3-1)では、"came"という過程中核部が選択されていたが、4.1.でみたように「客観的・中立的記述」という印象をさらに強化するため、ここでは"intrude"などの過程中核部が選択されなかったものと思われる。また、3.2. で述べたように(3-3)では、行為の責任の所在が曖昧化されていた。(3-5)では、"lost"という過程中核部が選択されているが、これは「ヨーロッパ人が土地を取り上げた」という表現のしかたを避けていると解釈され、ここでもヨーロッパ人による侵略行為が曖昧化されている。このように、過程構成の選択は読み手が「ヨーロッパ人の責任」についてあまり疑問を持たないように方向付けている。

4.3. ジャンル構造

Fairclough (1992, 2001)はジャンルやテクスト構造に言及してはいるものの、テクスト構造に関する分析はあまり行っていない。ここでは、ジャンル構造も読み手の解釈を操作する資源として用いうることを指摘する。また、各段階における語彙-文法的資源についても簡単に触れる。

4.3.1. Martin(1997)のジャンル構造モデル

(6)に示したように、対象テクストは任意要素（第7パラグラフ）を持っている。この段階は、それまでの詳細記述の要約を行っている。この要約という段階を選択することにはどのような効果があるのだろうか。

Martin (1997: 17)は、ジャンル構造を3つの観点から同時に分析することを提案している。すなわち、テクストの構造を「粒子的 particulate」「韻律的 prosodic」「周期的 periodic」という3つの観点から分析する。

対象テクストを粒子的構造として捉えるならば、記述の目的を果たす部分である詳細記述1-4 が中核的要素 nucleus で、一般的記述と集結部・要約が衛星的要素 satellite であると分析できる。しかし、韻律的構造と周期的構造という観点からは、終結部・要約がもっとも際だった段階であり、詳細記述2-4 で述べられている「現代のマオリ族が伝統・文化を保持している」ことが強調されている。ここで注目したいのが詳細記述1である。この段階は終結部・要約とのつながりを持たず、マオリ族の歴史が背景化されるというジャンル構造になっていると解釈できる（図1）。これらの分析について、意味層、語彙-文法層の特徴を参照しながら考察を続ける。

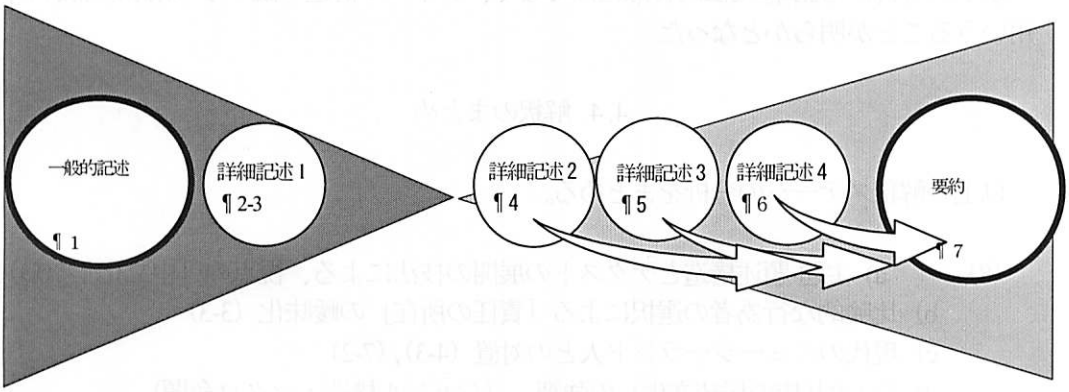


図1　対象テクストのジャンル構造：韻律的・周期的構造

4.3.2. 主題とジャンル構造

詳細記述2-4 では、"Now", "Today" といった有標主題が用いられている。この点から、詳細記述1（歴史的回顧：「ヨーロッパ人の侵略」）と詳細記述2-4（現代のマオリ族の文化保持）の対比が明確となる。また、終結部・要約も"Today"という有標主題で始まっている。このため、詳細記述1は終結部・要約における要約には含まれておらず、詳細記述2-4 のみが要約されていると解釈できる。

4.3.3. アプレイザルとジャンル構造

ここではアプレイザルの一つである「譲歩」についてみていく。詳細記述2では、(4-3)の"But"というテクスト形成的主題によって、「マオリ族の現代の生活」に関する記述

が続くであろうという「予測」が保持されないことが合図され、詳細記述の要点が「マオリ族が伝統文化を失ってはいない」という点にあることが示されている。これと同様に、終結部でも、(7-2)で、"However"というテクスト形成的主題により、(7-1)が「譲歩」であることが合図され、ここでもやはり、「マオリ族が伝統文化を失ってはいない」ことが要点として示されている。これらの特徴より、終結部によるテクストの要約は「マオリ族の伝統文化」に限定されることとなる。

このように、対象テクストのジャンル構造は、一般的な「一般的記述^詳細記述n」という構造とは異なる効果を持つ。すなわち、終結部・要約という要素は一般的な構造類型からすれば任意要素ではあるものの、韻律的・周期的構造という観点からはむしろ欠かすことのできない段階であり、詳細記述2-4で述べられた「マオリ族の伝統文化の保持」を強く印象づけ、同時に、詳細記述1で述べられた「ヨーロッパ人による侵略」を背景化している。つまり、対人的意味のクライマックスである終結部・要約が韻律的構造としての中心的段階だと考えることができ、表面的には記述ジャンルであるが、実際にはマクロ命題であるとも言えるだろう。

以上の分析から語彙-文法的資源だけでなく、ジャンル構造も読み手の解釈の操作に用いうることが明らかとなった。

4.4. 解釈のまとめ

以上の解釈ステージの分析をまとめる。

(8) a) 主題-題述構造とテクストの展開の技法による、視点の「中立化」 (¶3)
b) 比喩的な行為者の選択による「責任の所在」の曖昧化 (3-3)
c) 現代のニュージーランド人との対置 (4-3), (7-2)
d) 「マオリ族の伝統文化」の強調 (ジャンル構造：マクロ命題)

これらの点から、「ヨーロッパ人の侵略」についてはできるだけ客観的に述べ、責任を回避するような書き方をし、その侵略がマオリ族の伝統文化を失う原因とはなっていないことを暗示していると考えられる。また、現代の価値観との対置も見て取れる。

5. おわりに

本稿ではESL/EFLリーディング教科書のCDAを行った。その結果、先住民族であるマオリ族がマイノリティーとして位置づけられ、その一方で、ヨーロッパ人の行為は責められるべきではないという価値観が潜んでいることが明らかとなった。

日本の英語教科書について、早川(2007: 94)は「英語教科書というのは、何らかの対人的相互作用を遂行するテクストを模して、実際は『英語を学ばせる』という目的で人為的につくられた言語断片である。この点でauthenticという性質から外れた特殊なテクストである」と述べており、本稿の分析対象もこの点では同様である。そのため、英

語学習・英語教育の観点からテクストの編集がなされており、たとえば、対象テクストのジャンル構造についても教育的配慮によるものであるという可能性も否定できない。より具体的には、いわゆる「イントロダクション・ボディ・コンクルージョン」という議論のジャンルなどで用いられるテクスト構造を、教育的配慮からこの対象テクストに導入したのかもしれない。だが、こうした ESL/EFL リーディング教科書であっても、ある種の価値観が潜んでいることもまた事実である。このため、こうした教科書を利用することが、西欧の価値観の再生産につながる危険性を孕むことについて、英語教育関係者は留意するべきであろう。

日本の英語教育にジャンル理論を導入するという取り組みが早川(2007)、Sasaki (2008)によって提案されているが、本稿のジャンル分析で指摘したように、ジャンル構造の類型からの逸脱、もしくは、任意要素の選択がどのような効果をもたらすかといったことも考察の対象に含めていく必要がある。

報道テクストの CDA を行う O'Halloran(2003)は、「理想化された読者」として、「概要だけを読み取る読者」を想定している。こうした読者は認知的負荷の高い推論などは行わないため、批判的な読みをしないのが普通だとされている。対象テクストに付随している設問も、いわゆる"Finding Facts" タイプの設問が中心であり、概要の把握をリーディングの目標としている。したがって、学習者に批判的な読みを促すことは困難である。このため、今後の課題として教科書の設問や教師の発問についても CDA や SFL の観点からの考察がなされるべきだと考える。

対象テクスト(文番号を付してある)

(1-1) Polynesians live on islands in the Pacific Ocean. (1-2) The Maori are Polynesians, and they live at the southern end of Polynesia in New Zealand.

(2-1) The Maori arrived in New Zealand from other Polynesian islands over a thousand years ago. (2-2) They were the first people to live in New Zealand.

(3-1) In the late 18th century, Europeans came to live in New Zealand. (3-2) At that time, there were perhaps 250,000 Maori in New Zealand. (3-3) Over the next 100 years, wars and disease killed many Maori. (3-4) By the end of the 19th century, there were only about 40,000 Maori left. (3-5) During the 19th century, the Maori also lost much of their land to the Europeans. (3-6) Many Maori were afraid that they might lose their traditions and language, too. (3-7) But this did not happen.

(4-1) There are about 500,000 Maori in New Zealand. (4-2) Most live like other New Zealanders. (4-3) But they are keeping the Maori language and traditions alive. (4-4) There are now Maori radio and television stations. (4-5) Many schools teach in the Maori language. (4-6) Nearly one half of Maori language speakers are 25 years old or younger.

(5-1) Maori culture is also alive and well. (5-2) At the center of Maori culture is the "marae." (5-3) This is a special place for ceremonies and meetings. (5-4) Today the number of marae in New Zealand is increasing. (5-5) Many of the new marae are in the cities. (5-6) Now people in the cities can meet and learn about their Maori traditions.

(6-1) Today most New Zealand cities have yearly Maori festivals. (6-2) Among the festival activities are competitions in speaking, dancing, and singing. (6-3) Children practice for months. (6-4) Then all the Maori in the area arrive to watch the competitions and see who wins.

(7-1) Today the Maori live a comfortable, modern life. (7-2) However, they are not losing their traditions, because they are passing

them on to their children.

参考文献

Derewianka, B. (1990) *Exploring How Texts Work.* Newtown: Primary English Teaching Association.

_____ (1996) *Exploring the Writing of Genres.* Herts: United Kingdom Reading Association.

Halliday, M. A. K. and C. Matthiessen (2004) *An Introduction to Functional Grammar, 3rd edition.* London: Edward Arnold.

Fairclough, N. (1992) *Discourse and Social Change.* Cambridge: Polity Press.

_____ (2001). *Language and Power* (2nd ed.). London: Longman. 〔貫井孝典（監修）吉村昭市・脇田博文・水野真木子（訳）（2008）『言語とパワー』大阪：大阪教育図書株式会社〕

_____ (2004) 'Critical Discourse Analysis in Researching Language in the New Capitalism: Overdetermination, Transdisciplinarity, and Textual Analysis,' In Young, L. & C. Harrison (eds.) *Systemic Functional Linguistics and Critical Discourse Analysis.* London: Continuum. pp. 103- 122.

_____ & R. Wodak. (1997) 'Critical Discourse Analysis,' in T. A. van Dijk (ed.) *Discourse as Social Interaction.* London: Sage. pp.258-284.

Martin, J. R. (1997) 'Analysing Genre.' In F. Christie and J. R. Martin (eds.) *Genre and Institutions: Social Processes in the Workplace and School.* London: Continuum. pp.3-39.

_____ (2000) 'Close reading: functional linguistics as a tool for critical discourse analysis'. In L. Unsworth (ed.) *Researching Language in Schools and Communities: Functional Linguistic Perspective.* London: Cassell. pp.275-303.

Martin, J. R. and D. Rose (2007) *Working with Discourse, 2nd edition* . London: Continuum.

O'Halloran, K. (2003) *Critical Discourse Analysis and Language Cognition.* Edinburgh: Edinburgh University Press.

Sasaki, M. (2008) 'On Genre and its Application to English Education in Japan,' In *Ergo.* Nagoya: Aichi Gakuin University Junior College. pp.193-217

龍城正明（編）（2006）『ことばは生きている—選択体系機能言語学序説』. 東京: くろしお出版.

早川知江（2007）「日本の英語教科書にみられるジャンル」*Proceedings of JASFL. Vol.1.* 日本機能言語学会.pp.89-103.

ジャンルと英語教育：美術書にみる文法資源選択の偏り

Genre and Education of English:

Patterns of Lexicogrammatical Choices in Art Books

早川 知江
Chie HAYAKAWA
名古屋芸術大学
Nagoya University of Arts

Abstract

This paper is a part of the research which seeks to introduce the genre theory into the teaching of English in Japanese universities. It has been claimed that texts of a particular genre show specific and limited patterns in the choice of lexicogrammatical resources. In educational contexts, the claim implies the possibility that students who aim to master reading and writing of the English texts of a particular genre need to learn only a limited range of lexicogrammatical resources from the whole language system of English. From this perspective, this paper conducts an analysis on English commentary text in art books, the genre which students in art schools frequently encounter in their everyday school life and need to use as a model when they write pieces of commentaries on their own works of art. The analysis will show that the text make very limited choices in terms of Transitivity patterns, Mood choice, Tense, Voice and Polarity. This paper also examines the close interrelations between the choices from two independent systems (for example, from those of Process Type and Tense). Some implications of this exploration will be discussed in relation to the education of English in Japanese universities, especially to the choice of teaching materials to improve students' English skills.

1．はじめに

本稿は、日本の英語教育にジャンル理論を取り入れることを目指した研究の一環である。文法的に正しいだけでなく、社会の中で様々な目的を果たす上で適切な英語テクストを読み・書く能力を育成するためには、「ジャンル」という概念が欠かせない。ジャンルとは、"a staged, goal-oriented social process" (Martin 1992: 505) と定義されるように、ある言語断片を、一定の社会的コンテクストの中で、一定の目的を果たすために用いられるテクストとしてとらえた場合の、その目的によるテクストの分類のことである。

第1節で詳しく見るように、各ジャンルに属すテクストは、そのジャンルの目的を果たすために、特定の展開段階を踏み、かつ、特定の文法資源を用いる傾向がある。外国語として英語

を学ぶ日本人学生にとって、自分が日常的に、あるいは専門的に必要とするジャンルがどのような文法資源を用いるかを知っていることは、そのジャンルに属するテクストを読み、書く上で不可欠な知識である。そして当然、習得しようとするジャンルの数が限定されるほど、学ぶ必要のある文法資源も限られてくる。

こうしたことから、教育的に考えられるアプローチとしては二つある。一つは、仮に学生が特定のジャンルの英語だけ読めるようになればよいのであれば、そのジャンルで使われる範囲の文法事項だけ教えればよい、という考え方である。もう一つは、逆に、各ジャンルで用いられる文法資源が偏っているのであれば、特定のジャンルのテクストばかりを用いた英語教育では学生の文法知識が偏ってしまうため、なるべく幅広いジャンルのテクストを授業に取り入れるべきだという考え方である。

本稿では、こうした、特定のジャンルで用いられる文法資源の偏りと、そこから生じる英語教育への影響を考えるための前提として、試みに、芸術大学の学生が読み書きを特に必要とするジャンル、すなわち美術書というジャンルに焦点を当て、そこで用いられる文法資源が実際どの程度偏っているかを確認することを目的とする。まず第２節でジャンルという概念をまとめ、第３節は、ジャンル理論が大学における英語教育とどのように関わってくるかを考察する。そして第４～５節で、実際に美術書の作品解説部分を分析し、そこでどのような文法資源が用いられているかを調査する。そして本稿の終わりには、この分析で得られた結果を、英語教育のありかたと結びつけて考察する。

2. ジャンルと選択蓋然性

本節では、まずジャンルという概念をまとめるため、その特徴を３つに分けて述べる。１点目として、ジャンルというのはある共通の目的をもつテクスト群を指す名称である。例えば、日記というジャンルは自分の生活を記録する目的をもったテクストの総称であり、レシピは料理の作り方を伝えるテクスト群、議論とは相手に自分の主張を納得させる目的をもったテクスト群につけられた名称である。

２点目として、特定のジャンルに属するテクストは、一定の展開段階をもつ傾向にある。なぜなら、一定の目的を達成するためには、ある一定の段階を順序どおりに踏む必要があるからだ。例えば、レシピのジャンルであれば、「料理の名前」「材料」「作り方」（あれば「コメント」）の順に展開するのが典型的だろう。

３点目が本稿が特に注目する点であるが、各ジャンル、あるいはジャンル内の各段階は、それぞれ一定の語彙や文法資源を用いる傾向がある。言い換えると、特定のジャンルの特定の展開段階では、特定の語彙-文法的資源が選択される蓋然性が高く、それ以外の文法資源はあまり使われない。つまり、用いられる文法資源が偏っているのである。

このことは、すでにいろいろなジャンルに関して指摘されてきた。narrative や様々な factual genre を比較研究した Martin（1985; 1997）は、たとえば Recount に属するテクストであれば、特定の人やものが参与要素として選ばれ、動作は過去時制になることが多いが、一方、Procedure に属するテクストの場合、一般的な参与要素が選ばれ、動作は単純現在時制、あるいは命令形になることが多い（Martin 1985: 5-6）などと指摘し、このほかの様々なジャンルについても、その意味的・語彙的特徴両面について細かく分析・記述している。

このようなテクスト全体にわたる特徴だけでなく、ジャンルによっては、テクストを構成する各段階によって、現れる文法資源にはっきりした違いがみられる場合もある。例えばレシピの場合、「料理の名前」の段階は名詞群（例 Apple and Cinnamon Scones）で書かれ、「できあがりの量」は（省略的）叙述法の節　（例 Makes 12）、「材料」は名詞群（例 1/3 cup sugar）、「つくり方」は命令法でかつ物質過程(material process)の節（例 Place flour in a bowl.）、そして「コメント」は叙述法か命令法の節　（例 Caster sugar gives a much finer texture to your cakes.）で書かれるのが一般的である。

3．大学における英語教育との関わり

前節で見たように、ジャンルによって用いられる文法資源が偏っているということはすでに広く指摘されてきたことである。本稿では、そのことが、大学における英語教育とどのように関わってくるかについて考察したい。本稿での調査は、一芸術大学の英語講師という個人的立場からの必要性から始まったものである。つまり、大学の英語の授業で、どのようなテクストを講読テクストとして選べばいいかを考えた場合、学生側からは、当然、自分の専門にかかわるジャンルが読みたい、読めるようになりたい、という要望が上がってくる。専門に関わるジャンルというのはこの場合、英語で書かれた美術書中の「作品解説」ということになる。

ここで、教育的には二つの方針が考えられる。一つ目は、仮に学生が美術書だけ読めるようになればいい、というのであれば、教える必要のある文法資源はおのずと限られてくるということである。つまり、もし美術書では特定の文法資源しか用いられないとしたら、使われない文法事項は教える必要がないという立場が考えられる。たとえば動詞の変化形の問題にしても、従来の英文法の授業では必ず登場する「過去完了」や「仮定法過去」などの形は、美術書では用いられる可能性が低く、教えても使わないのであれば教える必要がない、という考え方が成り立つわけである。学生が必要とするジャンルに用いられる言語資源だけに絞って教育を行えば、非常に効率的に短期間でターゲットジャンルの読み書きの習得が達成可能になるだろう。

しかし一方で、それとは全く逆の方針も考えられる。つまり、仮に各ジャンルで用いられる文法資源が偏っているとすると、一つのジャンルだけを読んでいて総合的な英語力が身につくか、が問題となる。この場合、一つのジャンルに偏らない教材選びが重要になってくるだろう。

この２つのいずれの方針に対しても、まず最初に明らかにすべき点がある。つまり、美術書だけ読めればいいならどの範囲の文法事項だけを教えればいいのか、という点と、その場合どの程度英語力が偏ってしまうのか、という２点である。この疑問に答えるため、まず、美術書の英語が実際にどの程度「偏って」いるか確認してみることが必要となる。これが本稿の調査の動機である。

以下の第４節では分析に用いるテクストを紹介し、第５節では、それらのテクストを７つの文法システムの観点から分析し、どのような選択が行われているかを調査する。第６節では、その結果に基づいて、美術書を英語講読のテクストとして用いることの意味を考察したい。

4．分析テクスト

今回、分析対象として選んだのは美術書中の解説文、つまり「美術作品の解説」というジャ

ンルである。分析テクストとして用いたのは、以下の美術書から抜粋した194節である：

Karin H. Grimme. (2007) *Impressionism*. Köln: Taschen. (以下 *Impressionism*. と表記)

Arthur K. Wheelock, Jr. (1995) *Vermeer and the Art of Painting*. New Haven / London: Yale University Press. (以下 *Vermeer*. と表記)

分析に先立ち、これらのテクストに関して大きな疑問点がある。それは、そもそも美術作品の解説というのは単一のジャンルなのか、という問題である。SFT の枠組みから見たジャンルというのは、前述の通り、「目的」からみたテクストの種類のことである。この観点から見ると、作品解説というのは、場面によって異なる目的をもつ、つまり、いくつかの異なるジャンルの複合体として成り立っていると考えられる（異なるジャンルの複合体、つまり macrogenre としての作品解説の特徴については Hayakawa (forthcoming) 参照）。具体的には、作品解説ジャンルは以下の４つのジャンルの複合体であると考えらえる：

Description：あるもの（この場合は、美術作品そのものとそこに描かれたモチーフ）がどのようなものか、その性質や特徴を紹介するジャンル

Biography：ある人（この場合は作家）がどのような人生を送って何をしたか記録するジャンル

Recount：あるもの（この場合は美術作品）が歴史的にどのような変遷を辿ってきたか、それに対しどのような言説が行われてきたかを記録するジャンル

Exposition: あるもの（この場合は美術作品）のテーマは何だといえるか、その作品がなぜ見る者に影響を与えるのか、などについて主張(Thesis)を掲げ、その主張を論証するジャンル

この４つが混合して用いられ、総体的に一つの作品について語る、というのが作品解説だといえる。具体例としては、以下のような部分があげられる。

まず Description の部分は、文法的には主に現在形で書かれる：

> *The Path to the Old Ferry* is another of Sisley's landscapes in which the depiction of water is central [···]. As his composition line, Sisley once again uses a path, which here runs inwards from the bottom left-hand corner and creates the necessary depth. At the same time, the artist directs the eye of the beholder to the rectangular red patch in the centre of the picture, which is on the opposite riverbank.
>
> (from *Impressionism*. p88)

Biography や Recount の部分は、主に過去形で書かれる：

> Renoir had as a young man been apprenticed as a porcelain painter, and was consequently highly familiar with the use of soft round brushes and applications of transparent paint. He then moved on to painting fans, on to which, for example, he copied the early-18th-century motif of The *Embarkation for Cythera* by Antoine Watteau. Then he accepted a number of commissions to decorate Parisian cafés.
>
> (from *Impressionism*. p70)

Exposition の部分は、時制はさまざまであるが、解説者の主張を読み手に納得させるのが目的のため、論理展開のための接続表現が多く使われる傾向にある：

> Official art theory and criticism of the seventeenth century, and earlier, tended to see realism as an inappropriate means of rendering literary and allegorical subject matter. Yet

> Vermeer and numerous other Dutch artists of the period clearly showed the fallacy of this academic point of view. […] Although it embodies certain of Vermeer's ideas about the art of painting, this canvas hardly represents either the artist himself or his working methods. For one thing, the costume the painter wears here is distinctly old-fashioned and what might be termed "Burgundian."
>
> (from *Impressionism*. p70)

また、こうしたジャンルの複合体としての特徴のほかに、作品解説は、レジスター、つまり具体的「使用状況」からくる特徴ももっている。活動領域（Field）的には、ある美術作品について語るテクスト群であり、役割関係（Tenor）からみると、美術の expert から一般の読者に向けて書かれたものであり、伝達様式（Mode）からすると、書き言葉である。このように、「作品解説」というのは、実際には一つのジャンルというより、こうしたレジスターで生み出される、４つのジャンルの混合体としてのテクスト群につけられた名称ということになる。第４節では、こうしたテクスト群の文法的特徴をさまざまな側面から探っていきたい。

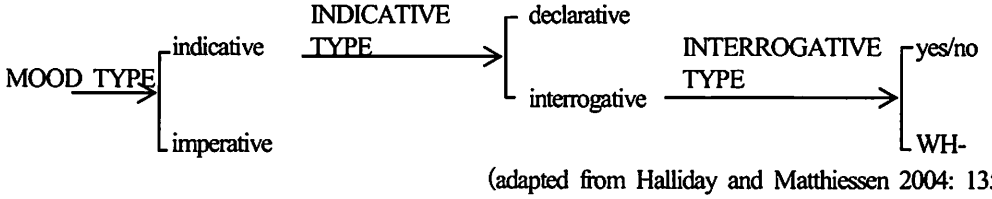
5．分析

作品解説の文法的特徴を明らかにするため、今回は、以下の７つのシステムからの選択パターンについて分析を行う：① 叙法（Mood）、過程構成（Transitivity）のパターンとして、② 過程型（Process Type）と③ 状況要素のタイプ（Circumstance Type）、それから④ 時制（Tense）、⑤ 態（Voice）、⑥ 極性（Polarity）、そして⑦ モダリティー（Modality）各システムからの選択である。これら７つのシステムにおいて、分析した美術書はどのような選択を行っているか、どの程度限られた選択をしているかを、以下の節で順に見ていく。

5.1. 叙法の選択 (MOOD System)

まず、最も結果が明らかなものとして、叙法(MOOD)選択のシステムから見ていきたい。叙法のシステムとは、節が叙述法(declarative)か疑問法(interrogative)か命令法(imperative)か、などを選択することによって、節に対人的な役割を付与するシステムで、全体としては Fig. 1 のような形となる。

Figure 1: MOOD System



(adapted from Halliday and Matthiessen 2004: 135)

しかし、作品解説というジャンルに限って調査すると、この中のごく限られた選択肢しか用いていないことが分かる。分析した 194 節のうち、定性をもつ節(finite clause)の叙法がどのようなものであったかを示すのが Table 1 である。Table 1 が示すとおり、叙述法が全体の 100%を占める。これはそもそも、作品解説というのが、Description の部分であっても、Recount、Biography、Exposition の部分であっても、いずれにせよ、美術作品に関して読者に情報を与えることを目的

としているためである。つまり、読者に対して何か尋ねたり、あるいは行動を要求したりする必要がないため、疑問法も命令法も選択されないのである。

Table 1: 美術書の中の MOOD (finite clause のみ)

declarative	170	100%
interrogative	0	0%
imperative	0	0%
計	170	100%

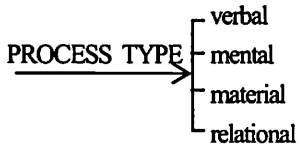
5.2. 過程構成の選択 (TRANSTIVITY System)

次に、過程構成のシステムに移りたい。過程構成とは、「誰が・なにが、いつ・どこで・どのように、何をしたか」を表すための言語システムである。このシステムによって、さまざまな事象は、過程中核部(Process)、参与要素(Participant)、状況要素(Circumstance)という３つの要素から成り立つものとして構築される。過程中核部は、物質過程(material process)、関係過程(relational process)、心理過程(mental process)、発言過程(verbal process)の４つの過程型(process type)に分かれる。参与要素は過程型によって特有の種類があり、例えば物質過程には、以下のように、その行為をする行為者(Actor) と、その行為の対象となる対象(Goal)という参与要素などが関わる：

John	kicked	a ball.
行為者	過程中核部：物質過程	対象

過程型は、選択の細密度(delicacy)を増していくにしたがい、非常に細かなタイプに細分化していくが、ここでは、Fig. 2に示したような、もっとも基本的な４つの過程型のうち、美術書がどのような選択を行っているかを分析したい。

Figure 2: PROCESS TYPE System



(adapted from Matthiessen 1995: 256)

分析した作品解説のテクストが、Fig. 2 に示したシステム中のどの選択肢を用いていたかをTable 2 にまとめた。

Table 2: 美術書の中の Process Type

Material	75	39%
Verbal	8	4%
Mental	16	8%
Relational	95	49%
計	194	100%

Table 2 が示すように、物質過程と関係過程が全体を二分する形になっており、心理過程や発言過程はほとんど用いられていない。作品解説の中で物質過程と関係過程が具体的にどのような

できごとを構築するために用いられているかというと、まず物質過程というのは、「塗る」「配置する」「与える」などの物質的な作業を表す過程であり、主に作家の作品に対する動作を構築するのに用いられる。例は以下の通り：

- Renoir **structured** the brilliant "mosaic" of the water
- At the same time, the artist **directs** the eye of the beholder to the rectangular red patch in the centre of the picture,
- The picture **is given**, in addition, expected tension by the crossing of two divergent directions of movement:

一方の関係過程とは、ものともの、あるいはものと性質を結びつける過程であり、主に作品の構図、特徴、性質を構築するのに用いられる。例は以下の通り：

- which **is** on the opposite riverbank
- Sisley's brush-strokes too **have become** more powerful
- In addition, Vermeer's closely related *The Goldweigher* in Washington, [···] **includes** both the mirror, in much the same position, and the pearls on the table.

このように、過程構成のパターンのうち、用いられる過程型にも大きな偏りがあることが分かる。

5.3. 状況要素の選択 (Circumstance Type)

また、同じ過程構成のパターンのうち、状況要素(circumstance)のタイプにも偏りがみられる。状況要素は、参与要素と違い、どの過程型にも表れることができる要素で、時間や場所を表す Location（例：in the park）や、どのようにその過程を行うかを表す Manner（例：quickly）など、さまざまなタイプがある。このうち、分析した節中に現れた状況要素のタイプをまとめたものが Table 3 である。

Table 3: 美術書の中の Circumstance Type

Angle	2	2%
Matter	2	2%
Role	7	6%
Accompaniment	6	6%
Contingency	3	3%
Cause	2	2%
Manner	28	26%
Location	55	50%
Extent	4	4%
計	109	100%

Table 3 が示すように、突出してよく用いられているのは、場所を表す location と、方法ややり方を表す Manner の２つである。この２タイプのうちでも、さらに細かく分けてみると、よく用いられるのは、時間上の点ではなく空間上の点を表す location: place であり、また、manner の下位タイプとしては、「どのように」という様態を表す quality が最も多く用いられていた。具体的な使用例を以下に挙げると、Location: place の状況要素は、主に画中の人・ものがどこに配されているかを表すのに用いられる：

- Both artists placed a bridge on the right-hand side of the picture, [E], against the background of a river-bank with a house.
- Immediately below this red roof we see a group of peoples…

Manner: quality の状況要素は、主に画中のものがどう描かれているか、あるいは作者がどのように絵を描いたかを表すのに用いられる。例は以下の通り：

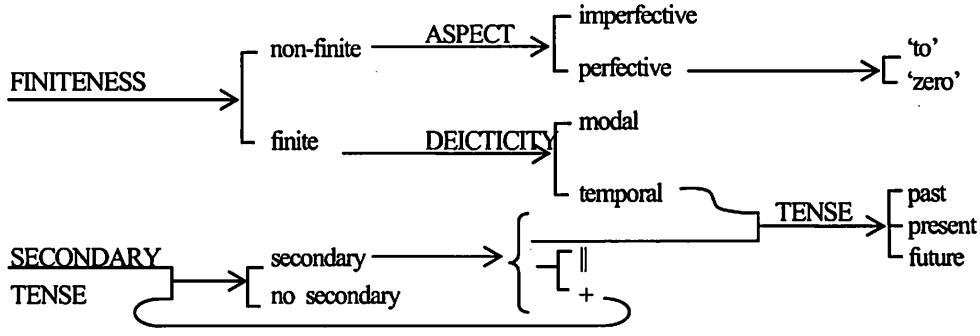
- as to imply strongly some specific act of identity […].
- White was also used abundantly

このように、使用される状況要素のタイプも、作品解説というテクスト群に限って分析すると、偏って選択されていることが分かる。

5.4. 時制の選択 (TENSE System)

次に、ある過程がいつ起こったかを言語によって表すための、時制(tense)のシステムを見てみる。Fig. 3 が英語の時制選択システムを表したものである。

Figure 3: TENSE System



(adapted from Halliday and Matthiessen 2004: 349)

Fig. 3 にみるように、時制のシステムで最も重要なのは、反復可能(recursive)なシステムだという点である。時制は、定性をもつ(finite)とすると、基本的に past, present, future の３つの選択肢しかないが、このシステムは同時に、secondary tense を用いるかどうかを選択するシステムも備えており、ここで secondary を選ぶと、もう一度 past, present, future を選ぶシステムに入ることができる。かつ、secondary tense の選択を一度で終了する選択肢（Fig. 3 中では || の記号で表した）を選ぶとそこで選択は終了するが、反復（+ の記号で表した）を選択すると、またシステムの最初に戻って、再び secondary tense を選択することが可能になる。つまり、時制というのは、単に present や past だけでなく、present in present や present in past in present など、無限に拡張することが可能なのである。

その結果、生じる節は present（例 He eats breakfast.）や past（例 He ate breakfast.）、future（例 He will (is going to) eat breakfast.）のように単純な時制の場合もあれば、secondary tense を用いて、present in present（例 He is eating breakfast. ; いわゆる現在進行形）になったり、past in present（例 He has eaten breakfast. ; いわゆる現在完了）になったり、あるいは Halliday and Matthiessen (2004:338) が極端な例として挙げたように、present in past in future in past （例 He was going to have been working hard.）のような時制も、理論的には可能である。

しかし問題は、そういった複雑な時制を教えたとしても、それが学生が講読を必要としているジャンルに出てくるか、学生が習得を必要とするのはどの範囲の選択肢までか、ということである。前節までと同様、分析した作品解説中で用いられていた時制をまとめたのが Table 4 である。

Table 4: 美術書の中の Tense

finite: present	97	56%
finite: past	41	24%
finite: present in present	2	1%
finite: past in preset	12	7%
finite: past in past	2	1%
finite: present in past in present	1	1%
non-finite: imprefective	12	7%
non-finite: perfective	6	3%
計	173	100%

Table 4 の太枠内が定性をもつ節で、太枠外が定性をもたない節、いわゆる分詞節である。太枠内の定性をもつ節を見ると、ほぼ present と past で二分されていることが分かる。これは、前述のとおり、作品解説の Description の部分はほぼ present tense で、Recount と Biography の部分はほぼ past tense で書かれるために、このような結果になるのだと考えられる。そのほかに past in present、いわゆる現在完了の節が７％で、残りは全て１％である。つまり、作品解説中ではあまり複雑な時制は使われないことが分かる。仮定法なども全く利用されない。

ただし、このことは必ずしも、作品解説の動詞群の形態が単純で読みやすいということを意味するわけではない。作品解説中の動詞群は、時としてかなり複雑な形になることがある。それは、以下のような動詞群複合が用いられる場合である。このような動詞群複合では、動詞群の α の部分(tended, would, does not)の時制は past や present で単純であるが、その後ろに続く β や γ の動詞群が複雑な形になる場合がある。このため、作品解説のみをターゲットにした英語教育では、複雑な時制よりも、こうした動詞群複合の成り立ちに焦点を当てる必要があることも分かる。

Official art theory […]	tended	to see	realism as an inappropriate means of [[rendering literary and allegorical subject matter]].
	Finite	Predicator	
	'past'	'perfective'	
	α	β	

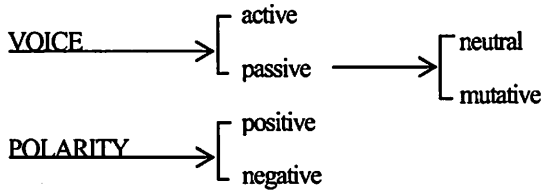
it	would	begin	to account	for the almost photographic directness […]
	Finite	Predicator	Predicator	
	'modalized'	'perfective'	'perfective'	
	α	β	γ	

Renoir	does not	appear	to have been sparing	with paints in Boats on the Se ine either.
	Finite	Predicator	Predicator	
	'present'	'perfective'	'perfective'	
			perfective past present	
	α	β	γ	

5.5. 態と極性の選択 (VOICE and POLARITY Systems)

動詞群には時制のほかに、Fig. 4 に見られるような態(voice)と極性(polarity)選択システムもある。態とは、節が能動態(active)か受動態(passive)かを選択するシステム、極性とは、節が肯定(positive)か否定(negative)かを選択するシステムである。

Figure 4: VOICE and POLARITY Systems



(adapted from Halliday and Matthiessen 2004: 349)

これらのシステムからの、作品解説における選択はTable 5, 6 の通りである。

Table 5: 美術書の中の Voice

active	151	87%
passive	22	13%
計	173	100%

Table 6: 美術書の中の Polarity

positive	142	82%	98%
positive (modalized)	28	16%	
negative	0	0%	2%
negative (modalized)	3	2%	
計	173	100%	100%

態に関しては、一般に能動態の方が自然な選択であるため、Table 5 に見るように、受動態が13%というのは、英語のシステム全体から見て特に多くも少なくもないといえる。むしろ作品解説に特徴的なのは、Table 6 に見る極性の選択である。Table 6 では、モダリティー表現の用いられた(modalized)肯定文とそうでない肯定文、モダリティー表現の用いられた否定文とそうでない否定文、というように４項目に分けているが、上の２項目を足したものが、作品解説中の肯定文の割合である。この数値が示すように、２%の節を除いて全て肯定文であり、否定文はほとんど出てこないことが分かる。

こうした選択の偏りは、作品解説の役割関係、つまり美術の専門家から一般の読者に向けて書かれたという要因と、書き言葉という伝達様式の二つの要因から生じるものだと考えられる。つまり、こうしたコンテクストでは、否定文を避けるフォーマルな文体の使用が求められるの

と同時に、書き言葉による、対等でない者間のやり取りでは、肯定文と否定文を適切に利用することによって物事の真実性や妥当性について議論する必要がないためである。

5.6. システムどうしの関連

ここまで、個々のシステムからの選択が、作品解説という限られたテクスト群の中で見るとかなり偏っているということを、複数のシステムを用いて見てきた。本節では、少し見方を変えて、一つのシステムから限られた選択肢しか用いられない、というだけでなく、複数のシステムからの選択の組み合わせ方にも偏りがある、ということを見ていきたい。

複数のシステムの選択の組み合わせ、というのは、通常は自由である。例えば、過程型と時制の組み合わせというのは、He eats breakfast.のように過程型が物質過程で時制が現在形の場合もあれば、He ate breakfast.のように物質過程で過去形の場合も、He looks nice.のように関係過程で現在形、He looked nice.のように関係過程で過去形、など、無数の組み合わせが考えられる。

しかし、作品解説に限ってみると、Table 7 のように、物質過程はさまざまな時制で登場するが、Table 8 のように、関係過程は多くが現在時制となる、といった偏りが見られる。

Table 7: 美術書中の material clause の時制

Present	19	33%
Past	17	29%
Present in present	2	4%
Past in Present (現在完了)	9	16%
Past in Past (過去完了)	2	3%
non-finite: imperfective	7	12%
non-finite: perfective	2	3%
計	58	100%

Table 8: 美術書中の relational clause の時制

Present	68	73%
Past	14	15%
Present in present	0	0%
Past in Present (現在完了)	4	4%
Past in Past (過去完了)	0	0%
non-finite: imperfective	4	4%
non-finite: perfective	4	4%
計	94	100%

作品解説というのは基本的に、画家の制作の過程を説明するときには過去形（主に Biography の部分）、出来上がった作品について語るときには現在形を用いる（主に Description の部分）。関係過程は、その出来上がった作品がいいか悪いか、どんな性質か、を述べるために Description 中で用いられるため、必然的に現在形になると考えられる。したがって、関係過程で過去完了、関係過程で現在完了といった組み合わせは、作品解説ではほとんど登場しないことになる。

また、別のタイプのシステム間の相関関係を見てみると、極性とモダリティーの選択にも相関関係が見られる。4.5 節で、作品解説の極性はほとんどが肯定で、否定文はほとんど使用され

ないことを見たが、肯定文の方は、Table 9 に見られるように、モダリティーが付与される場合もされない場合もあるが、数少ない否定の節は、すべてモダリティーが付与されるという特徴がある。

Table 9: 美術書中の polarity と modality の関係

positive clause			negative clause		
non-modalized	142	84%	non-modalized	0	0%
modalized	28	16%	modalized	3	100%
計	170	100%	計	3	100%

実例は以下の通り：

- Positive & Non-modalized

  Renoir structured the brilliant "mosaic" of the water
- Positive & Modalized

  The pearl symbolism is often ambiguous,
- Negative & Modalized

  Renoir does not appear to have been sparing with paints in Boats on the Seine either.

  we cannot help noticing

  […] scholars have not always been willing to read traditional moralizing into this canvas.

このように、否定文は、「…ではない」といった明らかな否定ではなく、必ず、「…のようには見えない」「いつも…のわけではない」のように、モダリティーの付与された婉曲な表現が用いられる。これは、前述の通り、コンテクストからの要因によって、作品解説は比較的フォーマルな文体で書かれるため、否定するときには直接的でなく、婉曲に否定しようとする意図がはたらくためではないかと考えられる。

6. 結論

以上の分析結果を一言でまとめると、作品解説に用いられる文法資源は偏っていることが明らかになった、ということができる。この結果を、大学での英語講読の授業に作品解説を用いるのが妥当かどうかという教育的コンテクストで考えると、その是非は勿論授業の目的によって変わる、といえるだろう。

つまり、「専門にかかわるテクストさえ読めれば良い」という視点、つまり美術に特化した英語力をつける、という視点から見ると、作品解説に用いられる文法資源が偏っているのならば、学生はその特定の文法事項さえ身につければよい、という方針が導き出される。そうした、美術に特化した英語教育を行うことで、最小の労力で最大の効果があげられるということになる。

逆に、「総合的な英語力を身につけたい」という視点から見ると、作品解説のような特定のジャンルだけを読んでいては、身につかない文法事項がある、ということが、ここで改めて確かめられたということになる。従って、この方針に従えば、一つのジャンルのテクストに偏らず、さまざまなジャンルに満遍なく接する必要性 がでてくる。

本稿では、芸術大学の英語の授業というコンテクストから、作品解説というテクスト群に焦

点を当てて分析を行ったが、本稿で明らかになったような文法資源の偏りは、作品解説に限らず、どのようなジャンル、レジスターについてもいえることだと考えられる。授業の目的が何か、学生が必要としていることは何かによって、用いるテクストのジャンルを考えることが必要なことが改めて確認できたといえる。

参考文献

Cope, Bill and Mary Kalantzis (eds.) (1993) *The Powers of Literacy: A Genre Approach to Teaching Writing*. University of Pittsburgh Press.

Christie, Francis and J.R. Martin (eds.) (1997) *Genre and Institutions: Social Processes in the Workplace and School*. London: Cassell.

Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. 2nd ed. London: Edward Arnold.

Halliday, M.A.K. and Christian M.I.M. Matthiessen. (2004) *An Introduction to Functional Grammar*. 3rd ed. London: Hodder Arnold.

Martin, J.R. (1985) *Factual Writing: Exploring and Challenging Social Reality*. Victoria: Deakin University.

Martin, J.R. (1992) *English Text: System and Structure*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Martin, J.R. and G.A. Plum (1997) Construing Experience: Some Story Genres. Journal of Narrative and Life History. Vol.7 (1997) : 299-308.

Matthiessen, Christian. (1995) *Lexicogrammatical Cartography: English Systems*. Tokyo: International Language Science Publishers.

日本語の形容詞と動詞が具現する過程型：The Kyoto Grammar の選択体系網を用いた分析

Realizations of Process Types by the Japanese Verbs and Adjectives: An Analysis Using the System Network in the Kyoto Grammar

藤田　透
Toru FUJITA
同志社大学大学院
Doshisha University, Graduate School

Abstract

The aim of this paper is to discuss the delicacy in the process type system of Japanese. The process type in Japanese is analysed in the Kyoto Grammar, characterised by the first choice of dynamicity in its system network. At this point, it is argued that either of the dynamic or static processes can be realised through either of adjectives or verbs (Processes). At more delicate choices in the network, there seem to be some process types that can be only realised by a restricted number of elements. Such process types are regarded as sufficiently delicate. Other process types that can be realised by a number of different adjectives and verbs can be, on the other hand, analysed to show more delicate choices of process types. This is because these process types are realised by many different Processes which are not necessarily has the same meaning.

1．はじめに

選択体系機能言語学（SFL）の枠組みでは、言語を用いて表す意味を、言語の機能と呼び、各言語が表し得る機能を整理して選択体系網を構築することを目的の一つとしている。これは、英語や日本語といった個別言語について、SFL の理論的枠組みとは別に、個別の文法を記述する必要があるということである。特に、英語と日本語のような、異なる文化の中で形成された言語は、各言語の分析に最適な個別の文法を提案することが必要であると考えられる。本論では、個別言語の文法である the Kyoto Grammar で提案されている過程型の選択体系網を用いて、日本語の形容詞と動詞という二つの異なる品詞が、どのように用いられ、その分析がどのように選択体系網の分析に寄与できるかを議論する。

個別言語の文法を SFL の枠組みを用いて分析している例としては、Halliday & Matthiessen (2004) の英語の分析が挙げられる。この中では、英語の観念構成的メタ機能の節レベルでの具現に関して、その過程中核部が動詞によって具現されて、各節の過程型が六種類に分類されると分析

している。これに対して、日本語の分析については、the Kyoto Grammar が提唱されており、過程中核部としては、日本語の形容詞と動詞を認めている（龍城, 2004）。これは、日本語の形容詞が、英語の形容詞とは異なり、文法的な叙述機能を有しているという点を反映した分析である。また、形容詞と動詞が、具現する過程型についても、英語とは異なる、動性過程（dynamic）と静性過程（static）という二極構造での分析がなされている（龍城, 2008c）。この過程型分析は、英語との対照分析を行う the Kyoto Grammar の特徴の一つとなっている。

日本語の形容詞と動詞が具現可能な過程型に関して、龍城（2008b）や藤田（2008a）は、いずれかの品詞が、静性過程で、他方が動性過程を具現すると考えるのではなく、二つの過程型の具現には、両品詞とも用いることができると分析している。これによると、形容詞が表す意味は、静性過程に限られず、動詞が表す意味も動性過程に限られることがないということがわかる。

本論では、この分析を基にして、動性過程と静性過程という二つの過程型の先にある、より細密度の高い過程型選択での、過程型の具現について議論する。動性過程と静性過程という一次的な選択肢の段階では、各品詞が具現可能な型は特定できないように思われる。しかし、より細密な過程型を分析すれば、ごく少数の語だけが具現形として見つかる過程型と多くの語が見つかる過程型が存在する。この違いを選択体系網の細密度の度合いと結びつけて、より多くの具現形式が存在する過程型には、より細かい選択体系の分析が必要であるということを議論する。

まず、the Kyoto Grammar における過程型の第一次選択を具現する過程中核部となり得る形容詞と動詞の例を概観し、動性と静性という過程型の分類が、単なる文法範疇としての形容詞と動詞という品詞の分類に適当ではないということを確認する。その上で、さらに細密な過程型の選択体系網の選択肢について、どのような形式を用いて表記するのかを分析する。さらに、その分析の結果、どのような過程型がより細密な分析を受けるのかも考察する。

2. The Kyoto Grammar における形容詞と動詞

日本語では、形容詞と動詞は、二つの独立した品詞として扱われているが、英語の形容詞と動詞とは異なり、両品詞が似た特徴を持っていることが知られている。例えば、日本語の形容詞は、動詞とほぼ同等の活用体系を有しており、特別な助詞、助動詞、動詞などを用いなくても、叙述機能を有している。これに対して、英語の形容詞は専ら名詞を修飾する機能に限られており、形容詞を用いて叙述するためには、be 動詞のような動詞の補助を必要とする。このように、同じ形容詞という品詞の名称が与えられているが、その文法的振る舞いは異なっており、同様に機能的分析においても、日英語の形容詞を同じように扱うことは不適当であると考えられる。

また、形容詞には叙述機能以外に、その連体形を用いて名詞を修飾する機能も持ち、修飾機能を果たすこともある。しかし、連体形を用いた修飾は、動詞であっても可能であるため、両品詞の文法的な違いを、修飾か叙述かという点から、明確に分離することは難しい。

このような日本語の特徴を捉えて、Tatsuki（2004）を始めとする the Kyoto Grammar では、日本

語の形容詞に叙述機能を認めて、過程構成の中では過程中核部として分析している。つまり、英語では過程中核部は動詞によってのみ具現されると考えられているのに対して、日本語では過程中核部は形容詞と動詞のいずれもが具現可能であると分析している。例えば、英語で This book is difficult と言った場合、動詞の is が過程中核部と分析されるが、対応する日本語の「この本は難しい」の中で過程中核部として分析されるのは、形容詞の「難しい」である。このように、the Kyoto Grammar では日本語の語彙文法に適った分析が試みられている。

過程中核部の分析に加えて、the Kyoto Grammar では、形容詞と動詞が具現し得る過程型の分析も同時に行われている。これは、日本語における観念構成的意味を選択体系網によって記述したもので、第一次の選択体系として、動性過程と静性過程という二つの選択肢を持ち、日本語で表すことができる経験を分析したものである。日本語の過程型を捉えた the Kyoto Grammar における過程型の選択体系網を図１に示す：

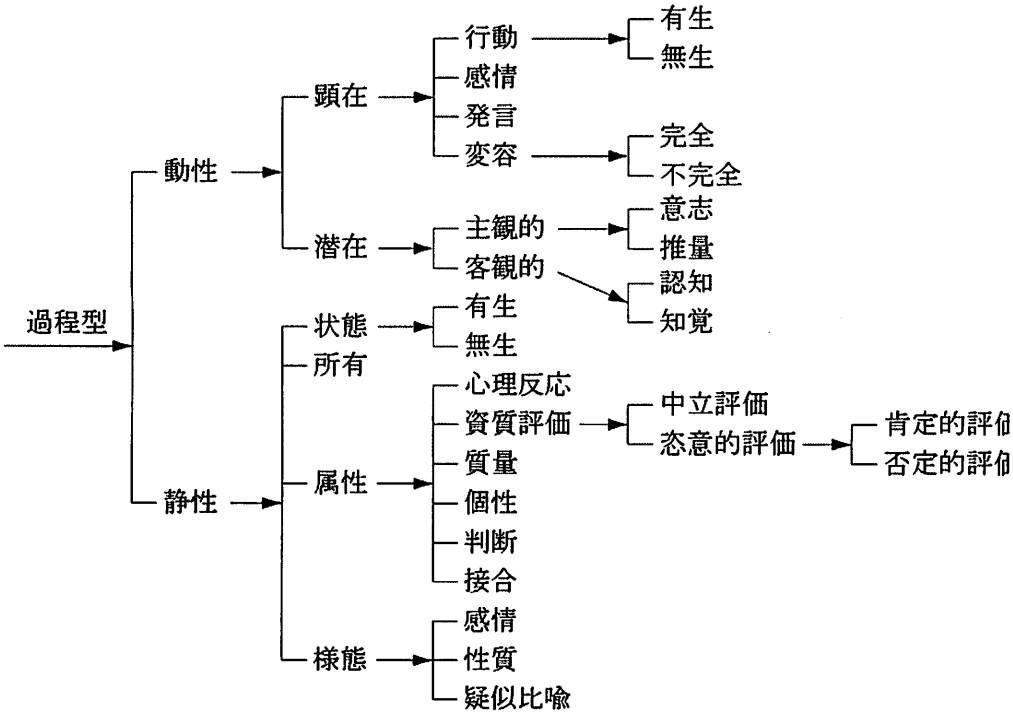


図１：日本語の過程型選択体系網（龍城，2008c）

この選択体系網は、英語の物質過程、心理過程、関係過程を中心として、行動過程、発言過程、存在過程を含む六種類の過程型に分類する分析とは大きく異なっている。

日本語の過程型選択体系網では、第一次選択に、動性過程または静性過程という選択肢を置いている。この分類は、話し手が表現しようとする経験が、時間の流れの中で、何らかの変化を伴うものであるか否かという点を捉えたものである。動性過程は、具体的な動作を伴う経験や一時的な

思考、感覚の表現によってもたらされるような意味を表す過程型である。また、静性過程は、ものの大小といった属性や、恒常的な状況を表す過程型である。

SFL の枠組みによる個別言語の文法は、各言語の言語使用を意味化して分析し、選択体系網として得られた、様々な意味を具現する方略を記述することを一つの目的としている。従って、図1は日本語の観念構成的メタ機能で表される過程型の選択肢を示したものであると言える。この選択体系網は、日本語で表現可能である意味を、その種類によって、記述したものであるため、各過程型を具現する方略については、別個に分析が必要である。つまり、選択体系網の提示だけでは過程構成の全体像を示したことにはならず、各過程型がどのように具現されるのかを分析して、記述する必要がある。

日本語の過程型を具現する方略について、the Kyoto Grammar では、特定の品詞や文法範疇が、専ら静性過程または動性過程を具現するという分析はしていない。ある品詞と過程型を直接結びつけるのではなく、形容詞と動詞という通常異なる範疇と認められている二つの品詞のいずれもが、動性と静性のどちらの過程型をも具現可能であると分析している（Tatsuki, 2008b；藤田, 2008a)。つまり、形容詞は静性過程、動詞は動性過程というように、関係が固定されているわけではく、形容詞には動性と静性の具現可能性があり、同様に動詞にも動性と静性の過程型を具現する機能があると分析されている。

例えば、形容詞である「痛い」は、今現在の一次的な痛みを表現する「太郎は痛がっている」のように、人間の一時的な感覚を表すためにも用いることが可能であり、動性過程を具現しているといえる。また、動詞であっても、「山がそびえる」の「そびえる」のように山の恒常的な性質を表している場合には、静性過程を具現していると考えられる。

このように、日本語の観念構成的メタ機能の、特に過程型とその具現可能性の研究においては、形容詞と動詞を切り離して、分析することができないと考えられる。日本語の過程型分析は、形容詞が表す意味や、動詞が表す意味という分析では不十分で、各過程型がどのような形式によって具現可能であるかを分析する必要がある。つまり、日本語の観念構成に関する意味化分析では、形容詞と動詞を同時に分析する必要があり、どちらか一方のみに集中した分析では、過程型具現の本質を捉えることが難しいと考えられる。

3. 形容詞と動詞が具現する過程型

The Kyoto Grammar の分析では、形容詞と動詞という品詞分類が、静性過程か動性過程という二つの意味の選択に直接的な関係を持たないと考えられている。そこで本節では、図1に挙げた過程型の一部を取り上げて、どのような語によって具現可能であるかを分析する。この分析では、ある種の過程型において、形容詞のみによって具現されたり、動詞によってのみ具現されたりといった偏りがあるように思われる場合が見られる。しかし、品詞の別という形式的分類は、機能的な分類である過程型と本質的な関わりがあるとはいえない。そこで、本論では、このような、一見する

と不自然な偏りを、選択体系網の拡張可能性の現れであるととらえる。これは、選択体系網による意味のネットワーク化が進めば、最終的には、一単語を特定すると考えられるためである。具現可能な具体的な形式が少ない過程型は、その先の選択体系の拡張も少なくなると考えられる。また逆に多くの形式によって具現される過程型に関しては、それらの形式が同じ意味を持つということが考えにくいので、さらに過程型の選択体系網を拡張し、過不足無く過程型を記述できる過程型選択体系網を提案する必要があると思われる。そのため、より多くの種類の語が見つかるような過程型については、さらなる分析の必要があるということになる。

まず、形容詞と動詞の両品詞によって具現される日本語の過程型として、静性-状態過程を挙げることができる。この過程型は、物や生物の存在を表すと考えられている。状態過程は、典型的には「ある」や「いる」といった動詞や、「物資がない」の「ない」のような形容詞で表すことができる。つまり、「ある」と「ない」という存在の有無を表す表現は、同じ過程型を具現していると考えられるが、それぞれ異なる品詞によって具現されることが可能である。[i]

このように、一つの過程型に対して、いくつかの具現可能性が残されているということは、より細密な意味の選択体系を構築することができることの現れであると考えられる。なぜなら、これらの全ての選択肢が全く同じ過程を表しているものとは考え難く、別の語として存在しているために、何か異なる意味的な機能を負っていると考えるのがより自然であるからである。よって、状態過程には、さらに意味の選択体系網が広がる可能性があると考えられる。

実際に、the Kyoto Grammar の分析では、状態過程をより細密な選択肢で分析している。状態過程の選択肢のうち、無生の過程型で、生物以外の存在を表す場合には、「ある」と「ない」のように、形容詞と動詞を双方とも用いることができる。それに対して、有生の生物の存在は、「いる」という動詞を用いることができるが、その否定の意味は形容詞ではなく、「い＋ない」という動詞と否定辞の複合によって表される。これによると、有生過程は、「いる」という動詞しか用いることができないが、無生過程は、「ある」と「ない」の二つの過程中核部を用いて具現することができると言える。

この分析を見る限り、「ある」と「ない」という過程中核部は存在の有無を示すという点では、同じ過程型を表すと言っても良さそうであるが、存在している場合の「ある」と存在していない場合の「ない」という二つの異なる過程を表しているとも解釈することができる。そのため、この二つの語が異なる過程型を表しているということを示すために、例えば、「肯定」と「否定」のようなさらに細かい選択肢を与えることができるかもしれない。

また、他の過程型を見てみると、動性-潜在-主観的過程も、形容詞と動詞の両方をその具現形式として用いることができるように思われる。この過程型は、動性過程として一時的な経験を表して、潜在過程としてその動きが話者以外から観察できず、主観的過程として、その経験が話者以外からは判断できない過程である。この過程型を具現する形式には、動詞の「思う」、「信じる」、「疑う」や、形容詞の「楽しい」、「怖い」、「悲しい」などが挙げられる。

このように、主観的過程を具現するには、形容詞も動詞も等しく用いることができる。形容詞と動詞がいずれも用いられるということは、その過程型を具現する過程中核部の形式が比較的多く

見つかるということが言える。そのため、この部分ではさらに細密な選択肢を設けることが適切であると考えられる。

図1のthe Kyoto Grammarの分析を見てみると、主観的過程からさらに細密な過程型への選択体系が分析されている。主観的過程には、意志過程と推量過程という選択肢が設けられている。この過程型分析では、上記の「思う」、「信じる」、「疑う」といった動詞は、意志過程を具現すると考えられる。また、「楽しい」、「怖い」、「悲しい」といった人間の感情を表すような過程は、推量過程と分析されるのが適当であると思われる。この分析では、意志過程には主に動詞が用いられており、推量過程には形容詞が用いられる場合が多いということがわかる。このような使い分けは、語句の機能とは独立しているはずであり、品詞によってその機能を限定するということはあまり考えられない。そこで、ここでは、過程型の選択肢が狭まるに連れて、当該の過程型を具現する具体的な語が少なくなった結果であると考える。

また、このような品詞の区別は、典型的なものを挙げた場合に観察されるのみであって、コンテクストによっては他の様々な形式で具現することも可能である。例えば、意志過程を表す過程中核部には形容詞が多く見つかるが、「怖い」とほぼ同じ意味を持つ「恐れる」という動詞によっても具現可能であると考えられる。このように、過程型を具現する形式が何らかの偏りを見せたとしても、必ずしも何か一つの品詞にしぼって考えることはできない。

また、静性-属性-質量過程については、形容詞と動詞の両方が用いられると考えられる。質量過程は、物の多少を表す過程である。例えば、「多い」、「少ない」といった形容詞によって具現される一方、「足りる」、「余る」といった動詞によっても具現することができる。

これらの質量過程を具現する語の中で、「多い」や「少ない」は、比較的単純にものの多少を述べていると考えられる。一方、「足りる」や「余る」という語は、何らかの基準となる分量があって、現在手元にあるものや話題にしているものの量がその基準を満たすものであるか否かということを述べる語である。このように、単純に多少を述べる場合と、基準に照らし合わせて多少を述べる場合が考えられるので、観念構成の違いが見られる。このような意味の違いは、選択体系網上で、例えば比較基準の有無といった選択肢を設けて、記述していくことができる。

また、「多い」や「少ない」という比較的単純に見える語であっても、コンテクストによっては、基準を含めた表現と解釈することができる。例を挙げると、「この本はページ数が多い」と言った場合、単純に漠然と数が多いということを述べているとも考えられるが、典型的に考えられる本のページ数と比較して、ここで指されている本のページ数が多いということを述べているとも考えられる。後者の場合、平均的なページ数という基準が存在することとなり、「多い」という語であっても、基準に照らし合わせた分量の記述をすることができるということがわかる。

質量過程と同じく、属性過程の選択肢の一つである、判断過程については、その表現形式が比較的限られているように思われる。判断過程は、物事の善悪を述べる過程型であるが、その具現形式は「良い」、「悪い」といった形容詞が主である。判断過程のように、具現可能な語があまり多くは見つからないような過程型は、さらに細かい選択肢を置く必然性が小さいように思われる。もちろん、そのような過程型の中の各語にも、意味の区別は存在すると考えられるが、まずはより明確

な意味の区別が見られる過程型の選択体系を分析することが必要であると思われる。

次に、動性-顕在-行動過程の例を分析する。この過程型は、顕在過程の選択肢の一つであるので、外界から観察可能な、生物や物の動きを具現する。特に行動過程は、感情を含まない具体的な動作や、物の移動を具現する過程である。この過程型は、「作る」、「壊す」、「壊れる」、「走る」、「歩く」などで具現される意味を扱う。この過程型には、人間が動作主であると考えられる過程に加えて、「雨が降る」の「降る」や「風が吹く」の「吹く」といった意味のものも含まれている。これらの共通する特徴は、物事が動く様が他者からも用意に観察可能であるという点である。このように、行動過程は、多様な観念構成的経験を含んでいるため、過程を具現する過程中核部も多く見つかる。

このように行動過程には、多種多様な経験が含まれると考えられる。これらの経験は、一様に同じ意味を表しているというわけではないので、多種の経験を記述するための選択体系を構築する必要がある。現在、the Kyoto Grammar において、行動過程の下位に、生物の動きを表す有生の過程と、無生物の動きを表す無生の過程が選択肢として設けられている。前者は、人間を含む何らかの生物や、物語の中などで生物とみなされているような物が、行為者として存在するような過程を示す。例えば、「作る」や「走る」といった過程は、生物がその行為を行うことが一般的である。また、後者は生物以外の物が、動作する過程を示すもので、「雨が降る」の「降る」などがこれに当たる。

しかし、ここでも各語について、表すことができる過程型が決まっているのではなく、あくまでも典型的に表す過程があるというだけである。例えば、「作る」は動作主が有生であるという点で、有生の過程として扱われる場合が多いが、「機械が車を作る」という場合の「機械」は有生ではないと考えられるので、この場合の「作る」は、無生であると考えることもできる。同様に、「風が吹く」という場合の「吹く」は、無生であると考えられるが、「太郎が息を吹く」という場合は、「太郎」によってもたらされる行為なので、有生の過程であると解釈することもできる。

ここまでに挙げた過程型と、過程型を具現する形容詞や動詞を、図１の過程型選択体系網と結びつけて考えると、下図のような選択体系網を示すことができる：

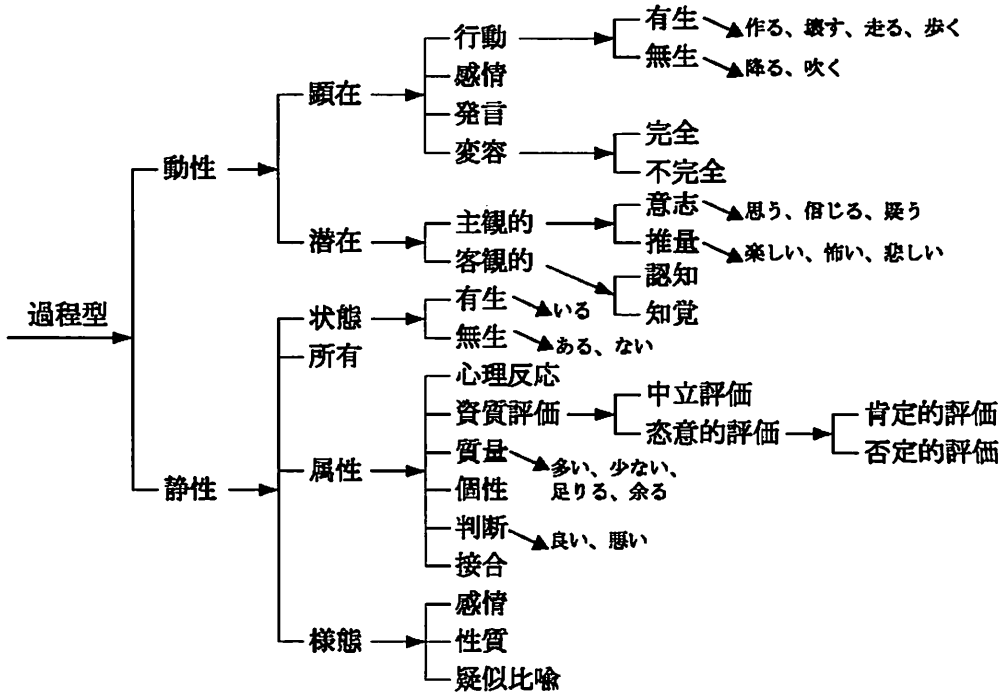


図2：日本語の過程型と具現形式

図2では、現在the Kyoto Grammarで提唱されている過程型の選択体系網（龍城 2008c）を基にして、いくつかの過程型について、過程型を具現する形容詞や動詞を挙げている。

既述のように、この選択体系網の中で、形容詞や動詞といった品詞の別に関わらず、具現可能な具体的な語が多く見つかる過程型に関しては、龍城（2008c）でも指摘されているように、さらに選択体系を拡張して、より細密な選択肢を与えていく必要がある。より細密な分析が必要であると考えられる過程型には、動性-顕在-行動-有生過程や静性-属性-質量過程などが挙げられる。これらの過程型を具現する、形容詞や動詞は多く見つかるが、それらが分類できないほど互いに似通った意味を表しているとは考えにくい。そのため、さらなる意味の分類を可能として、それに応じて、対応する選択体系網の分析もなされなければならないと考えられる。

これとは逆に、静性-属性-判断過程や静性-状態-有生過程のような過程型は、その過程を表す過程中核部の種類があまり多くはない。そのため、選択体系網の拡張可能性はそれほど高くはない。また、過程を具現する過程中核部が持つ意味に従って、選択体系網を拡張していったとしても、具現可能な要素が少ない以上、何段階にも多岐にわたって、選択体系網が構築されるということは考えにくい。

本節では、the Kyoto Grammarで提案されている過程型のいくつかについて、その過程型を具現する形容詞や動詞を挙げて、具現する語が多く見つかるものはさらに細密な分析が必要であるということを述べた。一つの過程型に対して、多くの形容詞や動詞で具現される過程中核部が考えられる場合に、それらが全てほとんど同じような経験を表していると考えるのは難しい。そこで、見つ

かった多くの過程中核部が表す意味を分類し、過程型の選択体系網を細密化していく必要があると思われる。

4. おわりに

本論では、SFL の枠組みを用いて、日本語の機能を明らかにしようとする the Kyoto Grammar の分析を基に、過程型と具現形式の関係を考察した。日本語は、英語とは異なる文化で育まれた別個の言語であるため、the Kyoto Grammar では、図1に示したように英語とは異なる過程型の選択体系網を提案している。この選択体系網について、第一次の動的過程か静的過程かという選択では、形容詞と動詞の意味的な区別は不要に思われる（龍城, 2008b；藤田, 2008a）。

過程型の選択体系網で、第一次選択からより細かい選択肢である過程型を分析していくと、判断過程のようにそれほど多くの具現する形式を持たないと考えられる過程型がある。このような過程型は、選択体系網の選択肢がその末端近くまで達しているため、これ以上選択肢がないような場合であると考えられる。

また逆に、多くの形容詞や動詞が具現することができる過程型は、その下位により細かな選択肢を設けて記述することが可能であると思われる。さもなくば、当該の過程型が表す意味の範囲が広すぎて、多くの形容詞や動詞が同じ過程型に分析されてしまう。実際には、各形容詞と動詞は、それぞれ固有の意味を持っていて、全く同じ観念構成的意味を表すようなものは少ないと考えられる。そのため、より細密な過程型の選択体系網を構築し、日本語で表現可能な過程型を過不足なく、表していくことが必要である。

参考文献

藤田, 透 (2008a)「The Kyoto Grammar の枠組みによる品質を表す形容詞の分析」. *Proceedings of JASFL, 2*, 1-9.

藤田, 透 (2008a, 10 月)「日本語の形容詞と動詞が具現する過程型：The Kyoto Grammar の選択体系網を用いた分析」口頭発表, 日本機能言語学会秋期大会, お茶の水女子大学, 東京.

Halliday, M. A. K., & Matthiessen, C. M. I. M. (2004) *An Introduction to Functional Grammar* (3rd ed.). London: Arnold.

工藤, 真由美 (2002)「現象と本質：方言の文法と標準語の文法」.『日本語文法』2-2, 46-61.

Tatsuki, M. (2004, September) *A new treatment of Japanese transitivity: An analysis of adjectives as a process type — The Kyoto Grammar approach-*. Paper presented at the meeting of International Systemic Functional Congress, Doshisha University, Kyoto, Japan.

Tatsuki, M. (2008a, July) *A contrastive study of English and Japanese transitivity: The Kyoto Grammar approach.* Paper presented at the meeting of International Systemic Functional Congress, Sydney, Australia.

Tatsuki, M. (2008b) A Contrastive Study of English and Japanese Transitivity: The Kyoto Grammar Approach. In Wu, Matthiessen, & Herke (Eds.) (2008), pp. 178-182.

龍城 正明 (2008c)「日英語の過程型に関する考察 : the Kyoto Grammar による日本語過程型分析」『同志社大学英語英文学研究』83, 69-98.

龍城 正明 (2008d)『「は」と「が」: そのメタ機能からの再考 : the Kyoto Grammar の枠組みで』. *Proceedings of JASFL*, 2, 135-149.

龍城 正明 (2009)「The Kyoto Grammar と日本語分析」.『日本語学』*28-4*, *60-72*.

Wu, C., Matthiessen, C. M. I. M., & Herke, M. (Eds.) (2008) *Proceedings of ISFC 35: Voices Around the World.* Sydney, Australia: 35th ISFC Organizing Committee

i 本文中では、どの過程型についても、最も典型的と考えられる具現形式を挙げてはいるが、過程型と形容詞や動詞の形式は、固定的な対応を持つわけではない。従って、コンテクストによっては、同じ形式が異なる過程型の具現に用いられることもあることに留意する必要がある。

日本語における無助詞の機能

— 主題性を中心に —

FUNCTIONS OF THE ZERO-PARTICLE IN JAPANESE
— FOCUSING ON ITS THEMATIC CHARACTER —

福田一雄
Kazuo FUKUDA
新潟大学
Niigata University

Abstract

In Japanese, clause-themes and grammatical cases are basically marked by the relevant particle accompanying clause-elements. It is, however, not rare that zero-particle elements seem to perform similar functions to their corresponding particle-added counterparts. Then, what similarities and differences exist between instances with and without particles?

In this paper, we focus upon the thematic character of the zero-particle, while referring rather peripherally to the problem of grammatical case-relations implied by the zero-particle to reserve it as a research topic for another paper. Through our discussion, we propose that the thematic zero-particle element is in fact the 'semi-theme' or something lying halfway between the full–theme accompanied by the particle '*wa*' on the one hand and the clause-initial framework element on the other.

1．はじめに

日本語の格(case)や主題(theme)は、普通、名詞句の直後に助詞を伴って表される。しかし、常にそうであるとは限らない。本稿では助詞が表現されない場合をまとめて、「無助詞」と呼び、助詞がある場合と無助詞の場合との異同について、主に主題性(thematicity)[1]の観点から検討したい（φ記号は無助詞を示す。助詞がある場合は、比較の必要に応じて当該の助詞を下線で示す)。

無助詞の構文とは次のようなものである。

(1) わたくしφ、来春からニューヨーク勤務となりました。
(2) 雨φ降ってる？
(3) 私はその本φ一週間で読みました。

(1)の「わたくしφ」には「わたくし<u>は</u>」のように主題を示す助詞「ハ」が潜在している

（「潜在」という用語については丹羽2006を参照）。(2)は「ガ」格の潜在だが、実際に「ガ」を入れると、逆に不自然になる。また(2)では、先行文脈で「雨」が話題になっている場合には主題の「ハ」も想定できる。(3)はまず「ヲ」格の潜在が想定できる。(3)の無助詞に主題の「ハ」の潜在を想定するのは、いくぶん無理がある。その原因は節頭の主題「私は」の存在である。仮に(3)の「その本φ」を「その本は」に変換したとする。そうすると「その本は」は、一つには、久野（1973）の言う「対比のハ」、あるいは長沼（2007）の言う「より有標性の高い主題」になる。しかし無助詞の機能に関して言えば、第２節で見るように、対比的有標主題の機能とは相容れないものである。もう一つのケースは「私はその本は」を複式無標主題と解釈する場合である。くだけた会話の場合「その本は」は対比的有標主題ではなく、無標主題に近いものになる。「ハ」の対比性については、Fukuda(2006他)で繰り返し述べてきたように、複式主題内部の後方の「ハ」名詞句の対比性は、ゼロか100かではなく、段階的(gradient)なものである。

丹羽（2006）は、(1)のような場合を無助詞題目（本稿では無助詞主題）と呼び、(2)や(3)を無助詞格と呼んでいる。しかし、上述のように無助詞主題と無助詞格は常に截然と区別できるわけではない。例文(2)には無助詞格としての「雨が」の想定が優先されるが、「雨は」も可能である。例文(3)は無助詞格としての「ヲ」格の潜在が想定されるが、くだけた会話では「ハ」主題に近い主題解釈も排除できない。このような解釈のゆれが無助詞の顕著な特徴である。

本稿では主に(1)や(2)のように無助詞が節頭にくる場合を扱う。「節頭にくる」ということの意味は、「ハ」を伴う主題が無助詞名詞句の前に存在しない場合という意味である。従って、もし(3)の「私は」がなくて、次のようになる場合、本稿の議論の対象となる。

(4) その本φ一週間で読みました。

本稿における議論の主眼は、(1)、(2)、(4)のような無助詞と「ハ」を伴う主題との異同の検討である。言い換えれば、(1)、(2)、(4)における無助詞を主題と呼ぶのが妥当かどうかという問題である。

2．節頭無助詞の主題性

無助詞と係助詞「ハ」を伴う主題との違いについて考えてみたい。

(5) a. この店φ、安いね。
　　b. この店は、安いね。

(5a)の無助詞名詞句は属性記述の形容詞述語文の節頭位置に生じることによって、主題機能を担っていると考えられる。当該の文が「何について」述べている文であるかを示すのが話題的主題の機能である。筆者のこの立場については本稿の脚注１と第４節、およびFukuda（2006他）を参照されたい。(5a)は無助詞であるから、当然、助詞の働きではなく、節頭という位置自体が主題性を付与しているという点が重要である[2]。したがって(5a)は

(5b)同様、「この店」について何かを述べている文である。では(5a)の無助詞は(5b)における「ハ」を伴う主題とまったく同じ意味機能を有すると言えるだろうか。

菊地（2006）は、(5a)のような無助詞は聞き手の注意を当該の名詞句が指示するものに一時的につなぎとめる働きをしているのであり、一方(5b)のような「ハ」による主題は、当該の名詞句が指示するものについて十分に語ろうとすることを合図する機能があると述べている。

> ハは「それを話題として、それについて（ある程度＜しっかり＞と）語ろうとする」場合のマーカーであるのに対して、φは「それについて、その場（対話の場）の関心をフィックスし、その場で必要なやりとりをしようとする」場合の手段である。
> （菊地 2006:19）

菊地(2006)のこの指摘は注目しておく必要がある。実際、ある事項について「しっかり語ろう」とすれば、係助詞の「ハ」が必要になるようである。次の例を見てみよう。

(6) a. ソシュールは近代言語学の父と呼ばれている。
　　b. * ソシュールφ、近代言語学の父と呼ばれている。

(6a)は「ソシュール」について「冷静に」客観的に「しっかり」語ろうとしている。筆者はこの「冷静に」を菊地の「しっかり」に追加したいと思う。その条件下では(4b)は不適格である。

福田（2004）および Fukuda(2006 第 8 章)は日本語の節頭要素を枠組要素(Framework Element ＝ FW)と主題(Theme＝Th)に区分した。たとえば、上の(5a)、(5b)は共に FW のない、Th だけの主題文である。では(5a)、(5b）にはどのような違いがあるのだろう。筆者は(5a)における節頭無助詞名詞句は日本語の主題の基本的性格である話題性としての「～について」特性を含意する点と、一方で菊地（2006:19）の指摘するように、φは「しっかり語るのではなく、対話の場での関心を一時的に固定するためのツール」という特徴の双方に注目し、(5a)に見られるような無助詞名詞句を半主題(semi-theme)と呼びたいと思う。そしてそれらを含む構文を半主題構文と呼ぶことにする。

3．無助詞の非焦点性

前節では、無助詞が「ハ」を伴う主題と同様に「～について」特性を含意する一方で、「ハ」を伴う主題によって示される明示的主題性を欠くという特性から、それを半主題性を担う表現であるとした。本節では、無助詞と「焦点」との関係について考えてみる。

加藤（2003：5 章 5 節）によれば、「無助詞」は「焦点」を表示できないとのことである[(3)]。ここでは、無標焦点、排他焦点、対比焦点の３種を取り上げる。まず、無標焦点の例を見てみよう。

(7) a. 彼は彼女と電車で奈良へ行った。

b. *彼は彼女と電車で奈良φ行った。

特別な対比強勢がない場合、(7a)の無標焦点は述語動詞の直前に来る要素に置かれる。この場合、「奈良へ」である。それを(7b)のように「奈良φ」にすると文法的不適格文となる。次は排他焦点である。排他焦点は野田(1996)の言う「排他文」(久野 1973 の「総記」)の焦点を指す。

(8) a. 太郎が間違っている。
b. 太郎φ、間違っている。

(8b)は(8a)のように排他焦点「太郎だけが」を表すことができない。(8b)は半主題としての「太郎φ」を示し、菊地(2006)の指摘の通り、一時的にその場の関心を「太郎」に固定しておくという機能を果たしているのである。排他文の(8a)には「誰かが間違っている」という前提(presupposition)があるが、(8b)にはそのような前提がない。

次に対比焦点を見てみよう。

(9) a. 今日は、雪は降ってないけど雨は降ってる。
b.??今日は、雪は降ってないけど雨φ降ってる。
d.??今日は、雪φ降ってないけど雨φ降ってる。
e.?今日は、雪φ降ってないけど雨は降ってる。

対比のペアは「雪は降ってない」ことと「雨は降ってる」ことである。そして、対比焦点の一つである「雨は」を無助詞にした文は著しく不適格になる。それに比べれば、(9e)に見られるように「雪」の方を無助詞にして、「雨」に「ハ」を付与して対比焦点性を明示した文は適格性が上がると思われる。同じ対比焦点でも、後方に生じる対比焦点がより高い焦点性を有することが分かる。

以上のことから、無助詞は無標焦点、排他焦点、対比焦点のいずれに対してもふさわしい表現手段ではないようである。そしてこの脱焦点的性質がすでに述べた無助詞の「半主題性」とまさに表裏一体をなすことに注意すべきである。

4. 無助詞構文の文法特性

すべての助詞が無助詞になり半主題構文を作り得るかと言えばそうではない。無助詞になるためには、格関係が比較的容易に同定できる場合が多いようである。その点で「ガ格」と「ヲ格」が無助詞になりやすい。ただし、次のような長めの文では格関係の明示が優先され、無助詞は不適当である。

(10) a. 太郎が新幹線で東京から新潟にやってきて、花子に豪華なプレゼントを渡した。
b. 私たちφ、二人で一緒に書いた本を3冊出しているけど、対談集を出すのはこれが初めてね。 (壇ふみ・阿川佐和子、『けっこん・せんか』文春文庫 2007)

(10a)では下線を施した助詞のどれも無助詞になれそうもない。あえて、「太郎φ」、「豪華なプレゼントφ」のように「ガ格」と「ヲ格」の無助詞化を考えても、やはり不自然になる。ただし多少長くても(10b)の「私たちφ」は無助詞でなんの問題もない。この「私たちφ」は「ハ」主題に近い半主題であり、真ん中に譲歩節をはさんで、文末の「～初めてね」までそのスコープを広げている。従って、半主題性を有することは明らかである。文末が「ネ」で終わり、第4節で述べる「働きかけ」機能を持つ発話となっている。

第1節で、いわゆる判断文における無助詞の半主題機能を検討し、第2節では、半主題性との関係で、無助詞の脱焦点化機能を見た。では無助詞と無題文（野田1996参照、久野1973では「中立記述」）の関係はどのようになっているのだろう。半主題構文は、「ハ」による有題文と同様、無題文には生じないと言えるだろうか。以下の例を見てみよう。

(11) a. 富士山φ、見える？
　　b.?富士山φ、見える。
(12) a. はさみφ、ある？
　　b.?はさみφ、ある。

(11)、(12)において質問文における無助詞の容認度は高く、平叙文の方はかなり不自然である。質問文は第4節で見る「働きかけ」の度合いが高いということがその理由なのかもしれない。では(11a)、(12a)の無助詞を助詞で置き換えるならどの助詞が適当だろうか。まず「富士山<u>が</u>」と「はさみ<u>が</u>」が浮かぶ。しかし同時に「富士山<u>は</u>」、「はさみ<u>は</u>」が可能となる文脈も想定できる。すなわち、(11a)、(12a)は無助詞格としての「ガ」格と半主題としての主題性が混在しているのである。

(13) a. 富士山<u>が</u>見える？
　　b. 富士山φ見える？
(14) a. はさみ<u>が</u>ある？
　　b. はさみφ、ある？

興味深いことに(13a)よりも(13b)が、そして(14a)よりも(14b)がより自然な表現に感じられる[(4)]。(13a)や(14a)は情報要求の肯否疑問文としての意味の他に、相手の言ったことをエコー的に繰り返して非難・驚き等を表す含意もありそうである。無助詞を使えば、「ハ」主題と同様、先行の言語文脈や状況文脈において「富士山」や「はさみ」が話題になっていたという含みが生じる。一方、(13a)、(14a)のように「ガ」格を明示すると、そのような含意はまったく生じない。

角度を変えて言えば、中立記述文の「ガ」格主語を無助詞にすると、主題の「ハ」による置き換えの可能性が出てくるということである。すなわち、中立記述文に無助詞を使用することは結果として機能上の両義性(ambiguity)を生むことになるのである。つまり焦点性と主題性という相容れない二つの機能の間におけるゆれである。この点がまさに本稿でいう半主題性の基本的特徴の一つなのである。

(11)〜(14)の検討から、無助詞は、情報の既知・未知に関して「ハ」を伴う主題よりも、より一層自由な幅を持っていると言えるだろう。次の例も認知的既知・未知といった区別と無関係である。(15) の無助詞は「ヲ格」潜在の半主題として談話に導入されている。同時に次節で見る「働きかけ」機能に関係する例文である。

(15) 皆さん、むだ毛φ、どのように処理されていますか?
(新たな話題の導入、「FM 新潟」ラジオ・ショッピング・キャスターの第一声, 9 Oct. 2008)

5. 無助詞の語用論的特徴

節頭無助詞が半主題機能を担い、それに対応して、脱焦点化の機能を有することを見た。さらに中立記述文の「ガ格」が無助詞化されると半主題機能が生じることを見た。ではそのような半主題機能がポライトネスなどの語用論的機能といかなる関係にあるかを考えてみる。

藤原(1992)は無助詞が聞き手に対する距離の取り方に関係すると述べ、無助詞に関して「語用論的義務省略」と「随意的省略」を区別している。「語用論的義務省略」は、本稿の例文(1)に相当する。

(16) わたくしφ、来春からニューヨーク勤務となりました。(=1)

(16)の無助詞を「わたくしは」にすれば、「私」を前面に出しすぎる表現態度になり、菊地(2006)の言うように、さらに言葉をつないで「私」について「しっかりと」話し続ける意図が含意される。その意味で、この場面では藤原 (1992) の言う「語用論的義務省略」になっている。

筆者は、無助詞発話には、<改まり発話系列>と、<親しみ発話系列>との二系列があると考えている。上例 (16(=1))や「ご照会の件φ、了解致しました」は前者で、「あたしφ、お茶飲みたーい」は後者である。両者とも特定の聞き手との関係を踏まえた一種の気配りやラポール(rapport)の維持に対応した無助詞の使用だと言える。

なぜ同じ無助詞で「あらたまり」と「したしみ」の両方の場面に対応できるのであろうか。考えられることは「半主題性」としての「押しつけがましくない控え目さ」にあるのではなかろうか。菊地 (2006) の考え方と重なるが、一時的に聞き手の関心を固定するという半主題的伝達機能がラポール型のポライトネスを発揮できるということではないだろうか。さらに次の例を見てみよう

(17) a. わたくしは、魚が大好きでございます。
b. わたし (は) 魚φ大好きでございます。
c. あたし、魚φ大好き。

(藤原 1992:138-139)

(17a)は「ハ」主題と「ガ」格目的語を明示することによって文法関係が明示された文である。(17b)は無助詞と丁寧さのモダリティの両者によって<改まり発話系列>となっている。(17c)は無助詞と「あたし」、「大好き」の複数要因により、<親しみ発話系列>となっている[(5)]。

さらにもう一つ、無助詞使用のための語用論的一般特性として、「現場性」がある。「現場性」については、甲斐(1992:105)および丹羽（2006:298-299)に解説がある。この「現場性」に関連して、藤原(1992:140-142)は、聞き手に対する話し手の「conative（動能的）働きかけ」の存在を指摘している。「質問」、「要求」、「勧誘」、「同意」、「確認」等々の聞き手に対する話し手の「主観的働きかけ」が存在すると無助詞構文の適格性が上がる。逆に、談話の内容が論理的・解説的・思索的なもの、冷静な認識・判断の展開などを主とするものである場合、無助詞はほとんど生じないようである（上例6a参照)。

では、「現場性」、「聞き手への働きかけ」、「会話の相互作用性」がどのように働くかについて、上で取り上げた(6a)、(6b)を材料に考えてみよう。

(18)a.ソシュールは、近代言語学の父と呼ばれている。(=6a)
(18) b.*ソシュールφ、近代言語学の父と呼ばれている。(=6b)
(18)c.ソシュールφ…、（彼は）近代言語学の父と呼ばれてるよ。

(18c)のように、「ソシュールφ」のあとに少し長めのポーズを置いて、そして文尾を「～テル」のように口語化し、さらに「主観的働きかけ」を示すモダリティ要素の「よ」をつけると容認度が明らかに上がる。(18c)の「ソシュールφ」はポーズと可能ないくつかのイントネーションによって(18b)の無助詞よりも「独立要素」としての性格を一層強める。結果的に(18c)の「ソシュールφ」は無助詞の優先的機能である「半主題性」を薄め、福田(2004、2006他)における「個体的枠組」(individual FW)の性格を強めると解釈できる。この場合の「ソシュールφ」は先行発話をオウム返しした「エコー要素」である可能性が高い。この「ソシュールφ」のあとに、「彼は」という明示的主題を補充してもおかしくない。(18c)に関して述べたこの一連の操作を行えば、ほとんどの節頭無助詞構文の容認度が上がることに注目すべきである。

無助詞が半主題性を担うということと、「現場性」や「聞き手への働きかけ」が無助詞使用の条件となることとの間の関係はなお不明な点が多く、さらに研究の余地がある。

6．主題／題述構造論と無助詞の位置づけ

これまでの議論を踏まえ、日本語における無助詞を機能言語学における主題・題述構造(Theme-Rheme Structure)にいかに組みこむべきかについて考えてみる。無助詞の半主題性は次のようなことを示している。つまり、日本語においても「節頭」が主題機能を「高める」位置であることは確かである。節頭と主題の結びつきは次の例によく示されている。普通「デ」格は無助詞になれないが、節頭では無助詞にできる点が興味深い。

(19) a. 太郎が良くこのコート｛*φ / で｝練習してたよ。

b. このコート｛φ / で｝太郎がよく練習してたよ。
(丹羽 2006:291-292)

筆者の「ハ」と「ガ」の機能に関する区別については福田(2004:4 他)を参照されたい。以下に、日本語の主題・題述構造に関する筆者の考えのうち、本稿に直接関連すると思われるものだけを挙げる（福田 2004:5-6 他参照)。

(20) a.〔主題の機能〕:（日本語における）主題はしばしば節頭に具現し、その節がなにについて述べられているかについての視点を確立する。主題は通常（常にではない）不変化詞「ハ」によってマークされる。題述は節の残りの部分、つまり非主題部分であり、題述部分において主題は展開される。

b. Downing (1991) の説を参考にし、「ハ」主題や「ガ」主語に先行するすべての節頭要素を FW と規定する。ただし、FW はハリデーの枠組では主題とされているものである。

c. FW の種類は、「テクスト形成的 FW 」、「対人的 FW」、「状況的 FW」、「個体的 FW」とする。「個体的 FW」とは「は」の付かない裸の名詞句で節頭に来るもの（その場合は、主題に近い。本稿における半主題の無助詞と比較してみよう)、あるいは目的格の「ヲ」格にマークされて文頭に来る要素を言う（この場合はいかにも FW そのものである)。

d. FW および「ハ」主題が、共同して、主題領域 (Thematic Domain) を構成すると考える。一方、「ハ」主題が存在せず、FW の後に「ガ」主語がある場合、FW 単独では主題領域を構成できないとする。この制約は重要である。

以上の点を踏まえた上で「無助詞主題」の位置づけを行えば、以下のようになる。

(21) 無助詞主題を、上述の Framework の中の「個体的 FW」と「ハ」主題のまさに中間的なものと見なし、半主題(Semi-Theme)と位置づける。したがって、無助詞主題は「半主題構文」を構成する。

(20a～d)と(21)に基づいて、日本語の主題・題述構造の構造型全体の中に無助詞を位置づければ次のようになる。「//」のマークは主題領域と題述領域との分岐点を示す。

(22) a. 有題文

○単式主題文(Themeful Clause)

(FW + FW + ...) +Th // Rh

例）昨日、大学で、彼は久しぶりに彼女に出会った。

(FW + FW + ...) +Th // Rh 中の無助詞格

例）先週、家で、僕は　その本φずっと読んでたんだ。

○複式主題文(Complex-Theme Clause)（２番目以降は、漸増的に、より対比主題的になる）

(FW+ FW + …) +Th1 + Th2 + — // Rh

例) 結局、どうしても、僕はその問題だけは解けなかった。

○半主題文(Semi-Theme Clause)

(FW + FW + …) + 無助詞 Semi-Th // Rh

例) あのー、はじめまして、わたしφ、司会の山田と申します。

b. 無題文

○無題文(Themeless Clause) (＝中立記述)

(FW + FW + …) +Rh

例) 夕べ、一時間ほど、雨が降った。

(FW + FW + …) +Rh 中の無助詞格

例) いや、本当に、彼が　その本φ一週間で読んだらしい。

○陰題文 (Implicit-Theme Clause) (＝排他文または総記。言語形式上「ハ」主題が無いため無題文に入れておく。これを有題文に入れる分類法もある。)

(FW + FW + …) + Rh + Implicit Th

例) ええ、しかし、彼がキャプテンです。

7. むすび

第1節では、いわゆる形容詞述語の判断文の節頭においては、無助詞は典型的な半主題要素となることを示した。第2節では、「無標焦点」、「排他焦点」、「対比焦点」の3種類の焦点に関して、無助詞使用の可否を検討したが、その結果無助詞の「脱焦点性」が確認された。そして、脱焦点性が本稿で言う「半主題性」と表裏一体であることを論じた。第3節ではいわゆる中立記述 (＝無題文) における無助詞のふるまいを観察した。その場合当然「ハ」主題は生じ得ないが、無助詞は用いられる。まさに、「ガ」格に付随する「排他性」と「ハ」主題に付随する「対比性・取り立て性」を回避するためには、半主題としての無助詞が有効なのである。第4節では語用論的制約のいくつかを検討した。その中の「現場性」と「聞き手への働きかけ」と「ポライトネス」との関係に特に留意した。ただ、無助詞の半主題性とそのような語用論的要因との関係は複雑であり、さらなる研究が必要である。

また、第4節の終わりに、ほとんどすべての無助詞構文の容認度を上げる操作として、無助詞直後に長目のポーズを置くことを示した。長目のポーズにより、無助詞は「半主題要素」から「独立要素」へと移行し、FW 的性質を一層強めることを示した。

最終節において、無助詞構文を日本語の主題・題述構造の構造型全体の中に位置づけた。筆者は FW を付した上述のような構造型の設定を通して、日本語学で考えられている日本語主題構造論と選択体系機能言語学における英語等の主題構造論との接点および整合性を見いだすことができると考えている。

[本研究は平成 20 年度新潟大学プロジェクト推進経費 (助成研究 B) /平成 20 年度新潟大学人文社会・教育科学系プロジェクト経費 (学系基幹研究)「諸言語の格関係交替現象に関する統語構文論的・機能構文論的研究」(研究代表者：秋　孝道) による研究助成を受け

て実施されたものである。]

【注】

(1) 本稿における主題(Theme)の概念は、Halliday(1994)における「話題的主題」の概念に近いものである。

(2) Halliday(1994)において、節頭が様々な主題機能の具現する位置であるとされている点を、あらためて思い起こす必要がある。

(3) だだし、丹羽(2006)は加藤(2003)の提案する無助詞の脱焦点化機能には反例も多いと指摘している。

(4) (13a)、(14a)がどこか不自然で、(13b)、(14b)における無助詞がより自然であることに関連して、菊地(2006：24)は、「ハ」の対比性と「ガ」の排他性を回避するために、無助詞が使われるのであると述べている。

(5) 「あらたまり」や「したしさ」が直接に無助詞のみから生じるというわけではなく、無助詞以外の要因と複合して効力を発揮すると考えるのが妥当であろう。

参考文献

Downing, A. (1991) "An Alternative Approach to Theme: A Systemic -Functional Perspective". *Word*, 42(2): pp.119-143.

藤原雅憲 (1992)「助詞省略の語用論的分析」田島毓堂・丹羽一彌（編）『日本語論究 3 現代日本語の研究』和泉書院、pp.129-148.

福田一雄 (2004)「機能言語学から見た日本語 —『富士山が見える構文とその周辺— 」『ことばとくらし』Vol.16（新潟県ことばの会）pp.1-11.

Fukuda, K. (2006) *Theme-Rheme Structure: A Functional Approach to English and Japanese.* Niigata University Scholars Series 5, Niigata University.

Halliday, M.A.K (1994) *An Introduction to Functional Grammar. 2nd Edition.* London: Arnold. M. A. K. ハリデー（著）山口 登・筧 壽雄（訳）(2001)『機能文法概説 — ハリデー理論への誘い —』東京：くろしお出版.

甲斐ますみ (1992)「話者が『は』『が』なし文を発するとき」*Kansai Linguistic Society: Proceedings of the Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society, KLS*, Vol.12（関西言語学会[編]）pp.99-109.

加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』東京：ひつじ書房.

菊地康人 (2006) 「主題のハと、いわゆる主題性の無助詞」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎（編）『日本語文法の新地平 2 文論編』くろしお出版、pp.1-26.

久野 暲 (1973)『日本文法研究』大修館書店.

長沼美香子(2007)「日本語における Theme の有標性への視点」*Proceedings of JASFL* Vol.1 (Japan Association of Systemic Functional Linguistics) pp.31-44.

丹羽哲也 (2006)『日本語の題目文』和泉書院.

野田尚史 (1996)『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』くろしお出版.

日本語における経験機能文法の構築
Construction of an Experiential Grammar in Japanese

南里敬三
Keizo Nanri

大分大学国際教育研究センター
Center for International Education and Research, Oita University

Abstract

The present paper attempts to construct a pedagogically viable Japanese ideational (but primarily experiential) grammar by focusing, among other things, on the functions of four case markers or *kakujoshi*, *o*, *ni*, and *to*, and shows a tentative system network of Japanese ideational grammar based on the 'experiential' classification of Japanese clauses by Teramura (1982).

1. はじめに

『An Introduction to Functional Grammar』の経験機能からの節の分類は、構文上英語がどのようなバリエーションを持つのかという鳥瞰図を提示しており、英語学習者にとっては極めて有益なものになっている。これに対し、日本語においては、寺村（1982）や村木（1991）のような経験機能の観点からの節の分類がある。（勿論、両者はシステミック論者ではないので「経験機能」なる用語は用いていない。）特に前者はその筆者の長年の日本語教育の実践に裏打ちされたもので、そこに記述された日本語の経験機能の観点からの節の分類は、日本語学習者に日本語の節の構造とはどのようなものであるかというグローバルなマップを与えてくれる。さらに格助詞に一貫した意味を見出し日本語の節のバリエーションをなるべくコンパクトにまとめようとする文法記述態度はまさに日本語学習者に優しい文法とも言える。

そこで本格的なシステミック理論の日本語への応用であるが、漸く Teruya（2006）が著されたわけである。これはシステミック理論の今後の発展を考える上でも意義深いものである。Teruya（2006）は経験機能にとどまらない。それ以外の論理機能、テクスト生成機能、および、対人関係機能についても日本語の特性をあぶりだそうというまことに精力的な著作となっている。これはシステミック論者として誠に喜ばしいことではある。が、二点不備を指摘したい。

第一点は格助詞の持つ機能に一貫した考察が与えられておらず、その結果同一と思われる格機能がシステムネットワーク上に散在しているという点である。下記の動詞を見てほしい。

(1) とまる、立つ、つまずく、ねる、かがむ、うずくまる、すがる
(2) でる、もどる、移る、おちる、とどく、あつまる
(3) とおる、わたる、よこぎる、とおりぬける
(4) 発つ、さる、ひきあげる、とびだす
(5) いく、くる、上がる、まわる、進む
(6) あるく、はしる、およぐ、すべる

これらの動詞をこのように六種類に分類することも可能だがまずは二種類に分けるということも考えられる。つまり下記のように分類するのである。

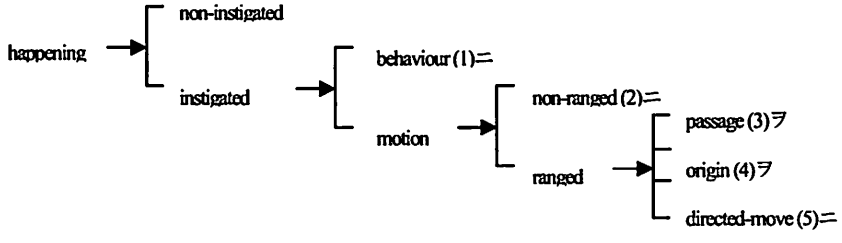
(A) とまる、立つ、つまずく、ねる、かがむ、うずくまる、すがる（以上［1］）、でる、もどる、移る、おちる、とどく、あつまる（以上［2］）、いく、くる、上がる、まわる、進む（以上［5］）
(B) とおる、わたる、よこぎる、とおりぬける（以上［3］）、発つ、さる、ひきあげる、とびだす（以上［4］）、あるく、はしる、およぐ、すべる（以上［6］）

この分類の根拠は（A）の動詞が「ニ」を取ることができるのに対して、（B）の動詞は「ヲ」を取ることができることによる。

格助詞句が一貫した機能を具現するとするなら、先の六種類の分類より、上記の二種類の分類の方が論理的妥当性を有しているように思える。（また、そのように分類する方が「ニ」と「ヲ」のコアな意味の特定が可能になり、効果的な日本語習得の助けとなることは間違いない。）

上記の動詞はTeruya（2006:314）から取ったもので、Teruya（2006）は図1のように分類を行っている。この分類をまずヲ格の取り扱いという観点から見てみる。図1中の最もデリカシーの高いシステム（入力条件が「ranged」のシステム）を見ると、三つのヲ格の機能（通過点、出発地点、マナー付きの行動が起こる場所）が認識されており、これらヲ格の機能が、ニ格が具現する（directed moveの行き先としての）目的地の機能と一緒になってrangedシステムを構成している。ヲ格とニ格が混在しているのである。そして、ニ格の目的地の機能以外に、non-rangeの行動範囲としての、さらに、behaviourが起こる場所としての機能もあり、ニ格の機能がデリカシーの異なる三つの次元に散在するといった格好になっている。また、ヲ格の機能の一貫した意味解釈も、rangedシステムにおけるニ格の介入で、行われていない[1]。

図 1. Teruya (2006:291) による動詞の分類[2]



二点目として、参与者資格を有する格のパラディグマティックな関係への配慮の欠如が挙げられる。Teruya (2006:291) に提示されている物質節の一般的システムネットワークでは「ヲ」を取る節のみが取り上げられているが、下記のような節はこのシステムネットワークからは割愛されている。

[1]　先生に従う
[2]　彼女と結婚する

これは英語を母語とする話者に限ってのことかもしれないが、上記例文中の「ニ」と「ト」の位置に「ヲ」を使用するケースが日本語学習者には見られる。上記例文における動詞と参与者（相当語句）のと意味関係を英語における動詞と対象（Goal）のそれと同じとみなしての誤りだと思われる。

これが示唆するとことは重要である。なぜならば、上記例文におけるニ格及びト格がヲ格と意味的に近接していると考えられるからである。つまり、対象の「ヲ」は上記例文の「ニ」や「ト」とパラディグマティックな関係に立っているとみなせるのである。（これは後述の通り寺村［1982］が指摘するところである。）ならば、そのようなパラディグマティックな関係を反映したシステムの立て方が推奨されるべきであるが、Teruya (2006) ではそうはなっているようには見えない。

格機能のシステムネットワーク上の不必要な分散を避け、ヲ格、ニ格、および、ト格で具現される参与者（相当語句）に的を絞り、日本語教育に使いやすい経験機能の観点からのシステムネットワークの構築の枠組みを作る。それが本稿の目的である。

2.　論理的枠組み・手順

本稿はChristian Matthiessen (1995:201-205) の意味の四極構造仮説、すなわち、英語の節はmaterial、mental、verbal、relationalの四つに分類できるという仮説を採用し、原則的にその仮説の枠内で寺村 (1982) の節の分類を当てはめるという形をとる。以下、ヲ格、ニ格、ト格の基本的機能を定義し、物質節、言動節、心理節、関係節の順にシステムの構築を試みることにする。但し関係節については Identifying 節と Attributive 節の認定方法のみに言及する。

3．節の分類

格助詞の機能

本稿ではヲ格、二格、ト格の基本的意味を下記のように想定する。

（1）　ヲ格の機能は主格の交渉性のある働きかけが向けられた対象（Goal）の提示である[3]。対象には生産（Creative）と取扱（Dispositive）がある。「生産」とは、文字面通り、生み出されたものをいい、「取扱」とは主格（あるいは主語）から「doing-to」の働きかけを受けているものをいう。ヲ格による交渉性を有する対象

の提示は物質節において顕著であるが、物質節以外の節にあってもヲ格は交渉性を保持している。言動節中にあっては、ヲ格は主格の言語行動が向けられた現象（Phenomenon、但し、本稿では対象［Goal］の下位区分と見なす）か、主格の言語活動が「生産」したもの、つまり言内容（Verbiage、同じく対象の下位区分とする）を具現し、心理節にあっては、主格の心理作用が「取扱」う現象か、主格の心理作用が「生産」するもの（本稿では「心象」と呼ぶ）を具現する。ただし、関係節にあっては、ヲ格は主格による意味「生産」の結果生み出されるものを具現するが、「取扱」の対象は具現しない[4]。

（2） ニ格は非交渉的（または一方向的）な性格を有し[5]、主格もしくはヲ格の移動ないし位置に関わる情報、具体的には、終点、始点、存在地点（これを本稿では「在地」と呼ぶ）の三つの機能を具現することができる。このうちどの機能を具現するかはそれと共起する動詞の性質によって決定される。

（3） ト格には二種類ある[6]。ひとつは主格と「相互」行動を起こす「片方」（寺村［1982:97-98］の用語）の機能を具現するもの。もう一つは「等価」関係を具現するト格である。等価とは記号論的言い換えをいい、システミック文法の投射を包含する概念である。

それでは物質節から順次検討していこう。

物質節

寺村（1982:87-138）の「動的事象の描写」がほぼ（システミックの）物質節に相当する。この描写は「二者の関係の表現」と「移動・変化の表現」に分類されている。代表例をいくつか寺村から引用すると。

[3] 何者かが社長を誘拐した。
[4] 犬が私にかみついた。
[5] 犬が猿と喧嘩する。
[6] 部屋を出る。
[7] 利根川を渡る。
[8] 部屋に入る。

初めの三つが「二者の関係の表現」の例であり、あとの三つは「移動・変化の表現」の例である。本稿では前者を「行動」、後者を「移動」ととらえなおし、この二者（および、後述する「非連関節」）が日本語の物質節を構成していると考えたい。但し、「移動」の中には物質節とはとらえ難いものがあり、それらは主に関係節とみなすことにしたい。先に移動節を見ていく。

物質節：行動

移動節には終点型と接触型とがある。終点型の節は目的地に向かいそこに到達することに焦点が当てられており、目的地を具現するのにニ格が用いられる。寺村の「境

遇性が介入する」移動型動詞、ならびに、「入る、着く、泊まる」類の動詞がこの移動節に相当するが、それに加えて出現型の動詞、並びに、Teruya の behaviour、non-ranged の一部もこの仲間に加えたい。例を出そう。

[9]　学校に行く。
[10]　学校に向かう。
[11]　学校に突き当たる
[12]　学校に入る。
[13]　学校に着く。
[14]　布団にうずくまる。
[15]　椅子に座る。
[16]　大分に現れる。
[17]　大分に住む。

移動節はある場所に対する関わり方を描写する節と言い換えることができる。（寺村［1982:119-121］のまとめ参照のこと。）移動節はその場所に向かい、その表面にぶつかり、中に入り、そこで停止し、あるいは、そこに出現するまでを守備範囲とする節で、目的地の後には「ニ」が接続される。移動のターゲットとなっている場所は「終点」として認識されている。

上記以外の移動節はすべて主格とターゲットとなっている場所への関係が doing-to の関係になっていることを示す節となる。そこでは、ターゲットの場所が（終点型節のように）移動の目的地として認識されているのではなく、（例えば踏みしめるといったような行為、つまり）「取扱」の対象として認識されており、それが故にヲ格が用いられていると仮説を立てることができる。寺村（1982:106-112）の「出る動き」（下記例文［19］）と「通る動き」（同［20］）はここに入る。筆者はこれに散策の動き（同［18］）も入れたいと思う。例を出そう。

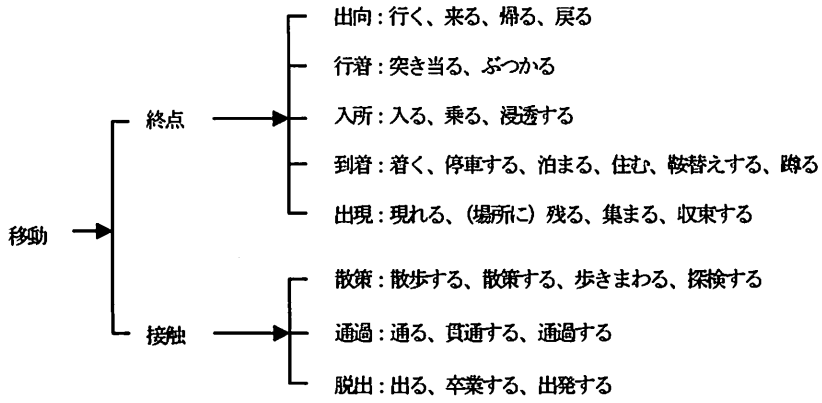
[18]　公園を散歩する。
[19]　店を出る。
[20]　新幹線は小田原を通る。

図2のシステムに移動節をまとめておく。

行動節

行動節の例としては、「人を殺す」、「物を壊す」、「山を見る」、「人を愛する」、「歌を作る」などがある（寺村 1982:88）。行動節には（寺村に従うなら）心理節の一部（例えば「人を愛する」）も入ることになるが、四極構造仮説に従い、これら心理節は行動節に入れないものとする。

図 2.システム：物質節：移動



先に少し触れたが、寺村は、ヲ格行動節を紹介した後これと意味的に近接関係にある節として下記のような節を挙げている（寺村 1982:93、95）。

[21] 犬が私にかみついた。
[22] 犬が猿と喧嘩する。

寺村（1982:100）は［21］では主格からニ格へ「強い働きかけ」があると説明し、[22]では主格とト格の間に相互作用があるとしている（寺村 1982:95-99）。相互作用の行動とは、動詞が表す行動が主格とト格の二参与者の間で成り立つ行動のことで、主格から見ても、ト格からみても同じ行動として説明ができる行動を指す。例えば「犬が猿と喧嘩する」という出来事では、「犬」から見ても喧嘩であり、「猿」から見ても喧嘩である。こういった行動が相互作用の行動である。

さて、二格とト格の機能説明は上記で概観できるとして、ヲ格自体はどういった働きかけを具現するのだろうか。寺村はヲ格の特性自体の説明は詳しく行っていない。そこで森田（1988）のヲ格とニ格の比較を引用してみたい。下記三例は森田（1988:281-282）からとったものである（下線強調は南里）。

[23] 指先を<u>そこに</u>触れる。
[24] <u>右手に</u>触り、
[25] <u>唇を</u>触れる。

まず森田が指摘するのは接触性の深度の違いである。「～ニ触れる」（[23]）「～ニ触る」（[24]）はそこに接触するまでが目的であり行為に強い意志性が感じられない。しかし、「～ヲ触れる」（[25]）となると単に触れるだけの行為ではなく「摩擦行為」となるとの解釈を披露している。

森田の示唆的な解釈はさらに続く。上記の三例は実はある小説の中で尼僧が地蔵を触れるシーンで用いられたもので、そこでは、ニ格からヲ格へのシステマティックな

シフトがあると森田は指摘し、こう述べている（森田 1988:281）。

> 初めのうちは、ただほんの「指先をそこ［地蔵の膝—南里注］に触れる」のみであったが、やがて「右手にさわり」つぎに「頬をなで」最後には「五体をさする」ところまでエスカレートする様が実に面白く描かれているが、右の例からも「触れる→さわる→なでる→さする」への意味の段階的発展が伺われる。そして、いずれも主人公の尼僧が生なき地蔵に対して肉体的接触を求めていく意思的な行為としてこれらの動詞がうまく使い分けられているのである。

地蔵を尼僧が触り始めた時、地蔵の膝に触れるのみで他を触れようとする意思はなかったのだが（ここでニ格の出現）、気持ちが高揚し地蔵の体のほかの部分も触り始め、手の位置を次から次へと変え始めた時ヲ格が出現しているというのである。つまり、ヲ格で指摘された所を起点として更に別のヲ格で提示された所へと移って行く場合にヲ格が出現しているというのである。

森田の主張をまとめるとこうなる。ヲ格の機能は対象の提示だが、その対象は主格による接触行為が行われるだけの目的地点の提示ではなく、主格による摩擦行為を伴う接触深度の深い行為が向けられた対象の提示であり、その摩擦行為の対象を起点として次なる摩擦行為への移行を示唆する対象の提示でもある。（よって、現在選ばれた対象以外にも候補の対象はまだあるということが含意される。）このようなヲ格の深度の深い接触性、ならびに、さらなる対象を求めての移動性を本稿では「交渉性」と呼ぶことにする。

さて、このヲ格の持つ交渉性は、ニ格行動節と比較するとよくわかる。ニ格行動節には交渉性が欠如しているのである。下記の例文を見られたい。

[26] 彼の意見に反対する。
[27] 先生の意見に従う。
[28] 戦争に負ける。
[29] 紐に躓く。
[30] 病気に感染する。

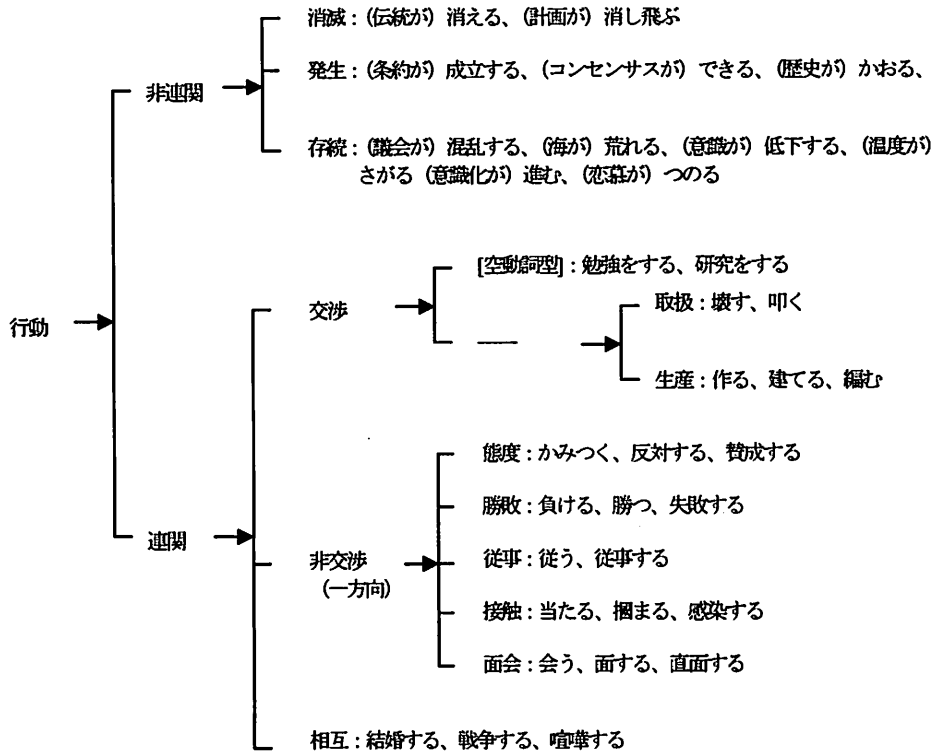
先に寺村の「強い働きかけ」の解釈を紹介したが、この強い働きかけは言いかえれば交渉性のなさを意味する。たとえば例文［29］の「反対する」。「反対する」という行為は既に何かの決定を下した後に行われる行為である。その際ニ格で表された参与者は既に決まった事柄が向かう相手として提示されており、主格との間に交渉の余地はないことを示していると解釈ができる。「従う」においても同様の非交渉性が主格とニ格の間に見出せる。また、［29］［30］は主格が何らかの影響を受けた行為を動詞が表しており、ここにも主格とニ格との間に交渉性はないと解される。（この場合、ニ格は主格が受けた影響の発生源すなわち始点を具現していると考えられる。）

行動節のまとめの前に一点補足説明をする。行動節には二者（あるいはそれ以上）間の関係と主格一者だけの行為も当然ある。よって行動節を入力条件とするシステム

で最もデリカシーが低い所に「連関」と「非連関」のシステムを立てることを提案する。非連関とは主格がそれ以外の参与者（あるいはそれに準ずるもの）との関係を具現しない節を意味するものとする。なお、非連関節とはモノの発生、存続、消滅に関する節のこと。

これまでのまとめを図3にシステムとしてまとめておく。また、図3中の「空動詞型」は暫定的カテゴリーであることを付け加えておく。

図3.システム：物質節：行動



言動節

言動節システムで最もデリカシーの低いレベルにおいては、行動節と同様にヲ格（交渉型）、ニ格（終点型）、並びに、ト格（相互型）を認めたい。例を出そう。

[31] 相手を論駁する。
[32] 交響曲を作曲する
[33] 問題に言及する。
[34] 友だちと口論する。

[31]、[32] は交渉型節。うち前者は取扱型言動節で、ヲ格は「対象：取扱」を具現していると考えられ、後者は生産型言動節でヲ格は「対象：生産：言内容（Verbiage）」

を具現していると考えられる。[33] は非交渉型節で、話がある問題や話題に向かいそこに到達したことを具現する節である。終点型言動節とも言える。[34] は物質節でみた相互型節と同様で主格とト格の間で行われる相互的言動が記述されている。

これとは別に重要な特徴が言動節にはある。投射（projection）である。Teruya (2006:339) から引用する。

[35]　「そうしてくれ」と母がたのんだ。

このようなト格節が日本語における被投射の例であるとも考えられるが、英語の投射との間には違いが二点ある。まず、下記の例文を見られたい。

[36]　「彼は天才だ」と言った。
[37]　彼を天才だと言った。

第一点目は、「投射」が節の中に組み込まれることがあるという点である。[37] がその例である。英語で言えば「regard someone as…」に近い構造をとっていると考えられる。

第二点目は一見投射と見えるト格節の性質である。英語の投射よりも守備範囲がかなり広く、等価機能と呼ぶに相応しい機能を具現しているように見えるのだが、まず、挙げておきたいト格節の性質は、この節が言動節（ならびに心理節）以外の節とも共起できることである。例えば、

[38]　「おいしい、おいしい」と食べていた。
[39]　「開けてくれ」とドアをノックした。
[40]　「やっと結婚できます」と、表情は明るい。

これらの例を見ていると、いわゆる本来的な投射とは違って、ト格節が文末節に対して具体性を付与していることが指摘できる。例えば [38] では「食べていた」その食べ方が「おいしい、おいしい」という食べ方であったこと、[39] ではドアをノックした行動が「開けてくれ」と切迫感のある状況であったこと。さらに [40] では文末で示された判断に対して（つまり、「表情の明るさ」）その判断の根拠となる発言（つまり具体性）をト格節が与えている。下記の例はもはや本来的投射とはや呼べないのではないだろうか。

[41]　我先にと逃げて行った。
[42]　中華、イタリアン、フレンチと食べまくった。

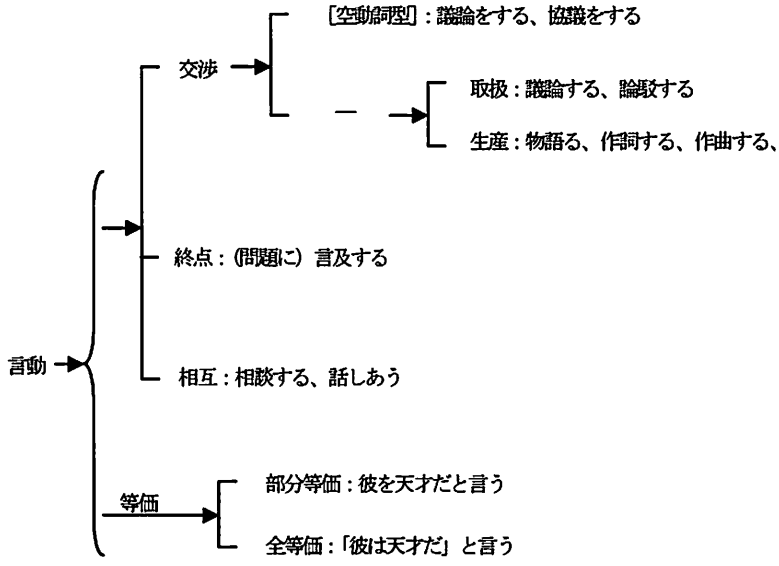
これら一見投射に見えるト格節は、記号論的に考えれば、文末節に対して具象性の高い等価情報を提供していると考えられる。そして、恐らくはこの延長線上に擬態語、擬音語が用いられている節が来るのだろうと思われる。例えば、

[43] ザーザーと雨が降る。
[44] せっせと仕事をする。

[43] では「雨が降る」という現象にト格節が「ザーザー」降りであるという具体性を付与している。[44] では「仕事をする」という出来事に「せっせ」という具体性を付与していると考えられる。

さて、これら等価節をどうあつかうかだが、統計的に考えてこのようなト格節が言動節（ならびに心理節）とより共起しやすいだろうことは想像に難くない。よって本稿では、飽くまでも暫定的処置として、これらト格節を言動節（ならびに心理節）との関係でまとめておくことにする。図4のシステムを参照されたい。

図4：システム：言動節



心理節

心理節も最もデリカシーの低い部分に、交渉（ヲ格）、非交渉（ニ格）、相互（ヲ格）を認めたい。ヲ格は思考的取扱いの対象としての現象（Phenomenon、例文 [45]）、知覚・感覚が取扱う対象としての現象（[46]）、または、心理的「生産」物（あるいは「心象」、[47]）を具現する。

[45] 予算を吟味する。
[46] 雨の音を聞いていた。
[47] 情景を想像する。

ニ格は、主格の注意の行きつく先（終点、[48]）、主格が心理的に引っ張られ到達

する場所（心の最終的ありかとしての終点、[49]）、主格の心の動きを引き起こすもののありかとしての始点（[50]）を具現する。

[48]　ガス漏れに気づく。
[49]　あの女性に惹かれる。
[50]　雷に驚く。

上記の例においては主格とニ格の間の関係は一方的で交渉の余地がないものとなっている。これは行動節でみたとおりである。

さらに、心理節においても相互型がある。が、心理的に他者と相互関係を結ぶという意味合いになるので超自然現象的節しか可能性がないように思われる。下記に例を出す。

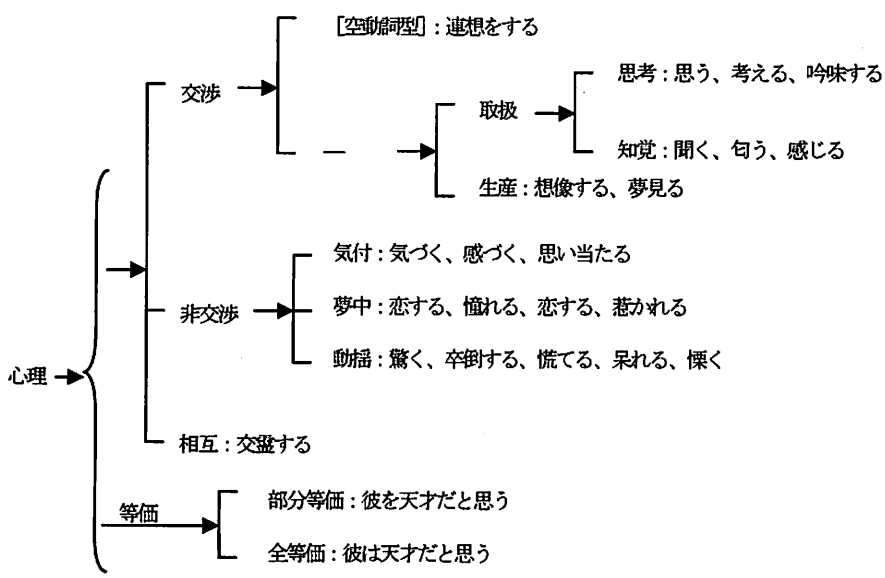
[51]　天使と交霊する。

下記は等価の例である。部分等価と全等価の例をそれぞれ出しておく。

[52]　自分を善人と見なす。
[53]　自分は善人だと思う。

心理節のまとめを図5にしておく。

図5：システム：心理節



関係節

ここでは、日本語にける属性節と同定節の認定方法についてのみ言及する。下記の例文を見ていただきたい。

[54] Mr. Potter is a wizard.
[55] Mr. Potter is the wizard.

現在のIFGのフレームワークでは[54]は属性節であり、[55]は同定節となる。問題はこれらの日本語に相当する節を分析するときにおこる。日本語での相当節は下記のようになるだろう。

[56] ポッター氏は魔法使いだ。
[57] ポッター氏が魔法使いだ。

定冠詞のない日本語においては「a wizard」も「the wizard」も同じ「魔法使い」という名詞（群）で具現される。つまり、属性節と同定節の境目が、IFGの枠組みを使う限り、名詞というカテゴリーのどこかにある、ということになるのである。どうして形容詞と名詞の間に境を設けないのだろうか。

この素朴な疑問を出発点に日本語における属性節と同定節の認定を行ってみたい。

英語の属性節に対応する日本語の節としては、寺村（1982第1章4節）の「性状規定」の節がある。例を同4節から出すと、

[58] 父は子供に厳しかった。
[59] 地球は月より大きい。

性状規定の節は典型的に「名詞ハ/ガ形容詞」の形をとっており、英語との形式的対応関係がみられる。性状規定の節は属性節と言い換えてもいいようだ。（また、寺村[1982:145-152]の「感情の直接的表出」と「感情的品定めの表現」も「名詞ハ/ガ形容詞」の形をとっており、属性節に含めることが可能である。）

そこで同定節であるが、英語での例をHalliday & Matthiessen（2004:227）から出すと、

[60] The deadliest spiders in Australia are the funnelwebs.

ある特定の参与者の正体明かしを行うのがこの節の目的で、典型的に「Noun is Noun」の形を取る。正体明かしの節を寺村も認定していて「判断借定」と命名しているが（寺村[1982第1章5節]）、寺村の判断借定節は「XはYだ・です・である・であります・でございます」と規定されるのみでその守備範囲は関係節をはるかに超えるものとなっている。

それで、Teruyaを参照すると、同定節の例として下記のような例文が挙げられてい

る（Teruya [2006:264、265]）。

[61] 原子核を構成する陽子の数を　原子番号と　いう。
Value　　Token

[62] わたしは　　かずこ　　です。
Token /Carrier　Value/Attribute

ここでまず言えることは「名詞ハ/ガ名詞ダ」の形を同定節として日本語でも認定している点である。しかし、属性節と同定節との境目の議論となると歯切れが悪い。Teruya は、基本的に「名詞ハ/ガ名詞ダ」の形を同定節としながらも（つまり、属性節と同定節の境目が名詞と形容詞、あるいは名詞以外、の間にあるとしながらも）、上記二例で明らかなように、同定節は時として属性節の機能も具現すると考え、名詞のカテゴリーの中にも境界線があると認めているのである。属性節と同定節の境目は二段構えになっているのである。

議論を明確にするために、同定節と属性節の境目を Value または Attribute の品詞だけで考えてみる。私見だが、Value と Attribute の差は抽象度の差でありそれ以外に質的差はないように思われる。

そもそも関係節は二つのエンティティーをつなぐのが目的であり、つないだ先と主格との間に大きな抽象度の差があったとき属性節になり、抽象度が接近している場合に同定節になっている。属性節にしても同定節にしても主格ともう一つのエンティティーとの間には抽象度に差があり、全く同じ抽象度のものは同語反復（による強調）か、同一性の発見か、でなければ極めて抽象的かつ曖昧な節になり日常ではあまり用いられないのではないように思われる（下記例文を参照）。

[63] 敬三は敬三だ。
[64] 実は、私の叔母は彼女の母親だった。
[65] 戦争は平和だ。

もし属性節と同定節の違いが Value ならびに Attribute の主格に対する抽象度の差であるにすぎないのなら、少なくとも日本語の節についていえば、名詞節と形容詞節との間に同定節と属性節の境目を持ってきてもよいだろう。なぜなら、（1）形容詞と名詞とでは活用等で異なった形をもっている、（2）一般的に言って形容詞のほうが名詞より抽象度が高い、（3）異なる形は異なる機能を具現する場合が多いと考えるのは妥当だからである。

4. まとめ

本稿では、ヲ格、ニ格、および、ト格で具現される参与者（相当語句）に的を絞り、日本語教育に使いやすい経験機能の観点からのシステムネットワークの構築の枠組

みの構築を試みた。が、為残しの仕事は山積みである。例えば、本稿で扱えなかった格助詞をどう扱うかはなかなかに複雑な問題をはらんでいる。なぜならば（英語における）システミック文法では状況語と参与者の境が明確で、その明確な参与者認定に基づいて節の分類が行われているからである。日本語の場合、その境が明確ではない。（ニ格の性質を思い出していただきたい。）それに加えて、同伴の「ト」、行為・状態の及ぶ範囲を限定する「デ」、起点を具現する「カラ」なども参与者資格を有していると思える場合が多々ある。そうなればTeruya（2006）のように参与者と状況要素のシステムを判然と分けると言うわけにはいかなくなる。これにどう対処したらいいのか、今のところ解決策は見当たらない。

試行錯誤のシステム構築が当分続くのだろう。

注

1. 但し、Teruyaのシステムネットワークは節の構造を解明したものというよりは過程構成中核部（以下「過程」）自体の種類を分類したものという性格が強いということは指摘しておくべきだろう。これに対し本稿では節の構造の分類を格助詞との共起関係を基にしてシステムネットワークの構築を試みる。
2. これはTeruya (2006:291)のシステムネットワークの一部を取り出し簡略化したものである。
3. 寺村（1982:89）は「ヲ」格の機能を「人やものが、他のものに対して関係をもつ動作、作用、できごとのうち、『働きかけ』を表わすものは、「客体」を表わす補語を要し、その補語は『～ヲ』という形をとる」としている。
4. 本稿においてはIFGで認識されているGoalとRangeの区別をヲ格助詞には行わない。つまり、物質節以外にも（英語のGoalに相当する）「対象」が存在するとの仮説に基づきシステムの構築を行う。
5. ここでは時間的場所を表わす「ニ」の機能は含めない。（例：十時に出発します。）この「ニ」は状況語の機能を担っており、参与者機能ではない。
6. 同伴の「ト」は状況語の機能であるとみなし論じない。

参考文献

村木新次郎. (1991). 『日本語動詞の諸相』. 東京：ひつじ書房.

Matthiessen, C. (1995) *Lexicogrammatical cartography: English systems*. Tokyo: International Language Sciences Publishers.

Matthiessen,C. & M.A.M.Halliday. (2004). *An introduction to functional grammar*. 3rd edition. London: Hodder Arnold.

森田良行. (1988). 『日本語の類意表現』. 東京：創拓社.

寺村秀雄. (1982). 『日本語のシンタクスと意味』. 東京：くろしお出版.

Teruya, K. (2006). *A systemic functional grammar of Japanese*. Vol.2. New York: Continuum.

日本における SFL の英語教育への応用：
5文型と be 動詞を中心として[i]

On Application of SFL to English Education in Japan:
Focusing on the Five Sentence Patterns and 'Be'

佐々木真
Makoto Sasaki
愛知学院大学
Aichi Gakuin University

Abstract

This paper aims to propose an approach to apply SFL notions into English education in Japanese contexts. The application of SFL has been a central theme in the theroretical domain with consecutive contributions by various pioneers (Halliday et al. 1964; Halliday and Martin 1993; Christie 1984; Christie and Martin 1997; Foley 2004, Derewianka 1990, 1998). An enormous volume of pedagogical insights are mainly drawn from the English speaking regions, however, educational assets of the insights cannot be directly implemented onto the Japanese context where English is not substantially used as the first or the second language to fulfill requirements for social life. Application of SFL into Japanese educational settings has been recently spotlighted (Tatsuki 2006; Hayakawa 2007; Sasaki 2001, 2006, 2008). This research, following this trend, focuses on the Japanese social contexts where English education is involved, to propose how SFL should be adopted in English classes in the country.

The current paper converges on a standard grammatical notion in English teaching in the country, i.e., the five English sentence patterns, with a proposal for a comprehensive explanation of "be", which many Japanese students have difficulties in acquisition. The sentence patterns can be explained, without technical terms, in the framework of "transitivity" as well as semantic domains that a particular sentence pattern conveys. The verb "be" should be provided as the main resource of existence and the existential details would be found in other participants such as nouns and adjectives. In consequence, it will be proposed that a set of "be" and adjective/noun should be dealt with as a unit to express a concrete semantic entity

Finally the paper refers to the significance of amalgamating SFL concepts with notions conventionally adopted in the local contexts while advocating description of English language exclusively appropriate for pedagogical requirement.

1. はじめに

本稿ではSFLの観念構成的機能を枠組みとし、日本の英語教育に根強い５文型（節型）とその関連項目を中心として英語の基礎的教育の方策を提言する。本論では大学の教養課程の英語授業を念頭に置きながら、文型（節型）によって過程中核部と他の意味参与の関係を明示する平易な用語を列挙し、同時に英語の統語的な組成（動詞の他動性など）を説明する方策を提示しながら語彙文法の基本的構造と意味の基本的機能の理解促進にSFLで言及される概念の中で何が適用できるのかを明示する。

また文型に関連して、SVC で使用される be 動詞には潜在的に時制を担う助動詞的機能と述語としての連辞機能があり、節構成の統語レベルではその二つの機能が融合して具現化されると考えられる。したがって、本稿ではSVCにおいて叙法部の定性をになうものと、残余部の述語を担うものに独立させ、後者については「be＋ 形容詞」「be＋ 名詞」という叙述機能の単位を提案する。

2. 日本の英語教育の背景

伊藤(2005)は第二次大戦後の日本の英語教育史を振り返り、影響を受けてきた言語理論の変遷を述べている。それによれば70年代以降、英語教育は心理言語学、神経言語学、語用論や社会言語学などの影響を受け、特に認知科学や脳科学といった心理学的側面の影響が顕著である。一例として筆者が所属する「日本大学英語教育学会 (JACET)」の研究紀要 (2002年-2007年)の中に収録されている論文（全81本）を分類しその数を調べたところ、心理的分析33本（41%）、構造的分析17本(21%)、機能的分析15本(19%)、方法論14本(17%)、その他2本(2%)であった。

Halliday (1978)が"intra-organism"と"inter-organism"という概念で心理的側面と言語の観念的機能、社会的側面と対人関係的機能をそれぞれ結びつけながら社会的側面の重要性を強調している。日本の英語教育では個人内での言語構造構成力の習得という心理的側面に主眼が置かれ、個人間での言語機能使用力という社会的側面の涵養が弱い。近年はその弱点に起因する批判が寄せられているが（田中2007)、社会における言語機能を核とするSFL理論はこの点において日本の英語教育に多大なる貢献がなせるのではないかと思われる。

3. 先行研究

SFL 理論の教育への応用についてはHalliday (1978: 5)が「究極的な関心事項」と述べているように、その理論発達過程において中心的な課題の一つとして多数の研究がなされている。Halliday et al.(1964)は教育対象だけでなく、教育ツールとしての言語機能にも焦点をあてている。Christie and Martin (1997)はジャンルとその教育への応用を行い、Halliday and Martin (1993)とMartin and Veel (1998)は特に科学分野でのリテラシーの教育に言及している。Cope and Kalantzis (1993)は実際の作文指導における SFL の導入例を提案し、Derewianka (1990, 1998)と Williams (1994)は平易な用語による SFL の授業への応用例を示している。But et al. (2000)は SFL 理論の各概念とその教育への応用性について記述している。Ventola

(1989) は欧州での英語教育への応用例を挙げ、 Foley and Lee (2004)はアジアにおける英語教育への可能性を示している。

しかしこれらの知見はそれぞれの教育環境における適切化を伴うものであり、直接日本の教育事情に当てはめることはできない。非英語母国語圏における知見でも英語の使用環境、英語教育環境が異なるため、日本の教育現状に最適化されたものに変更・修正する必要がある。

日本においては村田 (伊藤 et al. 1982)が SFL の教育応用研究について言及しているが、実際の教示に応用可能な形で提示されるようになったのは最近のことである。龍城 (2006) は具体的にテクストから語彙文法までの関連を明示しながら実際の教育方法を例証している。佐々木 (2001, 2006) は英作文指導における観念構成的分析の応用、講読指導における文法的比喩について論じ、早川 (2007) は教科書におけるジャンル構造の分析を行っている。Sasaki (2008)はジャンルとから語彙文法までを３つの Phase に分類し、それぞれの Phase がどのように教示できるかを論じているが、本論はこのうち節構成と語彙選択を扱う Phase 3 に関連する。

4．英語５文型

語彙文法の核となる節について、従来の日本の英語教育ではいわゆる５文型[iii]を基盤の一つとしている。構造的な５文型は動詞の他動性を中心とした分類であり、外国語として英語を学習する際には一つの指標としてその価値は評価できると考えられ、大学の教養課程で使用される教科書にも導入単元等で下記のように動詞の種類と文型が説明されている。

(1) 完全自動詞→補語も目的語もとらない動詞（例、live, run, swim, etc.）
(2) 不完全自動詞→補語のみをとる動詞（例、live, run, swim, etc.）
(3) 完全他動詞→目的語のみをとる動詞（例、want, like, believe, etc.）
(4) 不完全他動詞→目的語と補語の両方をとる動詞（例、make, let, feel, etc.）

(1)	S+V [Sは（が）Vする]	→	完全自動詞
(2)	S+V+C [SはCである（になる）]	→	不完全自動詞
(3)	S+V+O [SはOをVする]	→	完全他動詞
(4)	S+V+O+O [SはO（人に）O（物）をVする]	→	完全他動詞
(5)	S+V+O+C [SはOをCとVする]	→	不完全他動詞

（南雲堂『新しくはじめる大学英語演習』より抜粋）

文型や動詞の他動性についての説明は中学・高校の教科書でも取り上げられ、また学生も繰り返し学習してきた事項であるにも関わらず、現実的には自動・他動の区別や補語の機能や意味、さらに文型そのものに対する認識や理解も乏しい。特に昨今の少子化、大学進学率の向上、英語カリキュラムの変化によって大学生でもこれらの基礎的な文型理解が欠落しているものが少なくない。そこで５文型という既存の概念に、SFLの過程構成の概念を当てはめて、文型という形式とそれが伝達する意味について学生の理解が促進されるように試みた。

5．過程型と５文型の関連性

英語の過程型においてその中心となるのは、物質過程、関係過程、心理過程で、それらの間を埋めるようにしながら行動過程、言動過程、存在過程があり(Halliday and Matthiessen 2004)、"a means of reflection" (Hallliday 1985)としての機能に関与するため観念構成的機能の範疇で扱われる。５文型とは元来この機能の中の中心となる動詞の他動性に起因し、過程構成における参与要素間の意味関係を分類した鋳型という点において過程型と重なる。しかしながら、過程型が他動性の中にある意味範疇を６極に細分化して分類する一方、５文型では意味を自動・他動という２極のみを前提としている。Halliday (1964)は従来分類を精緻化するために"scale of delicacy"を設定し、節の多機能性を記述する方向を提示している。したがって、これまでのSFLの研究蓄積を５文型に関連させることはこれに逆行するように思えるが、日本の英語教育現場では一般的に５文型が提示されるという現実を鑑みれば言語機能とそれを表現する形式の関連性を教示することは対立というより、むしろ補完し合うものと言えよう。したがって、特定の意味内容はどのような文型によって表現されるかを明示することで、この構造的な分類項目は学習者に有機的な意味を持つことになる。

そこでこれらの融合を明示するために筆者は担当する英語の授業において図１のような関係図を提示している。この図ではまず言語表現は「行動・行為」を表すものと、「様子・状態」を表すものに大別され、動作の示す性質（他動性）の軸に対してそれらが両極にあることが表示される。

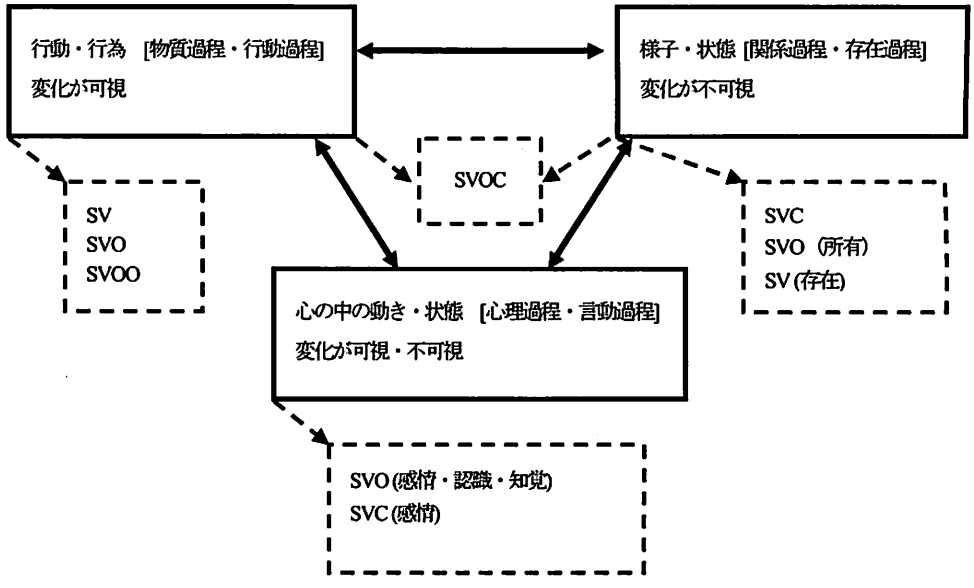


図１：過程型と文型の関連

実線の矢印は相互に関連性があり分断された関係ではなく同じ基軸上の程度の問題であることを示している。また図には他動性を明示する方策として「変化が可視・不可視」という表

現を用いている。図１では[ ]内に過程型をそれぞれ表記してあるが、これは本論で便宜上記載するものであり、実際に提示する図には学生への混乱を避けるために表示しない。

物質過程と関係過程の間にあるものとして、「心の中の動き・状態」（心理過程）があることが示される。これは内面的な心の動きという意味で、物質過程のような「動き」があるが、外見からその変化が不可視であることから関係過程のように静的なものとして捉えることができると説明する。また心の内面を実際に表現すれば「話すこと」（言動過程）になり、その変化性が可視であることから行為（物質過程）に近いとも言える。

これらの過程型の示す意味的属性を上記のように平易な表現で説明し、さらに既存の文型を破線の四角内で表示し、それぞれの意味内容がどの文型によって表現（具現化）されるかを示す。すなわち*Mary walked in the park*のようなSV, *John kicked the ball*のようなSVOは行動過程の初期値として用いられ、*the ball*のようにOは行為を受ける「対象」の意味を学生に示す。また同時にこのSVOではOがなくては行為が成立しないこと、Oからその行為を見れば受動になりそれが受動態として表現されることも説明可能になる。

関係過程においてはある事項・事物の様子を表現し、その意味内容は、たとえば*Beth is a singer*のようにCに名詞が用いられる場合には役割、*Steve is kind*のような形容詞であれば状態を表すと説明できる。また関係過程においても*Ellen has a computer*のようにSVOがとれるが、これは主に動詞として'have'などの所有を示すものが使われる。また*Thomas thought that he was stupid*のように心理過程の際に使用されるSVOであれば動詞群に'think', 'want'というものが現れ、心の中の継続的な状態を示すので既定値として進行形をとらないという説明ができる。またOには心の中で考えた出来事、すなわち投射が表現され、他の過程型とは異なることも説明できる。

SVCでは関係過程と心理過程ではCに現れるものに違いがあり*I'm happy* [iii]の*happy*のような心の中の状態を表現するものが心理過程で使われると説明することができる。したがって、心理過程の場合には **It is happy*のように喜怒哀楽を表現するもので主語に非生物はとれないと説明できる。SVCについてはさらに第７節にて言及する。

図１ではSVOCについて物質過程と関係過程の相互に関わる形で明記してあるが、これは「ある状態が生じるようにする」という意味であり、この二つの意味が混在していると説明する。この使役については他動性の観点からのみならず起動性（ergativity）による補完が更に必要になるが、本論では扱わない。

Halliday (1967)は自動・他動の別は動詞が決めるのではなく、節全体が決めると述べている。従来の５文型に意味的な分類としての過程型の概念を重ね合わせることで、同じ文型であっても使用される動詞や目的語・補語として機能する語彙項目の組み合わせにより具現化される意味に違いがあると明示することができる。

6. be動詞の機能

文型の問題と密接に関連して学生の理解に支障をもたらすと思われるのはbe動詞である。一般動詞とbe動詞の混在をする学生が多く、be動詞を「だ・です」と表層的にとらえてものが多い。従って、「この本は面白い」*This book is interesting*という英作文にbe動詞を使用

できない、あるいは反対に「彼は彼女が好きです」*He likes her*を**He is like her*とする誤用例等が多々見られる。

日本語の「だ・です」は断定や言い切りの助動詞として機能し、短絡的にbe動詞の日本語相当語彙として教示すると上記のような誤用を引き起こす原因となる。むしろbe動詞の意味とその用法について、第５節の文型と関連させながら「状態・様子」を示す語彙として提示することが望ましいのではないだろうか。すなわち、be動詞とは「存在している／ーという状態にある／ーという状態・役割でいる」、「SはCという状態・役割で存在している」という意味だと教示する。すなわちbe動詞はCとして具現される「状態」（形容詞句によって具現）や「役割」（名詞句によって具現）の状態で存在することを意味し、さらにSや助動詞と連結させるための「連結器」として機能するという説明をするのである。

またbe動詞を理解する上でもう一つ問題になるのが定性(Finite)機能と述語(Predicator)機能の融合である。定性は助動詞によって具現化され、節の時制、肯否極性、叙述／疑問を制御し主語(Subject)とともに叙法部(Mood)を形成し、動詞として具現化される述語は叙法構造には関与しない。図２では例として*John studies Japanese*の叙述、否定、疑問を示している。

叙述では３人称現在時制の*does*が定性として機能するが、その具現は動詞活用部の*-es*に担われている。しかし強調等においては*John does study Japanese*も可能であり、*does*が表出する。叙法部内の構成変化により否定では*not*が出現し、疑問では叙法部内の主語との語順転換が現れる。すなわち、叙法部内において肯定叙法は「主語^定性」、否定叙法は「主語^定性^not」、疑問は「定性^主語」によって明示される。図２における*study*のように、一般動詞の場合は述語として残余部に含まれ定性部には関与しないことが明確である。学生に教示する際にも節構成においては助動詞が基本的に内在し、その機能が時制、肯否、叙述／疑問と明示する事ができる。

<table>
<tr><td colspan="2">John</td><td colspan="2">studies</td><td colspan="2">Japanese.</td></tr>
<tr><td colspan="2">主語</td><td colspan="2">定性 叙述 現在 肯定</td><td>述語</td><td>補語</td></tr>
<tr><td colspan="4">叙法部</td><td colspan="2">残余部</td></tr>
<tr><td colspan="2">John</td><td colspan="2">does</td><td>study</td><td>Japanese.</td></tr>
<tr><td colspan="2">主語</td><td colspan="2">定性 叙述 現在 肯定</td><td>述語</td><td>補語</td></tr>
<tr><td colspan="4">叙法部</td><td colspan="2">残余部</td></tr>
<tr><td colspan="2">John</td><td colspan="2">does not</td><td>study</td><td>Japanese.</td></tr>
<tr><td colspan="2">主語</td><td colspan="2">定性 叙述 現在 否定</td><td>述語</td><td>補語</td></tr>
<tr><td colspan="4">叙法部</td><td colspan="2">残余部</td></tr>
<tr><td colspan="2">Does</td><td colspan="2">John</td><td>study</td><td>Japanese?</td></tr>
<tr><td colspan="2">定性 疑問 現在 肯定</td><td colspan="2">主語</td><td>述語</td><td>補語</td></tr>
<tr><td colspan="4">叙法部</td><td colspan="2">残余部</td></tr>
</table>

図２：叙法部と残余部

Be動詞も叙述では一般動詞のように定性と融合し、助動詞が述語を兼務していると考えられる。しかしながら図３が示すように、be動詞の場合は否定と疑問においてもこの融合が維持され、分離されることがない。

<table>
<tr><td colspan="2">John</td><td colspan="2">is</td><td colspan="2">kind.</td></tr>
<tr><td colspan="2">主語</td><td colspan="2">定性 叙述 現在 肯定</td><td>述語</td><td>補語</td></tr>
<tr><td colspan="3">叙法部</td><td colspan="2">残余部</td></tr>
<tr><td colspan="2">John</td><td colspan="2">is</td><td colspan="2">not</td><td>kind.</td></tr>
<tr><td colspan="2">主語</td><td colspan="2">定性 叙述 現在</td><td>否定</td><td>(述語)</td><td>補語</td></tr>
<tr><td colspan="4">叙法部</td><td colspan="2">残余部</td></tr>
<tr><td colspan="2">Is</td><td colspan="2">John</td><td colspan="2">kind?</td></tr>
<tr><td>定性 疑問 現在 肯定</td><td>述語</td><td colspan="2">主語</td><td colspan="2">補語</td></tr>
<tr><td>叙法部</td><td>残余部</td><td colspan="2">叙法部</td><td colspan="2">残余部</td></tr>
</table>

図 3: be 動詞の叙法部と残余部

*John is kind*という例で示されているように、*is*は定性としての機能が前面に現れ残余部との関係が不明瞭になってしまう。否定では、*not*の接続により述語の位置が空きと考えられ、節頭での出現により述語が主語の前に現れるという分析すら可能となってしまう。叙法部と残余部の不明瞭さが他の一般動詞との差別化をはかる際に支障となって理解を妨げる要因となっているのではないだろうか。

そこでこれを明示化するために、述語としてのbe動詞を設定し、図４のように分析すると、この不明瞭な問題は解決できる。すなわち定性機能を担う助動詞としてのbe動詞と述語動詞としての機能を担うbe動詞を分離するのである。本論ではこの二つを明示するために、助動詞としてのbe動詞を'BE'、述語動詞としてのbe動詞を'be'と表記し、特に区別をしない時には「be動詞」と表記することとする。

<table>
<tr><td colspan="2">John</td><td colspan="2">is</td><td colspan="2">(be)</td><td colspan="2">kind.</td></tr>
<tr><td colspan="2">主語</td><td colspan="2">定性 叙述 現在 肯定</td><td colspan="2">述語</td><td colspan="2">補語</td></tr>
<tr><td colspan="4">叙法部</td><td colspan="4">残余部</td></tr>
<tr><td colspan="2">John</td><td colspan="2">is</td><td>not</td><td>(be)</td><td colspan="2">kind.</td></tr>
<tr><td colspan="2">主語</td><td colspan="2">定性 叙述 現在</td><td>否定</td><td>述語</td><td colspan="2">補語</td></tr>
<tr><td colspan="5">叙法部</td><td colspan="2">残余部</td></tr>
<tr><td colspan="2">Is</td><td colspan="3">John</td><td colspan="2">(be)</td><td>kind?</td></tr>
<tr><td colspan="2">定性 疑問 現在 肯定</td><td colspan="3">主語</td><td colspan="2">述語</td><td>補語</td></tr>
<tr><td colspan="5">叙法部</td><td colspan="2">残余部</td></tr>
</table>

図4：be動詞の叙法部と残余部（改）

本来BEとbeが連続する場合にはbeが表層には具現化されないため（第８節を参照）、図４ではbeが括弧に括られている。BEとbeは融合されるが故に節の構成において不明瞭さが生じるのなら、両者の機能を分離して明示化することで英語の節における叙法部構成の機能について学生に明示化できるのではないかというのがこの図４の狙いである。これにより助動詞としてのBEは統語機能の時制、肯否定、叙述等を制御し、述語としてのbeは後続する補語を「連結」させる機能を持つと説明できる。またこの図により進行形や受動態に使用されるbe動詞はBEで、形容詞や名詞を後続させるものはbeであると教示できる。

7. SVC文型の意味分類

BEとbeを分離したこのモデルでは「両者の融合（あるいは機能の兼務）は一つのものが同時に二つの機能を担うのではなく、本来は述語動詞のbeもそこに存在し、それが助動詞の機能によって隠されて具現化しない」と仮定する。両者が兼務される最大の理由は「（ある状態・役割で）存在している」という意味機能が共通しているからであるが、beは後続する補語によってその伝達する意味と機能が変化する。いわゆるSVC文型で表現される節を補語との組み合わせで伝達される意味ごとにタイプ分けしたものが図５である。

タイプ	主語	定性	述語	補語	意味
タイプ 4	Mary	will	be	busy.	be以外の助動詞ではbeが表出
タイプ 3'	Mary	is	(be)	the singer.	S=Cが成立している。
タイプ 3	Mary	is	(be)	a teacher.	～という役割で存在している。
タイプ 2'	Mary	is	(be)	happy.	～という喜怒哀楽状態で存在する
タイプ 2	Mary	is	(be)	busy.	～という価値・状態で存在する。
タイプ 1	Mary	is	(be)	in Tokyo.	場所、状況下に存在する。
機能基底部	意味機能：（状態で）存在する 統語機能：助動詞 BE：時制、肯否定極性、叙述／疑問、述語動詞 beの兼務 統語機能：述語動詞 be：形容詞、名詞との連結				

図5：beと補語による意味タイプ

機能基底部にはすべてのタイプの基礎となるBEとbeに共通の意味機能と、それぞれに異なる統語機能が明示されている。タイプ1 では補語として前置詞句が現れ、beには連辞(copula)としての意味はない。このタイプ1において表示するのが場所や時間、状況である。基底部にある意味機能がもっとも直接的に現れている。

タイプ2では形容詞句を伴い、beが連辞(copula)の機能を担う。このタイプでは主語の属性（Attribute）を表示し、色、形態、性質、様態を表現する。このタイプでは形容詞の派生形として現在分詞や過去分詞を同様に考えることができる。分詞は形容詞として機能するのであるから、一例として*Anne is running in the park*という節において*running*を「走って

いる状態」と考えれば、進行形にbe動詞が使われる理由として「現在進行中の状態を表現するため」と説明でき、*The ball was kicked by Bob*のような受動態においては、「蹴られる状態」にあったという説明のしかたも可能ではないだろうか。タイプ2’も補語に形容詞句をとり、統語組成上はタイプ2と同一であるが、形容詞に感情の内容を示すものが選択される場合、観念構成的機能において変化が見られる。すなわち意味が「関係」を示すものではなく感情などを示す「心理過程」ととらえることが可能である[iv]。

タイプ3は後続するものが名詞句で主語の果たしている役割を表示する。ただしこの場合の名詞句は不定冠詞の使用が前提となり、その意味する内容はタイプ2に近く、その性質が名詞によって具現化されるものという意味である。タイプ3’では主語と補語の等位関係が成立し、役割や性質によって主語の同定がなされる。この場合は*Mary is the singer*の*the singer*のように補語として具現化される名詞句は定冠詞*the*によって修飾されなければならない。またこの定冠詞によって言及される意味が限定されるため、結果的に"S=C"という公式が成立する。英語の教科書によってはタイプ3とタイプ3’を混在し、両者ともに"S=C"という説明をするものがある。しかしタイプ3’では*The singer is Mary*のように主語と補語を相互に入れ替えても*the* において指示される内容がコンテクストによって同定できるために文意が成立するが、タイプ3においてはこの主語と補語の相互入れ替えは文意をなさない。

タイプ4はBE以外の助動詞が用いられるもので、述語としてのbeのみが表出する。意味的な機能はタイプ1からタイプ3’のものを全て担うが、統語的な機能から分離されるので残余部として区分できる。

SVCによって具現化される節においては叙述的な意味機能を主に担うのは形容詞句や名詞句であるが、形容詞や名詞自体に直接的な叙述機能がないために統語上beが必要になる。Be動詞が連辞(copula)と呼ばれ主語と補語をつなげる「連結語」と捉えられているが、視点を叙法部と残余部に据えれば、beは補語に具現される形容詞句または名詞句を叙法部に接続するための連結語であり、これらの叙述的用法を可能にさせているものと考えることができる。そしてこの連結語は叙述的用法に内包され、「be＋ 形容詞句」、「be＋ 名詞句」のセットとまとめて一つの単位として捉えるよう指導することで体系的にbe動詞について教示ができるのではないだろうか。そしてBEとbeが平行して最終的に表出しないのは下記の図６が例示する

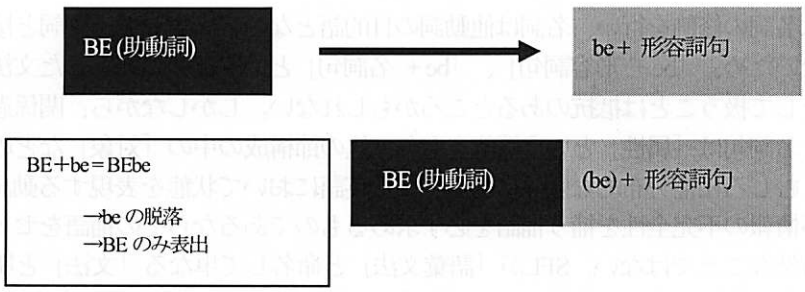


図６BE と be+形容詞句の結合

この図のように、BEが融合する場合「二つ同じ語彙が並ぶときには一つが脱落する」という経済性の理由により、音韻連鎖として現れないだけでその意味と統語的機能は内在し

たままである」と説明することができる。一方、図7のようにwill/canなどの助動詞は述語beと意味機能の融合がないのでbeは音韻としても表出し、その意味的機能も統語的も表層に具現化される。

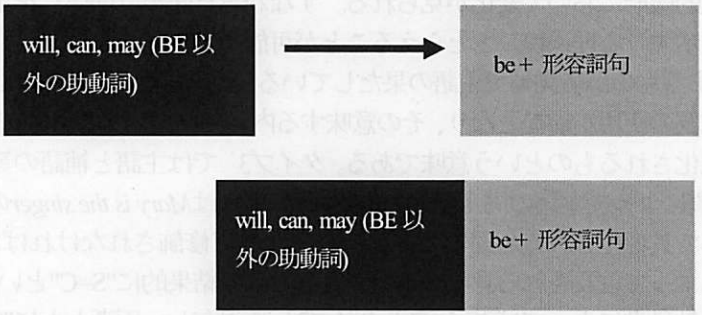


図7: BE 以外の助動詞と be＋ 形容詞句の接合

これらをまとめてBEとbeについては、例えば前者には「強いBE」、後者には「弱いbe」という名称を付加して、下記のように説明例が可能であろう。

Be 動詞には「強いBE」と「弱いbe」があり、前者をBE、後者をbeと表記します。現在と過去の「状態・様子」を表現する時には主語の後にBEをつけます。BEは主語の人数や示す人の性質（人称）、現在か過去（時制）によってその姿を変えます。BEの後には状態や様子を具体的に示した形容詞句／名詞句を接続します。ただし形容詞句／名詞句にはbeという連結部品が組み込まれています。BEとbeを二つ続けて表現すると"BEbe"と同じ語が重なってしまいますから、一つを省きます。BEが使われる時にはbe動詞は1つしか現れません。ところが、未来や可能性などを表現する時にはBEの変わりにwill, can等が使われます。この場合には連結機能のbeが現れるので *He can be kind* のように表現されるのです。

8. 単位化の意味するもの

形容詞は名詞の修飾を行い、名詞は他動詞の目的語となる。必ずしもbe動詞と接続されるものではないため、「be＋ 形容詞句」、「be＋ 名詞句」という二つの独立した文法項目を一つの単位として扱うことは抵抗のあるところかもしれない。しかしながら、関係過程の中の形容詞句と名詞句は「属性」という機能をもち、他の節構成の中の「対象」などの機能とは対立せず、むしろ相補分布的な関係にある。また英語において状態を表現する動詞がbeであり、それが情報の不完全性を補う補語を必ず求めるものであるならその補語をセット化することは不自然なことではない。SFLが「語彙文法」と命名して単なる「文法」と明確に差別化してるのは語彙が意味化をする要素として重要な働きを担うためである(Halliday 1985)。従って、本論で仮定した「be＋ 形容詞句」、「be＋ 名詞句」を一つの単位として提示することは、be動詞に相当する語彙文法形式が存在しない日本語母語環境では一つの有効な教示方法と考えられる。

Halliday (1964)は言語記述の方法はその応用をどのようにするかによって変わると述べている。本研究で提案したSVC文型の意味タイプや「be+ 形容詞句」の単位のように、日本の学習者に応用するという目的のために学習者の母語や教育環境等に最適化された記述文法、すなわち「教育用記述文法」を作成することはHallidayの主張に沿ったものと考えられる。またこれは昨今議論になっている大学生のリメディル教育に対しても新たなる可能性を提示することができるのではないだろうか。

参考文献

Butt, D., R. Fahey, S. Feez, S. Spinks and C. Yallop (2000) *Using Functional Grammar: An Explorer's Guide.* 2nd edition. Sydney: NCELTR, Macquarie University

Christie, F. and J. R. Martin (eds.) (1997) *Genre and Institutions.* London: Continuum.

Cope, B. and M. Kalantzis. 1993. *The Powers Of Literacy: A Genre Approach to Teaching Writing.* University of Pittsburgh Press.

Derewianka, B. (1990) *Exploring How Texts Work.* Sydney: PETA

——— (1998) *A Grammar Companion for Primary Teachers.* Sydney: PETA

Foley, J. (ed.). (2004) *Language, Education and Discourse.* London: Continuum.

Foley. J. and C. Lee. (2004) "A Framework for Tracing the Development of Children's Writing in Primary Schools". In J. Foley (ed) 2004.

Halliday, M.A.K. (1964) 'Syntax and Consumer'. in C.I.J.M. Stuart (ed.) *Report of the Fifteenth Annual (First International) Round Table Meeting on Linguistics and Language Study.* Washington D.C.: Georgetown University Press. pp.11-24.

——— (1967) *Grammar, Society and the Noun (lecture given at University College London on 24 November 1966).* London: University College London and H.K. Lewis

——— (1978) *Language as social semiotic.* London: Arnold.

——— (1985). "Systemic Background" in J. D. Benson and W. S. Greaves (eds.) *Systemic Perspectives on Discourse* Vol.1. pp.1-15.

Halliday, M.A.K., A. McIntosh and P. Stevens. (1964) *The Linguistic Sciences and Language Teaching.* London: Longmans.

Halliday, M. A. K. and J. R. Martin. (1993) *Writing Science: Literacy and Discursive Power.* London: Palmer.

Halliday, M.A.K. and C.M.I.M. Matthiessen. (2004) *An Introduction to Functional Grammar 3rd Edition.* London: Arnold

早川知江 (2007) 「日本の英語教科書にみられるジャンル」 *Proceedings of JASFL* 1.

伊藤克敏 (2005)「最近の外国語教育法の展開—応用言語学との関連で—」『言語研究と英語教育』vol.7. pp.1-8、名古屋：中部応用言語学研究会

伊藤健三、島岡丘、村田勇三郎(1982) 『英語学大系第12巻：英語学と英語教育』東京：大修館書店

Martin, J. R. and R. Veel (eds.) *Reading Science.* London: Routledge.

佐々木真 (2001) 「選択体系機能文法の英語教育への応用: 節、過程中核部、主題の分

析による作文の評価」、 *JASFL Occasional Papers* vol.2 no.1 pp. 73-98

——— (2006) 「英語の文法的比喩とその英語教育への応用について」、 愛知学院大学短期大学部研究紀要 14 号 pp. 47-61

Sasaki, M. (2008) "On Genre and its Application to English Education in Japan" 『Ergo』 (愛知学院大学短期大学部英語コミュニケーション学科閉科記念論集 pp.193-217

田中慎也 (2007) 『国家戦略としての「大学英語」教育』東京：三修社

龍城正明 (編) (2006) 『ことばは生きている』東京：くろしお出版

Ventola, E. (1989) "Problems of modeling and applied issues within the framework of genre". Word 40.

Williams, G. (1994) *Using Systemic Grammar in Teaching Young Learners: An Introduction.* Melbourne: Macmillan Education Australia

---

[i] 本論は2008年10月12日、日本機能言語学会第16回秋期大会での発表を基としているが、その後の研究成果による加筆修正をしている。

[ii] S=主語、V=動詞、O=目的語、C=補語の略号を本論でも使用する。

[iii] *I'm happy* のように明らかに自分が心理的な面を推し量ることが可能な対象であれば心理過程に入れることができるが、*He was happy* のようにそれが客観的にしか観察できない場合であれば心理過程ではなく関係過程の可能性も生じる。

[iv] 関係過程と心理過程の解釈と判断についてはHalliday & Matthiessen (2004)がその指標として（1）下位前修飾、（2）有標の局面、（3）時制、（4）節構造の違いをあげている。

JASFL Occasional Papers

Volume 1 Number 1 Autumn 1998

Articles（論文）

Thematic Development in *Norwei no Mori*: Arguing the Need to Account for Co-referential Ellipsis 5
ELIZABETH THOMSON

Synergy on the Page: Exploring *intersemiotic complementarity* in Page-based Multimodal Text 25
TERRY ROYCE

Intonation in English - Workshop 51
WENDY BOWCHER

日本語の「主語」に関する一考察 69
On the Definition of "Subject" in Japanese
塚田浩恭　HIROYASU TSUKADA

イデオロギー仮説の落とし穴 79
Theoretical Pitfall in the Ideology Hypothesis
南里敬三　KEIZO NANRI

談話の展開における「観念構成的結束性」と書記テクストの分類 91
'Ideational Cohesion' in Discourse Development and in the Classification of Written Text
佐藤勝之　KATSUYUKI SATO

英語における節の主題：選択体系機能理論におけるメタ機能の視点からの再検討 103
Theme of a Clause in English: A Reconsideration from the Metafunctional Perspective in Systemic Functional Theory
山口　登　NOBORU YAMAGUCHI

JASFL Occasional Papers

Volume 2 Number 1 Autumn 2001

Articles（論文）

Linguistic Analysis and Literary Interpretation 5
RICHARD BLIGHT

A Note on the Interpersonal-Nuance Carriers in Japanese 17
KEN-ICHI KADOOKA

Schematic Structure and the Selection of Themes 29
HARUKI TAKEUCHI

Theme, T-units and Method of Development: An Examination of the News Story in Japanese 39
ELIZABETH ANNE THOMSON

セミオティックベースとそれを利用したテクスト処理について 63
The Semiotic Base as a Resource in Text Processing Systems
伊藤紀子、小林一郎、菅野道夫
NORIKO ITO, ICHIRO KOBAYASHI AND MICHIO SUGENO

選択体系機能文法の英語教育への応用：節、過程中核部、主題の分析による作文の評価 73
Applying Systemic Functional Grammar to English Education: Evaluating the Writing of EFL Students Base on the Analysis of Clause, Process and Theme
佐々木真　MAKOTO SASAKI

日本語の対人的機能と「伝達的ユニット」—The Kyoto Grammar による分析試論— 99
The Interpersonal Function and the Communicative Unit for Japanese: From the Approach of "The Kyoto Grammar"
船本弘史　HIROSHI FUNAMOTO

日英翻訳における Theme に関する課題 115
Thematic Challenges in Translation between Japanese and English
長沼美香子　MIKAKO NAGANUMA

テクストの中の母性 129
Maternity in Text
南里敬三　KEIZO NANRI

JASFL Occasional Papers

Volume 3 Number 1 Autumn 2004

Articles（論文）

Lexicogrammatical Resources in Spoken and Written Texts 5
CHIE HAYAKAWA

On the Multi-Layer Structure of Metafunctions 43
KEN-ICHI KADOOKA

An Attempt to Elucidate Textual Organization in Japanese 63
KEIZO NANRI

A Comparative Analysis of Various Features Found in Newspaper Editorials and Scientific Papers, Including 'Identifying Clauses' 81
MAKOTO OSHIMA AND KYOKO IMAMURA

Constructions of Figures 93
KATSUYUKI SATO

Technocratic Discourse: Deploying Lexicogrammatical Resources for Technical Knowledge as Political Strategies 105
KINUKO SUTO

Application of Syntactic and Logico-semantic Relationships between Clauses to the Analysis of a Multimodal Text 157
HARUKI TAKEUCHI

An Analysis of Narrative: its Generic Structure and Lexicogrammatical Resources 173
MASAMICHI WASHITAKE

選択体系機能言語学に基づく日本語テクスト理解システムの実装 189
Implementation of a Japanese Text Understanding System Based on Systemic Functional Linguistics
伊藤紀子、杉本徹、菅野道夫
NORIKO ITO, TORU SUGIMOTO AND MICHIO SUGENO

タスク解決に関する対話における修辞構造を用いたステージの規定 207
The Definition of Stages Using Rhetorical Structure in Dialogue on Task Solutions
高橋祐介、小林一郎、菅野道夫
YUSUKE TAKAHASHI, ICHIRO KOBAYASHI AND MICHIO SUGENO

外国為替記事のドメインのモデル化一機能的分析 225
The Domain Modelling of Foreign Exchange Reports: a Functional Analysis
照屋一博 KAZUHIRO TERUYA

Japanese Journal of Systemic Functional Linguistics

機能言語学研究

Vol. 4

April 2007

Articles

文法的メタファー事始め 1
The Grammatical Metaphor As I See It
安井　稔
Minoru Yasui

A Systemic Approach to the Typology of Copulative Construction 21
Ken-Ichi Kadooka

Text structure of written administrative Directives in the Japanese
and Australian workplaces 41
Yumiko Mizusawa

A case study of early language development:
Halliday's model (1975) of primitive functions in infants' protolanguage 53
Noriko Kimura

日本語ヘルプテクストへの修辞構造分析と対話型ユーザ支援システムへの応用
An Analysis of Rhetorical Structure of Japanese Instructional Texts and its Application to
Dialogue-based Question Answering Systems 83
伊藤紀子、杉本徹、岩下志乃、小林一郎、菅野道夫
Noriko Ito, Toru Sugimoto, Shino Iwashita, Ichiro Kobayashi, Michio Sugeno

Japan Association of Systemic Functional Linguistics

PROCEEDINGS OF JASFL

Vol.1 October 2007

Articles

日本語テクストにおける過程構成の統計的分析 1
藤田 透

『羅生門』の研究 ー物質過程を中心にー 9
鷲嶽正道

日中・中日翻訳におけるテクスト形成的機能：
「出発点」の特徴に関する対応分析 19
鄧 敏君

日本語テクストにおける Theme の有標性への視点 31
長沼美香子

サイコセラピーにおけるクライアントの洞察と談話の結束性との連関 45
加藤 澄 、エアハード・マッケンターラー

米国の煙草の広告の Reading Path 59
奈倉 俊江

アスペクト表現における対人的機能の考察 65
船本弘史

「日本語を母国語とする幼児における Primitive functions (Halliday 1975) 75
の出現と使用に関するケーススタディ」
木村紀子

日本の英語教科書にみられるジャンル 89
早川 知江

The Role of Genre in Language Teaching: The Case of EAP and ESP 105
Virginia M. Peng

Texts, Systemics and Education 115
An Expansion of a Symposium Contribution to the 2006 JASFL Conference
David Dykes

Japan Association of Systemic Functional Linguistics

PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 2 October 2008

Articles

The Kyoto Grammar の枠組みによる品質を表す形容詞の分析 1
藤田 透

日本語助動詞の研究：多義性から多機能性へ 11
船本 弘史

Grammatical Intricacy, Genre, Language Function and Pedagogy 23
Howard DOYLE

日本語・英語の「説得」：観念構成的意味を中心に 39
佐藤（須藤）絹子

Are There Modal Imperatives? — Just Someone Dare Say No! 51
David DYKES

英語教育におけるジャンルと過程型 67
早川 知江

サイコセラピーにおける問題の外在化のための語彙-文法資源 83
加藤 澄

日本語テクストの Subject と Predicate の役割に対する一考察 97
水澤 祐美子

Honorifics and Interpersonal Function 107
Mirosława KACZMAREK

イデオロギーの復興 123
南里 敬三

「は」と「が」そのメタ機能からの再考 135
龍城 正明

Japan Association of Systemic Functional Linguistics

機能言語学研究

JAPANESE JOURNAL OF SYSTEMIC FUNCTIONAL LINGUISTICS

第5巻　2009年

論文

An Analysis of Intonation from the Viewpoints of Strata and Metafunctions 1
Ken-Ichi KADOOKA

An Analysis of the Polysemy of Processes Realised by Japanese Adjectives: 17
The System Network for Process Types in the Kyoto Grammar
Toru FUJITA

日本語の新聞報道記事のジャンル構造 33
鷲嶽　正道

Genre-Based Approach to Teaching Tense in English Classes: 47
Tense in Art Book Commentaries
Chie HAYAKAWA

Interpersonal strategies of ENGAGEMENT in Public Speaking: 69
A Case Study of Japanese and Australian Students' Speech Scripts
Keiko OZAWA

「話し言葉らしさ・書き言葉らしさ」の計測 89
－語彙密度の日本語への適用性の検証－
佐野　大樹

語彙的意味の共有度より導かれる治療アプローチの違いと 103
サイコセラピーにおけるテクスト性の捉え方
加藤　澄

Concession and Assertion in President Obama's Inauguation Speech 131
David DYKES

Proceedings of JASFL

For information about JASFL, visit the website:
http://www2.ocn.ne.jp/~yamanobo/jasfl.html

2009 年 10 月　1 日　印刷
2009 年 10 月 10 日　発行

日本機能言語学会

発行者　　龍城　正明
編集者　　角岡　賢一

編集所　（龍谷大学）
〒 612-8577
京都市伏見区深草塚本町 67
電話　075 642 1111

PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 3 October 2009

Articles

Two Ways of Interpreting Classical Chinese 1
— Traditional Japanese Reading and that of Princeton University —
Katsuyuki SATO

Critical Discourse Analysis of ESL/EFL Textbook 15
Satoshi ABE, Mayumi TANAKA

Genre and Education of English: 25
Patterns of Lexicogrammatical Choices in Art Books
Chie HAYAKAWA

Realizations of Process Types by the Japanese Verbs and Adjectives: 39
An Analysis Using the System Network in the Kyoto Grammar
Toru FUJITA

Functions of the Zero-particle in Japanese 49
— Focusing on its Thematic Character —
Kazuo FUKUDA

Construction of an Experiential Grammar in Japanese 59
Keizo NANRI

On Application of SFL to English Education in Japan: 73
Focusing on the Five Sentence Patterns and 'Be'
Makoto SASAKI

Japan Association of Systemic Functional Linguistics